

西周式土器成立の背景（下）

西江清高

はじめに

- 一 渭河流域出土の鬲の系統
 - 二 西周前期の土器
 - 三 A類鬲を主体とする土器群（土器群A）の変遷
 - 四 B類鬲を主体とする土器群（土器群B）の変遷
 - 五 C類鬲を主体とする土器群（土器群C）の変遷（以下本冊）
 - 六 土器群の分布と相互関係
 - 七 西周式土器の系譜
- おわりに

五 C類鬲を主体とする土器群（土器群C）の変遷

第一節で述べたように、C類鬲は殷系の鬲に属する。西周王朝以前の関中地方には、このC類鬲とそれともなう各種の殷系土器を主体に構成された土器の伝統が継続していた。これを土器群Cと呼ぶ。以下に、C類鬲の変遷を軸に、この土器群Cを編年的に捉え、その性格を検討したい。

編年の作業は、量的に十分とは言えない現有の資料状況を考慮しつつ、基本的には土器群Bと同じ次の手順で進める。①遺跡ごとに発掘者により提示されている分期（層位的根拠をもつ場合と、主として遺物の内容のみによる場合がある）を点検し、必要に応じて分期の単位を統合または細分する。そして、一遺跡単位ないし遺跡内の分期された単位ごとに土器の組成を確認する。また、それぞれの単位にともなう殷文化中心地のそれと比較できる青銅器などの年代観についても同時に検討しておく。②各遺跡、各分期単位を通じて主要な土器であるC類鬲を、形式・型式に分類し、その変遷の段階を設定する。③C類鬲の段階を軸に、他の器種の変遷を併せ考え、遺跡ないし遺跡内の分期を土器の共時的単位としてまとめた土器群Cの「時期」を設定する。④各時期の土器、特にC類鬲を、殷文化中心地域の土器の段階と比較し、相伴する青銅器の年代観と併せて土器群Cの「時期」を年代的に位置づける。

なお、本来生活址と墓出土の土器を分けて検討する必要があるが、現状では資料の不足と片寄りがあるため、ここではその点に留意しつつ一括的な扱いをする。

(1) 土器群Cを主体とする主な遺跡

● 耀県北村遺跡

耀県城の北約三〇km、関中地方の北部縁辺に位置する。その北側には渭北高原が広がる。一九八四年、北京大学によって調査され、殷代の生活址と墓が発掘された^①。報告者の徐天進氏は、灰坑、窯址、墓の切り合い関係と、遺構と包含層との層序関係に基づいて遺構を6段階(組)に分離し、一方、出土した土器を器種別の型式組列と一括遺物による共時性を根拠に、やはり6段階(組)に分離する。そして層位と土器型式に基づくそれぞれの6段階が対応することを示した上で、各段相互の土器相の類似性が高いものをまとめて6段階を3期にまとめる。そして3期がそれぞれ、二里岡下層、上層(およびやや晩期)、殷墟Ⅰ、Ⅱ期に並行すると整理している。段階の設定は、殷文化中心地域の編年に対応させた枠組みを強調したものとなっているが、示された土器の変遷観、年代観は正確なものと看取できる。ここでは、徐氏の3期分期(本稿では以下Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで表示)にしたがって要約する。

北村Ⅰ IY1、IH8、IH9、IH13の一括遺物がある。標準的な土器である。器種に、C類鬲、花辺罐、盆、甗、釜、少量の豆、簋がある。C類鬲、盆、豆の3器種は、いずれも二里岡下層の典型的な同器種に類似し、北村Ⅰの年代を示す。いわゆる花辺罐に類似する土器は、龍山文化期以降の華北西北部のかなり多くの地域で知られるが、北村のそれは二里頭文化二里頭類型にともなう例に比較的近いと言える。北村ではその量も多く、3期を通じて継続する主体的な土器の一器種である。紋様は、縄紋が主体であるが、方格紋、雲雷紋など青銅器の紋様に通じる印紋の類が含まれる。

北村Ⅱ I H 2、H 5、H 6、H 7、H 10、H 14、H 15、H 16、H 18、I M 1、M 2、Ⅲ H 5の各遺構の一括遺物。器種は、北村Ⅰに見られたもののほか、大口尊、壺、鼎が知られる。豆、甗は数量が増加する。鬲、盆、篋、豆、甗、瓮、壺、鼎など多くは二里岡上層の典型的な形態に類似する。また一部は、やや遅い藁城台西村の土器にも近似し、北村Ⅱの遅い段階が、二里岡期より若干下がる可能性を示唆する。紋様では、獸面紋、円圈紋が加わり、盛行する。

北村Ⅲ 徐天進氏の細分にしたがって、この時期を前段と後段に分ける。I H 12、H 17、I M 3（以上前段）、I 探方3層、Ⅱ探方3層～8層（以上後段）の各一括遺物が知られる。器種は、大口尊が見られない点を除き、北村Ⅱから大きな変化はない。盆と花辺罐が減少する。鬲、盆、甗、豆、瓮はいずれも殷墟Ⅰ、Ⅱの中に類似する例を指摘でき、北村Ⅲの年代を示す。印紋の類は減少し、特に方格紋、円圈紋はほとんど見られなくなる。

●華南南沙村遺跡

一九五六年に発見され、五八年に北京大学が試掘を行ない、八〇年に西北大学が分布調査によって若干の土器片を採集している^③。層位的根拠をもって下層と上層に分離される（以下Ⅰ、Ⅱ）。灰坑、窯址など生活址関連の遺構や包含層が発掘されているが、墓は検出されていない。

南沙村Ⅰ H 3、H 4、H 11、H 12。C類鬲、甗、罐、花辺罐、鶏冠耳罐、大口尊、缸形器など。大口尊、缸形器、鶏冠耳罐などは二里岡下層に類似する土器が見いだせる。花辺罐は北村Ⅰ、Ⅱに盛行するそれと同じ器種であるが、形態に異なる点もあり、二里頭文化に見られた花辺罐により近い特徴も認められる。土器の様相は単純に北村のそれと一致するものではない。

南沙村Ⅱ Y 1、H 1、H 2、H 5～10、H 13～15。C類鬲、甗、甗、罐、瓮、大口尊、篋、豆、鼎、缸形器、盆、

鉢（碗）、刻槽盆（澄濾器）、釉陶片など。鬲、罍、簋、大口尊、盆、豆など大半の土器は、二里岡上層の土器形態とよく一致する。南沙村Ⅱの土器の組成と年代は基本的に北村Ⅱに一致するが、鬲、豆などの主要土器は、北村より一層殷文化中心地域のそれに近い特徴が指摘できる。土器群Cの中の地域的差異を示すものかどうか、今後の関連資料の増加を待つ必要がある。

なお、一九八〇年採集の鬲片の中に、明らかに時期の下がるものが若干含まれる。南沙村遺跡が殷墟Ⅰ前後にも続いたことを示唆する資料である。しかし、この資料は南沙村Ⅱの範囲には含めず、また資料が断片的であるので、遺跡内の分期としては設定しない。

● 藍田懷珍坊（懷貞坊）遺跡

一九七三年に青銅器が発見され、七八年には陝西省文化局により試掘が行なわれた。遺跡は滻河と瀾河の間の白鹿原にあり、後述の瀾河下流の老牛坡遺跡とはわずか十数kmの近距離にある。墓と灰坑、および出土遺構不詳の土器が紹介されている。銅滓が出土するなど、鑄銅址の存在が推測される。

土器は、灰坑からC類鬲、甗、簋、盆、罐など、墓からC類鬲、簋、鉢（碗）、罐などが出土し、その他遺構不明の土器片として、大口尊、花辺罐、瓮などが知られる。器種の構成は、基本的に北村、南沙村と同じく殷系土器群のそれに属することは明らかである。

C類鬲は、徐天進氏が指摘するように二里岡下、上層期に相当するものが含まれるほか、鬲M2・1、採・11の2点は、二里岡上層よりやや遅い台西村第二期墓⁵ないし殷墟Ⅰ前後の形態に近いとみなされる。M2・1を出土した墓は、隣接する他の墓より「層位較高」の位置から検出されている。遺跡の遅い段階の年代を示唆していよう。簋、瓮、

大口尊などは、ほぼ二里岡下、上層に相当する。

なお、七三年に出土した丸底、円錐状三足の銅鼎⁶⁾は、二里岡上層期から台西村一、二期ないし殷墟I前後に相当する青銅器である。

●武功柴家嘴遺跡

武功県内の漆水河西岸に所在する。漆水河下流周辺に対する一九七九年の中国社会科学院考古研究所⁷⁾と、八三年の宝鶏考古工作队による一般調査および小規模な発掘で土器が採集されている⁸⁾。遺跡の所在地が、本稿で言う土器群A主体の遺跡が集中する一帯であることから、宝鶏工作隊の報告では同遺跡を土器群A主体の鄭家坡遺跡などと同列に紹介しているが、実は漆水河河岸の遺跡としては数少ない、C類鬲やA・C折衷形式の鬲を出土した土器群C主体の遺跡と考えられる。

出土した鬲には、C類鬲が2点(七九年の柴³⁾、八三年の柴家嘴²⁾、口縁部がC類鬲と共通し、三足部がA類鬲に通じるA・C折衷形式鬲が3点(七九年の柴¹⁾、²⁾、八三年の柴家嘴⁸⁾、それにA類鬲1点(八三年の柴家嘴⁹⁾)が知られる。このうち、後述のC類鬲の変遷からみて、七九年採集の柴¹⁾、²⁾、³⁾は八三年採集の3点より年代が若干古いとみられるが、資料が少なく、柴家嘴遺跡内での分期は考えない。柴家嘴²⁾の鬲(図20-20)について、報告者は型づくりで成形されたことを明確に指摘しており、C類鬲に属することを示している。なお、以上とは別に柴家嘴で口縁に波状の刻みを施す一種の袋足鬲が1点(八三年の柴家嘴¹⁾)発見されている。この鬲は形態がやや特殊で、袋足鬲と言っても前節に述べたB類鬲の諸形式とは相違している。その性格は今のところはっきりしないが、後述の壹家堡にも出土する特異な袋足鬲と関係があると考えられる。その口縁端部直下の刻み目には、他

の柴家嘴の冨との共通点も認められ、時期的には同じものと考えられる。

●扶風壹家堡（益家堡）遺跡⁹

同遺跡については、論文（上）第四節で、一九八六年の北京大学による発掘成果の簡単な紹介¹⁰を根拠に、壹家堡ⅠⅡⅢに分期できることを述べた。その後、発掘簡報¹¹が公刊されたので、ここであらためて分期の内容を確認しておく。

壹家堡遺跡は、扶風県城の南西三・五kmにあり、鳳雛などいわゆる周原遺跡の中心地より南に一五kmばかり離れている。北京大学の発掘では、土器群Aを主体とする第3層（第四期）、土器群Bを主体とする第4層（第二期）、第4層の下面に検出された土器群C主体の灰坑H33（第一期）の層位関係を軸に、第三期の土器包含層より早期に属すると推定できるH25（第二期）を加え、全部で4期に区分している。しかし、その第二期については、得られた層位的根拠が十分ではなく、特に一期との層序が明確でない。土器の内容からみると、発掘簡報の一期↓二期の間には、土器の組成に重要な変化は認められるが、一方では両期の連続性も明確である。これに対して、二期↓三期、三期↓四期では土器の様相がきわめて不連続な関係になっている。そこで本稿は、簡報の一期と二期を壹家堡Ⅰの前段、後段として大きくは一つの時期にまとめ、簡報の三期を壹家堡Ⅱ、四期を壹家堡Ⅲとする。この壹家堡ⅠⅡⅢの区分は、論文（上）で簡単に提示しておいたⅠⅡⅢと同じ内容を捉えており、論文（上）の分期に変更はない。

北京大学の発掘では、墓は検出されなかったが、これとは別に扶風県博物館も試掘と表採を行っており、そこで窯址、灰坑に加えて墓が検出され、墓出土の土器が若干知られた¹²。また徐天進氏も同遺跡で表採を行なっている¹³。この二つの調査で得られた土器は、壹家堡Ⅰ前段と後段の範囲に相当する。

各時期の土器の組成は以下のようなものである（図16）。

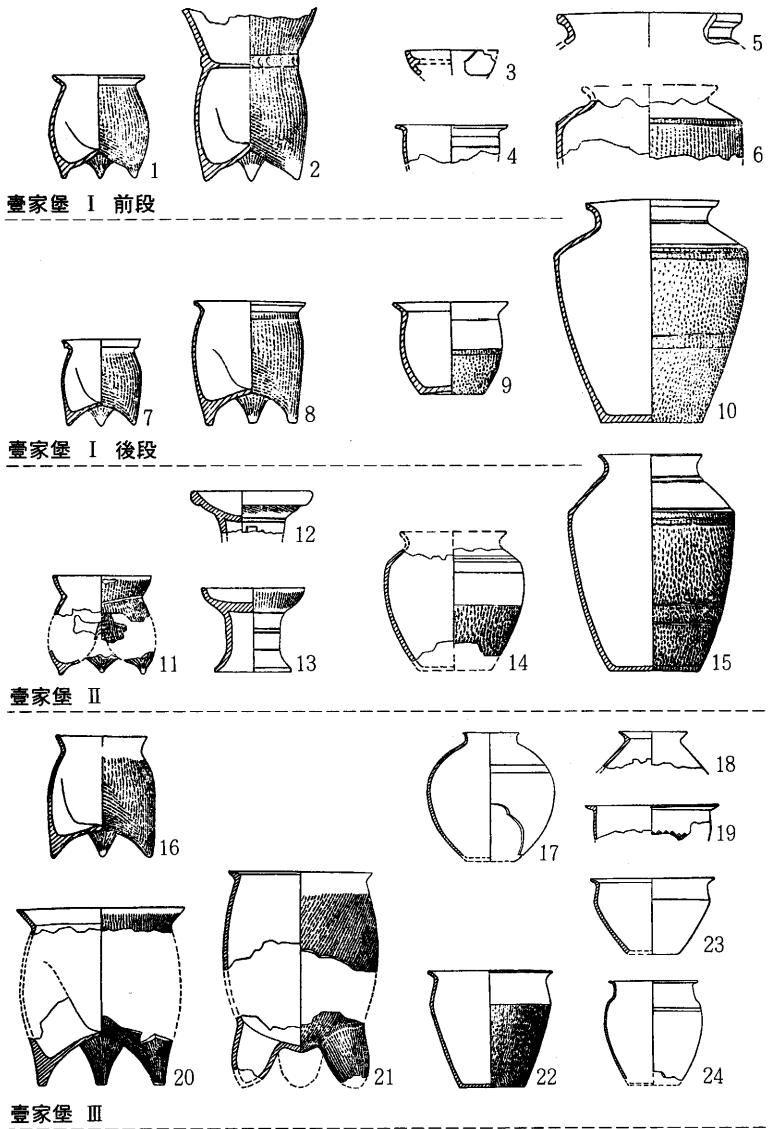


図 16 壹家堡遺跡出土土器 (1-16は 1/12, 17-24は 1/16)

壹家堡Ⅰ前段 簡報の第一期。灰坑H33出土土器を標準とする。扶風県博物館の採集土器の一部もこの段階に入る。器種として、C類鬲（簡報の折襠鬲）、折肩罐、盆、甗、豆、簋などがある。ほかに、A類鬲（簡報の弧襠鬲）の残片と、系統不明の袋足鬲（簡報は細線状縄紋尖襠鬲と称する）¹⁵がともなう。C類鬲はこの時期の代表的な土器である。折肩罐は、広口で、口縁端部が肥厚し、肩部と胸部が明瞭に強く折れる。これは、土器群A、土器群Bそれぞれに特徴的だった折肩罐とは相違し、土器群Cの特徴ある土器と考えられる。甗はC類鬲と共通する分襠の三足部をもつ。豆にはいわゆる仮腹豆と真腹豆の二つのタイプがあり、少なくとも仮腹豆は股系の豆であり、土器群Cの土器である。簋は断片的資料にすぎないが、北村Ⅲに類似例が知られるやはり土器群Cの土器と考えられる。以上のように、この段階は股系の土器群Cを主体とする組成をもち、これに若干の土器群A（A類鬲残片）の要素と、系統不明の袋足鬲が含まれる内容となっている。

壹家堡Ⅰ後段 簡報の第二期。H25を標準とする。扶風県博物館発掘の墓M3などもこの段階に入る。器種として、A類鬲、折肩罐、盆、甗および少量のC類鬲、仮腹豆、一種の袋足鬲（Ⅰ前段と同じタイプとみられる）などがある。鬲はA類鬲が主体であるが、このA類鬲の中にはA・C折衷形式が含まれる。鬲以外の器種は基本的にⅠ前段の土器群Cの土器を継承している。

壹家堡Ⅱ 簡報の第三期。遺跡第4層に包含された土器。墓の土器は知られていない。器種は、B類鬲、折肩罐、豆、ほかに少量のA類鬲、盆、甗などがある。B類鬲は、2点紹介されているが、本稿のB類鬲Ⅱa3、Ⅱa4形式に相当し、土器群BのⅡⅢ期の間に位置づけられる。折肩罐は、土器群Bに特徴的なタイプ（論文（上）八一頁、図10）に属すると考えられるが、壹家堡Ⅰの土器群Cの折肩罐の影響も認められる。豆は、土器群Aに見られる浅い

広口の器身をもつそれとは異なる。口縁の肥厚など、殷系の豆の影響も考えられるが、器身下面の縄紋と脚部の方形の透孔は土器群B主体の碾子坡I生活址の豆に共通しており、土器群Bに特有の豆と考えられよう。¹⁷⁾なお、紋様として方格乳釘紋が含まれると言う。これは土器群AのII期で盛行している紋様であり、年代関係の参考になる。

壹家堡Ⅲ 簡報の第四期。遺跡第3層に包含された土器。墓の土器は知られていない。器種として、A類鬲、折肩罐、円肩罐、盆、尊、甗、三足釜、ほかにC類鬲の一種とみられる残片が含まれるが性格ははっきりしない。鬲の大半を占めるA類鬲は、土器群AのⅢ1〜Ⅲ2期のそれに相当する。図16-16は、円筒状の胴部にくびれた頸部をもつ特徴あるタイプで、扶風北呂遺跡で盛行するものと同じ形式に属する(77頁、図27-14参照)¹⁸⁾。折肩罐、円肩罐、盆、尊は、やはりいずれも土器群AのⅢ1〜Ⅲ2期に見られる典型的な土器である。尊は図16-24と22のタイプがあり、前者は土器群AⅢ1期の例が知られ、後者は『灋西』生活址早期にともなう例に近い。¹⁹⁾三足釜は、後述するようにもとと陝北方面の系譜をひく土器とみられるが、やはり『灋西』生活址早期にともなう例がある。

以上のように、壹家堡Iは土器群Cが主体で、その後段では土器群AのA類鬲が増加して大きな割合を占めている。壹家堡IIでは、土器群B主体の様相に一変し、²¹⁾これに土器群A、土器群Cの若干の土器ないしその要素が含まれる。壹家堡IIIではさらに土器群A主体の様相に大きく変化している。

年代については、壹家堡IIが土器群BのII〜III期(殷墟Ⅲ〜IV前半頃)、壹家堡IIIが土器群AのⅢ1〜Ⅲ2(殷墟IV前半〜西周Ia並行)に相当すると考えられる。壹家堡Iはしたがって殷墟Ⅲを遡ると考えられる。壹家堡Iの様相は、殷系土器としては、全体として二里岡上層より下がることは確かであり、その鬲は、北村Ⅲに並行する殷墟I、II頃とみられよう。²²⁾なお、扶風県博物館が採集した銅鼎1点が知られる。丸底、円錐状三足の形態は前述の藍田懷珍

坊のそれと同形式であるが、下部がやや張った胴部と、先端に丸みが生じた三足は、懷珍坊より年代が下がる殷墟Ⅰ前後と考えられよう。

壹家堡ⅠⅡⅢの様相はきわめて不連続で、相互に鮮明に分離できる。同一地点におけるこの状況は、土器群A、B、Cが異なる系統に属し、異なる動向を示す土器群であることを傍証するとともに、そうした3系統の土器群が、周原地区の周辺でその勢力を展開した先後関係を示す重要な情報を提供している。

●扶風白家窯水庫遺跡

鳳雛など周原遺跡の中心部から南に約10km離れた地点で、一九七三年に一墓の遺物が出土し、また七六年に灰坑の土器が一括出土した。⁽²³⁾

墓からC類鬲、尊、罐が、灰坑から仮腹豆が出土しており、殷系の土器群Cの組成をもつ。鄒衡氏は、鬲と仮腹豆は河北藁城台西村のそれに類似し、「殷墟文化第一期」ないしやや早い一群と評価する。⁽²⁴⁾ 筆者の判断もほぼこれと同じで、年代は北村Ⅲの前段に近いと考える。

●岐山賀家村Ⅰ

岐山賀家村周辺では、前節で述べたように西周直前の時期に土器群A、B共存の墓域が展開し、つづいて西周式土器の墓が広く形成されるが、これらの墓群と同じ範囲の一角に、土器群Cを出土し、また明らかに年代の上がる別グループの墓が知られる。これを賀家村Ⅰとしてまとめる。

一九七六年に発掘された西周墓群(賀家村西北第一地点)⁽²⁵⁾に混ざって、西周墓より明らかに小型で、墓壙長軸の方位も異なり、西周墓とは異質な76QH116、76QH135の2墓と⁽²⁶⁾、同地点で採集された鬲1点(採集…5)がある。

また、別地点の、六三年発掘墓群中のM26、M45²⁷⁾がこれに含まれる。

七六年の発掘では、76 QHN¹⁶⁾、135から、C類鬲I、平底罐2が出土し、付近で採集された鬲(採…5)もC類鬲であった。これらの鬲は、壹家堡I、白家窯、および北村II(その遅い段階)とIII(前段)の例に近く、ほぼ殷墟I前後に並行するとみなされる。平底罐は北村遺跡に多く見られる花辺罐に属するもので、北村IIとIIIの段階に相当する。一方、六三年発掘のM26、M45からは、平底罐(報告のI、II式罐)が出土しているが、これらは、76 QHN¹⁶⁾、135出土の平底罐に後続する型式と考えられ、やはり花辺罐に属する。

●岐山王家嘴遺跡

周原遺跡の中心部である鳳雛付近から南に約一・五kmの地点に所在する。徐天進氏が自身の表採資料と、同地点出土の西北大学歴史系陳列室収蔵の豆1点を紹介している。²⁸⁾遺構については知られていない。器種として、C類鬲、小口瓮、仮腹豆がある。鬲は、北村II(その遅い段階)とIIIに近く、仮腹豆は、徐氏によれば北村のIII前段相当である。

●西安老牛坡遺跡

西安市の中心から東に約二七km、灃河北岸の台地上に所在する。東西一km、南北五百mの範囲に広がる。遺跡を切る2本の溝を基準に、西から東にIとIIIの3区に分けられ、一九八五年以来、西北大学によって調査が進められている。現在までに少なくともI、II区で大型の建築基壇が2箇所、近くのI区南部で青銅器製作址、III区で窯址6基、同じくIII区で「殷代墓」38基、I、III区それぞれでほとんど副葬品をもたない「殷代の小型墓」11基、III区で車馬坑、馬坑各1基、その他若干の住居址と多数の灰坑が発掘されている。²⁹⁾

発掘担当者の劉士義氏は、層位的根拠と遺物の比較から、遺跡を6期に分期できるとする。一期、二期は二里岡期、

三期、四期は殷墟Ⅰ～Ⅲ、五期は殷墟Ⅳの前段（ないしやや早期）、六期は殷墟Ⅳの後段（ないしやや晚期）に相当するといふ³⁰。分期された各期の具体的内容は明らかにされていないが、少なくとも発掘担当者によって、同遺跡が二里岡期より殷墟期末葉まで継続したと認識されていることは重要である。ここでは公表されている資料に依拠して、分期と年代を考える。

資料が公表されているのは、一九七二年に偶然発見された青銅器と、それに関連して行なわれた調査で採集された若干の土器片³¹、および八六年に正式に発掘されたⅢ区内の38基の墓³²と、これとは別に遺跡の一角にあたる袁家崖で七八年に発見された墓1基の出土品である。七二年と八六年の調査は、遺跡内の異なった地点を対象とし、前者は生活址が主体で、後者は墓群である。それぞれの土器の内容は、殷文化中心地域の土器と対照して明らかに前者が古く、後者が新しい別の段階に属する。そこで、前者を老牛坡Ⅰ、後者を老牛坡Ⅱとする。後者の中にはまた、土器の様相を見ると一定の新旧の幅が認められ、その内容をかりに前段と後段に分離する。

老牛坡の生活址から出土した土器として、これまでに鬲、罐、甗、甑、豆、盆、簋、大口尊、深腹缸、瓮、罍、器蓋などが器種名として報じられている³³。この器種の構成が殷系土器群のそれに属することは殷墟遺跡の器種構成（論文（上）一二七頁、表6参照）と比較しても確かである。ただこれまでの報告の範囲では、こうした器種の構成が遺跡の早い段階である老牛坡Ⅰで行われていたことはほぼ確認できるが、資料未公表の老牛坡Ⅱに相当する生活址にも同様に継続されているかどうかは明言できない。

一方、副葬土器の組合せは、知られる老牛坡Ⅱ相当の墓では、△鬲▽△鬲・罐Ⅰ▽△鬲・罐Ⅰ▽の3通りに限られる。これらの組合せにおける鬲の点数は1～3点と一定しない。鬲、罐主体の副葬土器の組合せは、殷墟のそれとは

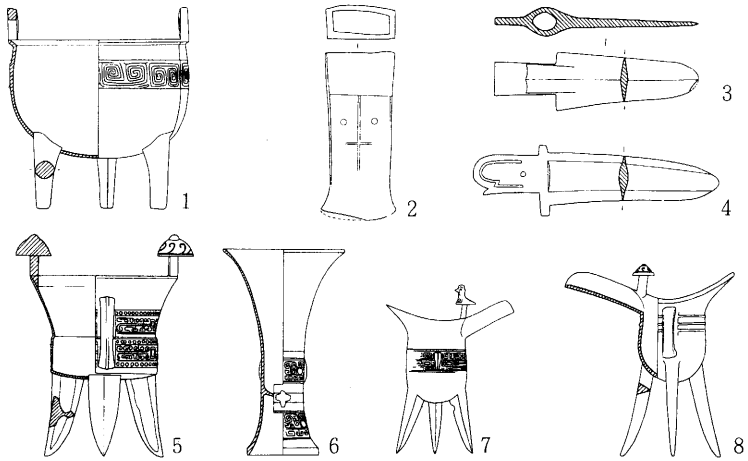
異なる在地的な性格のもので、関中地方の土器群A主体の墓と共通する。ただし、土器群Aではほぼ例外なく鬲の個数は1点であり、この点では土器群Aとも異なる。ただし、遡って老牛坡Iに相当する副葬土器の組合せも老牛坡IIと同様であったのかどうかは今のところ資料が不足している。

このように、老牛坡遺跡は、その長い継続期間のうち、土器資料が公表されているのは早い段階（老牛坡I）の生活址の土器と、遅い段階（老牛坡II）の墓の副葬土器に限られている。

老牛坡I 七二年の調査の生活址関連の採集土器をこの時期にまとめる。器種として、C類鬲、罐（広口、平底）、大口尊、豆（仮腹豆）、小口釜が知られ、そのほか雲雷紋の土器片が出土している。罐を除いて、殷系土器に属し、大口尊、豆、小口釜とも北村I、II（二里岡期）に相当する。C類鬲は、残片が2片知られる。その帯状に肥厚した口縁端部は、北村IIの遅い段階からIII前段（二里岡上層ないし殷墟I前後）に相当し、鬲足は足尖部の縄紋を擦り消したもので、次の老牛坡IIの足尖とは異なり、北村II、IIIに相当する。

老牛坡II前段 八六年発掘の墓群のうち、M10、M21、M33などの一括出土の土器。知られる器種はC類鬲のみである。老牛坡IIの前段と後段は、土器の様相からかりに分離したものであるが、前段に振り分ける中のM10とM33の墓壇の位置は墓域内で近接的で、時期の近さを示唆する。

八六年発掘の墓群で出土した青銅器を見ると、土器を出土しなかった墓M44で、平底の罍、鳥形单柱の爵、十字形鍍孔をもつ觚、それに戈が出土している（図17-5〜7）。その年代は殷墟I前後に相当しよう。³⁶しかし、同墓は墓群の西北縁辺に位置し、その年代は同墓群の上限を示唆する可能性がある。一方、M33に共伴した爵（図17-8）は、M44の爵より遅い形態をもち、殷墟IないしII前後に下がる可能性がある。³⁷M10の鼎（図17-1）も同じく殷墟Iか

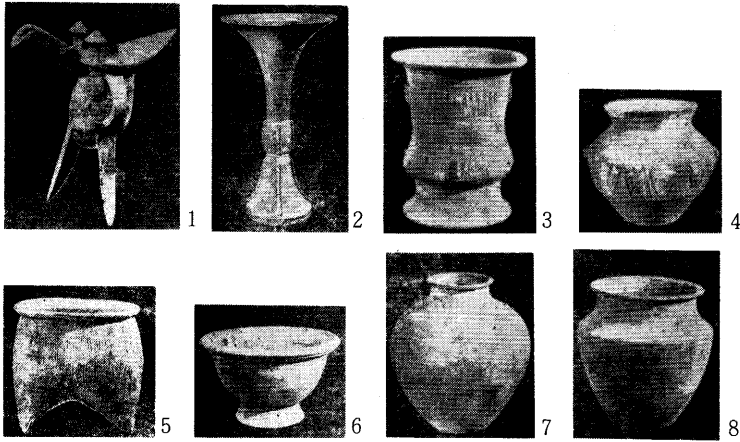


1, 4. M10 2, 3. M21 5-7. M44 8. M33

図 17 老牛坡出土の青銅器 [2は1/4, その他1/8]

らⅡ前後とみられる。M21出土の「平」字形凸線紋をもつ斧と有蓋戈(図17-2・3)は殷墟Ⅱ頃を上限としてそれより遅いものと考えられる。³⁹⁾ M10、M33の年代は、青銅器を副葬した時点とすることで考えれば、殷墟Ⅱ前後ないしさらに遅い可能性もあり、M21は殷墟Ⅲ頃に下がる可能性が高いと考えられる。

老牛坡Ⅱ後段 八六年発掘の墓群のうちM4、M9、M26、M28、M40などと、袁家崖の墓がこの時期に入る。M9、26、40の墓壇の位置は近接的で、年代が近いとみられる。器種として、C類鬲と折肩罐が知られる。老牛坡Ⅱ前段、後段のC類鬲は、襜の外観が弧状に近いものが多くなり、⁴⁰⁾ また大部分の例で典型的な股系鬲のように足尖部を擦り消さずに縄紋を施している。こうした特徴は、老牛坡Ⅱ段階のC類鬲が、殷系土器の特徴を離れて、いくつかの点で関中地方在来のA類鬲に近づいた結果とも考えられる。折肩罐は、複雑な様相を示すが、少なくとも一部は壹家堡Ⅰに見られた土器群C特有の折肩罐の流れを継承している。



1. 銅爵 2. 銅觚 3. 尊(圈足) 4. 罐(三角劃紋) 5. C類鬲IX 2形式
6. 簋(三角劃紋) 7. 円肩罐(平行沈線2条) 8. 尊(広口)(平行沈線2条)

図18 袁家崖墓(老牛坡Ⅱ後段)出土の土器、青銅器

袁家崖墓は、老牛坡Ⅱ後段の墓でただ1基、副葬土器の組成が大きく異なり、C類鬲のほか、尊(圈足)、罍、簋、円肩罐、尊(広口)を出土している(図18-3、5、8)。沈線で三角劃紋を施す簋、尊、罍はいずれも殷墟ⅢないしⅣに相当する典型的な殷墟出土の土器と一致している^①。一方、円肩罐は肩部に2条の沈線を施す土器群Aの土器と考えられ、広口の尊も、先述の土器群A主体の壹家堡Ⅲに伴出した例と同じタイプで、土器群Aに属する尊^②である。同墓には青銅器の爵と觚が伴出した(図18-1・2)が、やはり殷墟ⅢからⅣの間に相当するとみられ、土器と併せて同墓の年代は殷墟Ⅳ前半の前後とするのが妥当である。この年代は、公表されている中では、ほぼ老牛坡遺跡の下限に近い年代と考えられる。

老牛坡Ⅱの知られる土器は副葬土器に限られるが、その器種の構成と形態は老牛坡Ⅰや北村ⅠⅡⅢなどに比べて、殷文化中心地域の特徴から離れて在地化する傾向が読み取れる。ただし、その中において袁家崖墓の土器は、その時期においても何らかの理由により、殷文化中心地域の土器が直接的に

移入される状況も存在したことを示している。また、老牛坡Ⅱにおいては、鬲の形態などに土器群Aへの接近が認められ、殷墟Ⅳ前半頃の袁家崖墓になると、土器群Aに属する土器が外来的に混入している状況も見られるのである。

(2) 土器群Cの変遷

土器群Cを構成する器種の中で、漸移的な形態の変化が追跡できるのはC類鬲である。ここではC類鬲を分類し、その変遷に段階を設定する。またそれにその他若干の器種の新旧の認識を加える。そしてこの段階を、前項に述べてきた土器の共時的単位である遺跡および遺跡内の分期単位に拡張して、土器群全体の時期区分を設定する。

(A) C類鬲の分類と段階

C類鬲は、関中地方における殷系の鬲である。その場合、C類鬲は殷文化中心地域の鬲と大きな枠の中では一致した動向で変遷するが、常に関中地方の地域的特色がその形態に表われており、その傾向は時期が下がるほど強まるようにみえる。したがって、C類鬲の早い段階では、殷文化中心地域の鬲との直接の比較が可能であり、それを根拠に年代の推定が容易であるが、時期が下がるにしたがって、単純な照合は困難になる。

鬲の形態変化の方向は、まず殷文化中心地域の二里岡期の鬲に近い一群を早い段階に据え、その対極に第二節で述べた西周期の西周C類鬲(I、II形式)に近づく一群を遅い段階として据え、C類鬲全体をこれらの中間に継起する一連の形式・型式として捉えていく。

分類は、まず形式(I、II、……)と、その下位の小形式(a、b、……)を設定し、さらに同じ形式内で新旧の差が捉えられる場合、型式(1、2、……)として細分する。

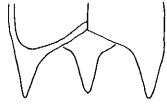
1. C類隔の分類

諸形式・型式を通じて新旧の流れを示す属性として、足尖部と口縁端部の時系列的な変化をあげて、形式・型式の先後関係を考える一つの目安とする。

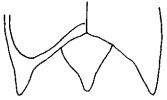
【足尖】 C類隔に見られる足尖部の形態をほぼ6段階の変化として捉える(図19左)。足尖1、2は高い円錐状のもので、足尖の外面は必ず擦り消される。足尖3、4にかけては順次足尖が低く、小さくなる傾向を示す。またこの変化にともなって袋足部がつくる三足の襠もしだいに低くなる傾向が認められる。この段階の足尖部外面は、少数の例外を除いてやはり擦り消されている。足尖5、6になると、足尖はさらに小さく低くなり、中には袋足先端と足尖が一体的で区別のできないものも含まれる。また足尖5、6できわめて重要なことは、ほぼすべての例で足尖外面の擦り消しがなくなり、常に縄紋が施された状態になっていることである。この特徴はのちの西周期における西周C類隔にも見られる。殷文化中心地域の隔では殷末に至るまで足尖外面を擦り消す特徴がほぼ普遍的に継続されてるが、この点に關中地方の殷系隔であるC類隔の在地的変化が窺える。おそらく足尖1、4段階までの足尖は、袋足部と別づくりされ、袋足下部に付加された足尖本来のものであるが、足尖5、6段階の矮小化したそれは、袋足部の先端から直接にひねり出された可能性もある。より多くの資料を検討したのち結論を出したい。

なお、足尖の中には一般的な直立した形態のほか、やや内傾するものや、逆に外に開くタイプがあるが、ここでは足尖の長短と外面の処理だけに注目して段階を考えておく。さらに一部の隔で、円柱状の足尖がある時期から出現するが、それはここでの段階の外におく。

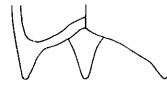
【口縁端部】 ごく大まかに4段階の変化として捉える(図19右)。口縁端部1は、口縁端部に粘土を付加して、先端



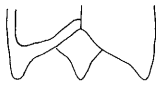
1 擦り消し



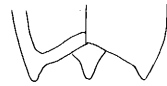
2 擦り消し



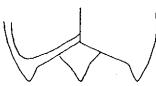
3 擦り消し



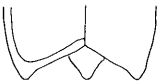
3



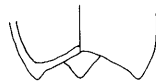
4 擦り消し



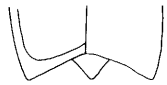
4



5 縄紋



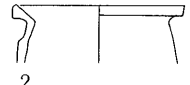
5



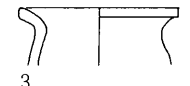
6 縄紋



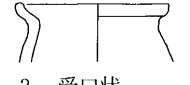
1



2



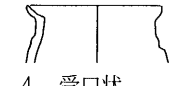
3



3 受口状



4



4 受口状

図19 C類鬲の足尖と口縁端部の変化

が斜め下に折れるような形状を呈する。殷文化中心地域の二里岡下層期の土器に特徴的なそれと共通する。口縁端部2は、端部が上下に強く肥厚し、端面は平坦で、側視すると帯状の平坦面が口縁をめぐるとような形態になっている。この形態は口縁端部1とは連続しないが、二里岡上層期の鬲に典型的に見られる形態で、その後の殷系の鬲に強く影響を残す特徴である。口縁端部3では、端部の肥厚が弱まり、帯状にめぐると口縁外観の特徴が薄れる。口縁端部4では、端部は肥厚せず、むしろ断面形は先端が細まる「円唇」または「尖唇」と称される形態に変わり、帯状の特徴は失われる。口縁端部4は、殷文化中心地域の特徴を離れた在地的な変化である。この特徴は西周期の西周C類鬲にも共通する特徴である。このほか、口縁端部3、4段階では、口縁断面形が、シャープではないがL字状に反り上がった受口状の傾向を示すものがある。これは殷墟期の殷墟出土の鬲に比較的広く認められる形態と共通する。また、口縁端部4に並行して、薄い斜直の口縁端面を呈する例もある。

以上、足尖部と口縁端部の変化を、C類鬲の新旧を示す指標の一つとして、以下にC類鬲を分類する。

C類鬲のうち器形が復元されている資料を分類し、その変遷観を概略示したのが図20である。資料数の不足から墓出土、生活址出土、遺構不明のものを同じ枠で扱う。変遷図で、異なる形式が同じ段階に並行して位置している例は、共時的単位の出土であるか、または口縁端部や足尖の段階の一致を考慮している。

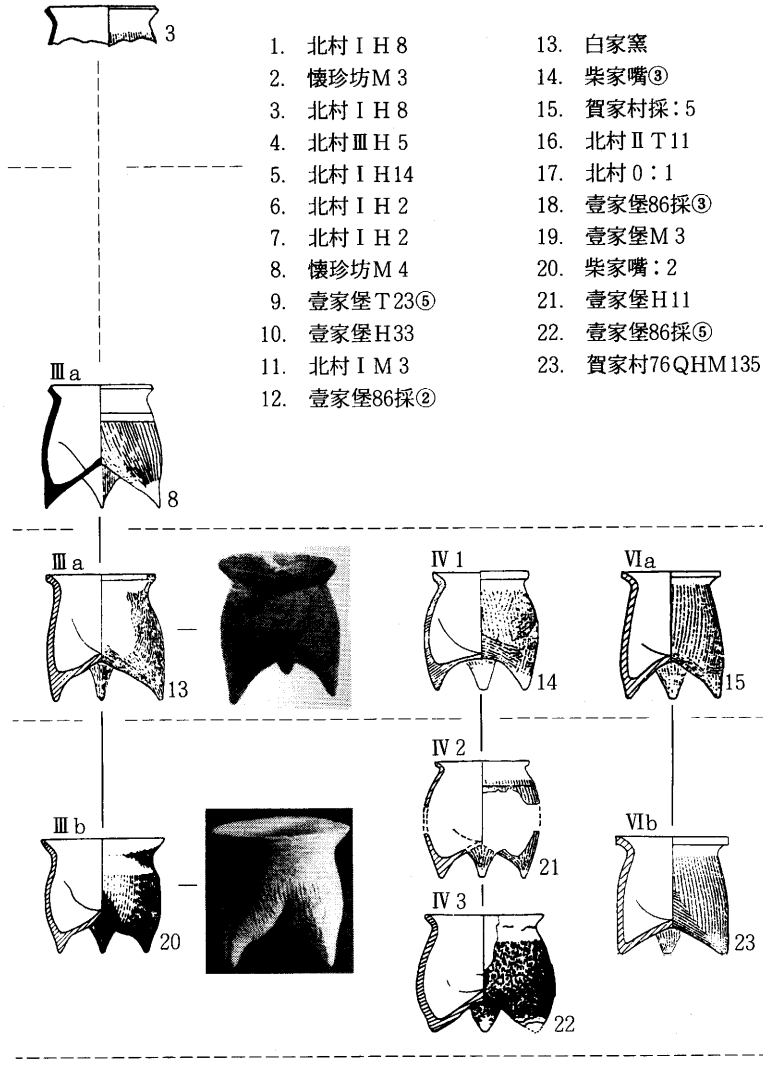
形態的特徴の持続的一群である形式は、共時的に異なる形態のものが並行して存在する例をその区分の手がかりとして設定される。例えば、①図20-6・7は同じ北村のIH2、②図20-24・25は老牛坡M10、③図20-27・28は老牛坡M26、④図20-29・30は老牛坡M28、⑤図20-31・32は老牛坡M21からそれぞれ一括出土している。また、⑥図20-9・10は層位的認識をとまなう壹家堡I前段の共時的土器である。これらはすなわち、以下に述べる諸形式のう

ち、① Ia と II 形式、② VII と VIII 形式、③ Ib と Xa 形式、④ VII と IX 形式、⑤ VIII と IX 形式、⑥ Ia と Ib 形式の各 2 形式が、それぞれ共時的でかつ並行する関係にあることを示している。なお、I 形式と II 形式は、北村遺跡の報告では、右の①の例以外にも 2 形式の共存関係が報告されている。

I 形式 北村遺跡の報告者は、同遺跡出土の C 類鬲に、並行する 2 系統があると認識する。ここでは、基本的にその認識を他遺跡の C 類鬲にも拡張して、それぞれ I 形式、II 形式とする。各形式内の変遷の段階も、ほぼ北村報告の段階にしたがう。ただし、I 形式の遅い段階で、Ia、Ib の小形式に分れる考えは本稿の変更点である。

I 形式は、器身が比較的大型で、かつ器高が器幅より大きく、やや細高傾向の器形を呈する。Ia、Ib 形式に分けられる。Ia 形式は、器側が直に近いものから、下部に張りのあるものへと変化する。Ia1~Ia4 に細分する。Ia1 は足尖 1、口縁端部 1、Ia2 は足尖 2、口縁端部 2、Ia3 は足尖 2~3、口縁端部 2、Ia4 は足尖 3、口縁端部 3 前後を呈する。Ia3 では、口縁直下に円圏紋の列を施紋する二里岡上層に頻出する特徴がしばしば見られる。Ia3 に後続して、三足部下部がすぼまり、内傾した足尖部に特徴のある Ib 形式が現われる。知られる資料は Ib1~Ib3 に細分でき、Ib1 は足尖 3~4、口縁端部 3、Ib2 は足尖 4、口縁端部 3、Ib3 は足尖 5 前後を呈する。Ia4 と Ib1 は壹家堡 I 前段で共時的な関係にある。

II 形式 I 形式に比べやや小型の鬲で、器高と器幅の割合が 1.1 の内外にあり、しだいに器幅がまざる傾向に変化する。足尖部がやや内傾するものが含まれる。II1~II5 の各型式に細分する。II1 は足尖 1、口縁端部 1、II2 は足尖 2、口縁端部 2、II3 は足尖 2~3、口縁端部 2、II4 は足尖 3、口縁端部 2 前後を呈し、襠部の位置が下がる。II5 はさらに襠部が低くなり、足尖 4、口縁端部 3 前後を呈する。II5 では図 20-17 の例のように、波状の凸帯



- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. 北村 I H 8 | 13. 白家窯 |
| 2. 懷珍坊 M 3 | 14. 柴家嘴③ |
| 3. 北村 I H 8 | 15. 賀家村採: 5 |
| 4. 北村 III H 5 | 16. 北村 II T 11 |
| 5. 北村 I H 14 | 17. 北村 0 : 1 |
| 6. 北村 I H 2 | 18. 壹家堡 86採③ |
| 7. 北村 I H 2 | 19. 壹家堡 M 3 |
| 8. 懷珍坊 M 4 | 20. 柴家嘴: 2 |
| 9. 壹家堡 T 23⑥ | 21. 壹家堡 H 11 |
| 10. 壹家堡 H 33 | 22. 壹家堡 86採⑤ |
| 11. 北村 I M 3 | 23. 賀家村 76QH M 135 |
| 12. 壹家堡 86採② | |

12-15、18-23は 1/8, その他不詳]

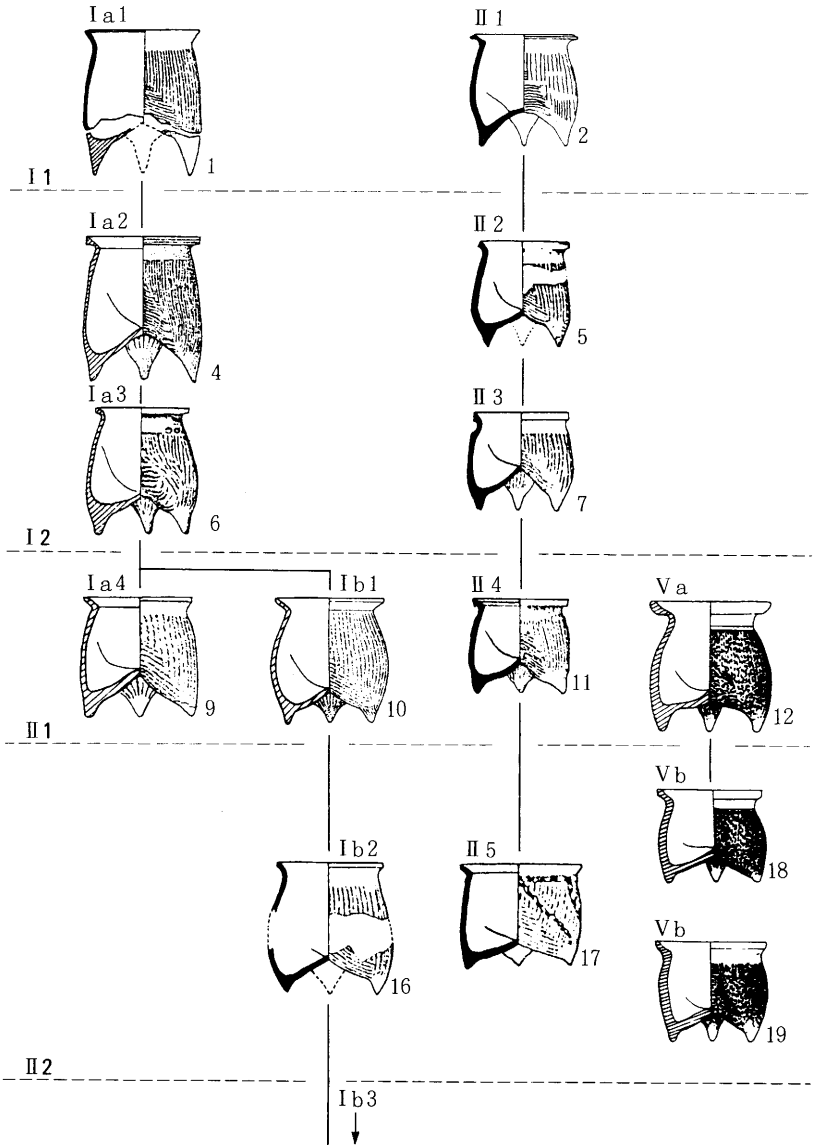
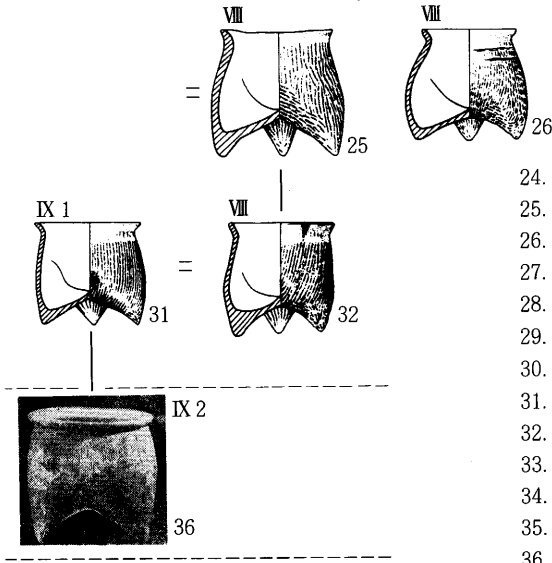


図 20(1) C類高の変遷(1) (2、8、10、



- 24. 老牛坡M10
- 25. 老牛坡M10
- 26. 老牛坡M33
- 27. 老牛坡M26
- 28. 老牛坡M26
- 29. 老牛坡M28
- 30. 老牛坡M28
- 31. 老牛坡M21
- 32. 老牛坡M21
- 33. 老牛坡M45
- 34. 老牛坡M 9
- 35. 老牛坡M40
- 36. 袁家崖墓 (老牛坡)

(1-35は1/10)

紋を斜めにたすぎがけに貼付けた殷墟の土器に顕著な特徴を示す例がある。

Ⅲ形式 口頸部が幅広に擦り消され、擦り消された口頸部と胴部(三足部)が、境界に沈線をめぐらせるなどしてくっきりと区画される。3本の足と足尖は細高の傾向を示し、襠は比較的高い位置にある。口縁端部は、肥厚した帯状のものは知られず、図20-3(この資料は図20-1のI a 1の例と一括出土)などの流れをうけた例が含まれる。資料数は少ないが、かりにⅢ a、Ⅲ bに分ける。Ⅲ bは、口縁部が大きく外反する。Ⅲ aは足尖2、3、口縁端部3前後のものを含む。Ⅲ bは足尖3、4相当で、口縁端部4に近づく。ただし、Ⅲ bの図20-20の例では、口縁端部は4に近く薄くなるものの、口縁外面にごく薄くではあるが、粘土を貼りめぐらせて肥厚さ

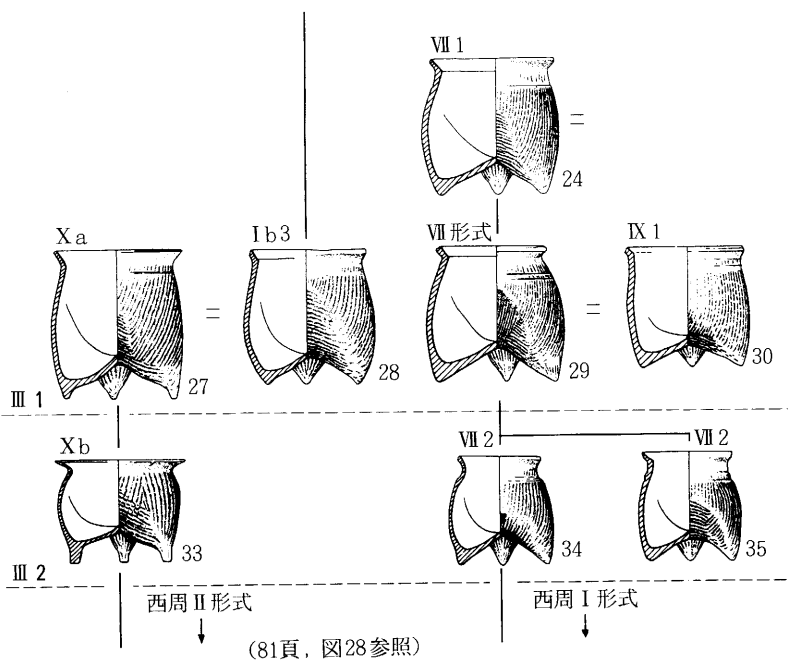


図 20(2) C類鬲の変遷(2)

せる手法が認められ、口縁端部4とはなお一定の距離がある。

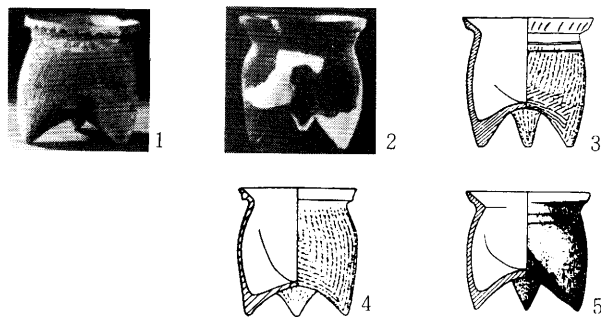
IV形式 器体全体に丸く張りのある器形を呈する。口縁部は短い幅で外反する。IV 1はIV 3に細分する。IV 1は足尖2、3、口縁端部3、IV 2は足尖3、4、口縁端部3、IV 3は足尖5に近く、口縁端部4前後を呈する。IV 3の図20-22の例では、足尖の突起が矮小化して、足尖5に近づく。ただし、その外面はなお擦り消し処理されていて、外面に縄紋を施す(あるいは残す)足尖5以降とはなお一定の距離をおいている。このようなIV 3の足尖は、先のIII b形式の口縁端部とともに、C類鬲全体の段階を考える上で注意される。

V形式 受口状に反り上がった口縁端部をもつC類鬲。資料は少なく、器形的まともにも明確ではないが、かりにVa、V b形式に

分けておく。Vaは、頸部がくびれ、強く外反し肥厚した口縁端部をもつ。Vbでは頸部のくびれは顕著ではない。Vaは足尖3、Vbは足尖4前後を呈する。V形式の口縁部は、殷墟出土の鬲にしばしば見られるし字状の口縁部と関連する特徴をもつ。知られる資料は、いずれも壹家堡Iに伴出した例である。

VI形式 袋足内の空足先端部が深く落ち込む特徴をもつ。胴部(三足部)側面が斜直に近い。また襠の側視形は弧状のように成形されており、あるいは次に述べるA・C折衷形式と近い関係にあるとも言える。資料は少ないが、かりにVIa、VIbに分けておく。VIaは、Ia3、Ia4などI形式の細高の器形と近い関係にある。足尖2・3、口縁端部3前後に相当する。VIbは器高が低くなる。知られる資料の足尖は破損していて不明で、口縁端部3に相当する。いずれも岐山賀家村Iの土器である。

A・C折衷形式 第三節で、A類鬲の諸形式とともに提示した形式である(図21)。その三足部は襠の側視形が弧状をなす聯襠鬲としてつくられており、本稿での基準では、A類鬲に分類される。しかし、肥厚した带状の口縁には鮮明なC類鬲の特徴も現われており、この形式の年代的位置づけは、むしろその口縁が手がかりになる。肥厚した口縁端部は、C類鬲のI、II形式にも顕著な二里岡上層期以来の形態を襲ったものと考えられるが、口縁端面に波状の装飾をめぐらせるものがある(図21-1・3)。また頸部に凸帯をめぐらせるものもある(図21-1)。口縁端部の波状の装飾は、土器群Cの主要な土器の一つである花辺罐の口縁(図22)と関係するとおもわれる。A・C折衷形式のうち、口縁端部に波状の装飾をもつタイプは、そのないタイプよりも若干古い形態であることが考えられるが、その新旧のタイプに共通して、頸部に2本の平行沈線をめぐらせる例も知られ(図21-3・5)、同じ形式としてのみとまりを示す。



1. 柴家嘴① 2. 鄭家坡 3. 柴家嘴② 4. 壹家堡H25 5. 柴家嘴:8

図21 A・C折衷形式鬲

なお、図21-4は壹家堡I後段の鬲で、図20-21のIV2形式と共時的である。また、図21-1・3・5は、同じ柴家嘴出土の図20-14・20と近い年代の範囲にあると考えられる。さらに、図21-2は土器群A主体の鄭家坡Iにもなった例である。

A・C折衷形式は、土器群Cが長らく定着的な地域であった西安以西の関中地方東部では知られず、土器群Aが濃密に分布する漆水河下流とそれ以西で出土している。おそらくこの形式は、後節で述べるように土器群Cが一時的に関中地方中、西部に拡張した時期に、土器群Aと接触し、その中で現われた鬲の一形式である。なお、A類鬲の主要な形式の一つであるⅢ形式は、このA・C折衷形式の口縁の特徴を継承していると推測した(論文(上)五三頁、図6参照)。

Ⅶ形式 幅広に擦り消された口頸部と胴部(三足部)とが、擦り消しによる器壁の厚さの差や沈線の区画などによって、くっきりと分かれる形式。胴部は比較的張りがある。口頸部以下の縄紋は、縦方向に整然と施紋されたものが多い。Ⅶ1、Ⅶ2に細分する。Ⅶ1は足尖5、口縁端部4、Ⅶ2は足尖6、口縁端部4前後に相当する。つまりこの形式では、股系鬲本来の特徴である足尖の擦り消しや、口縁端部の顕著な肥厚が見

られなくなる。Ⅶ形式の幅広に擦り消された口頸部は、Ⅲ形式のそれに通じる点があり、また器形的にはⅠ形式やⅣ形式との近さが指摘できる。Ⅶ形式はこれら諸形式に後続して現われた形式と言えよう。当該形式の重要な意義は、のちの西周式土器を構成する西周C類隔Ⅰ形式の先行形式と考えられることである。

Ⅷ形式 老牛坡遺跡の報告のB型隔とC型隔の一部がこれに該当する。器形的な画一性は明確ではないが、かりに一形式にまてめておく。いずれも器壁は厚手で、器体の対称性が低く、口縁は一般のC類隔と異なり回転調整のなされていがないものが含まれる。細分しない。

Ⅸ形式 器壁は直に近く、広口で、円筒状に近い器形を呈する。口縁部の幅は狭く、縄紋は縦方向にきわめて整然としている。襠の側視形は弧状に仕上げられているが、袋足内部のつながりは「へ」状の分襠をなすC類隔のそれである。Ⅸ1、Ⅸ2に細分する。いずれも足尖6相当で、口縁端部は4前後である。Ⅸ1では口縁以下のある幅が擦り消されるのに対し、Ⅸ2では口縁直下から縦縄紋が施される。なお、関中地方を離れた山西省靈石旌介遺跡でも、Ⅸ形式に通じる円筒状に近い器形の隔2点が出土していることに注目しておきたい。⁴³

X形式 足尖が以上の諸形式のように円錐状ではなく、円柱状を呈する形式。器高の高いXaと、低いXbに分ける。Xa形式の図20-27は図20-28のIb3形式と共伴する。一方、Xb形式には共伴遺物は知られず、孤立した資料であるためか、出土した老牛坡遺跡の報告は西周期に下がる可能性も指摘しているが、Xb形式を出土した墓は、同遺跡の墓地の構成からみて、他の墓と大きな年代差のない西周以前のもと考えたい。X形式の重要な意義は、西周式土器を構成する西周C類隔Ⅱ形式の先行形式と考えられることである。この点は後節で取り上げる。

2. C類隔の段階

形式の消長のようなから、C類隔の段階を考える。図20にはすでにその段階を示してある。まず二里岡期の殷文化中心地域の隔に特に結びつきの強いI、II形式が、北村など比較的少数の遺跡で継続された段階と、新たにIII、IV、V、VI形式が広い範囲の遺跡で出現する段階が注意されよう。前者をI段階、後者をII段階とする。II段階ではA・C折衷形式も現われる。そして、これら諸形式のあとに、足尖や口縁端部、あるいは襠の形態が、殷文化中心地域の隔から比較的距離をおいた新形式として、VII、VIII、IX、Xの各形式が老牛坡IIなどに現われてくる。この段階をIII段階とする。I段階↓II段階の移り変わりに際して、一般に足尖は小型化の傾向をはっきり示し、肥厚した帯状の口縁端部が顕著でない隔が増加する。この変化は、殷文化中心地域における二里岡期↓殷墟期への変化傾向にも概ね一致している。一方、II段階↓III段階への変化において、足尖は矮小化し、足尖本来の目立った突起を有さないものが現われる。しかも大部分が足尖外面を擦り消さず、縄紋を施す(残す)ようになる。これは足尖外面を擦り消すという殷文化中心地域では殷末まで継続された重要な一特徴が失われたことを意味する。同様に、殷文化中心地域で殷末まで継続する肥厚し帯状にめぐる口縁端部の特徴もIII段階ではまったく見られなくなる。

I段階をさらにI1とI2、II段階をII1とII2、III段階をIII1とIII2に各二分し、全体で6段階に細分することにした。I1とI2は北村遺跡で層位的根拠をもつ北村I、北村IIの隔に対応し、それぞれ二里岡下層、上層にきわめて近い関係にある。II1とII2は、北村IIIの前段と後段に対応し、また壹家堡Iの前段と後段がほぼこれに並行すると考えられる。賀家村Iや柴家嘴の隔は、II1とII2にまたがる内容を含む。A・C折衷形式には新旧のタイプが想定されたが、それぞれはほぼII1、II2に並行すると考えられる。II1↓II2間の変化は比較的明確で、かつそ

の変化は殷墟Ⅰ→Ⅱ頃の変化にも一定の対応が見られるようである。Ⅲ1とⅢ2は老牛坡Ⅱの前段と後段に対応する。先述したように老牛坡Ⅱに層位的な分離はないが、墓域内での墓の分布や、共伴した青銅器が新旧の分離を示唆する。鬲自身でみれば、老牛坡Ⅱの中には、先行するⅡ段階に近い鬲と、一方で西周C類鬲に近いものが存在しており、そこに新旧の方向が窺われる。これらを考慮して、作業仮説的にC類鬲I b 3、VII 1、VIII、IX 1形式を指標にⅢ1段階、VII 2、IX 2形式を指標にⅢ2段階を考へることにする。

(B) その他の器種の変遷

土器群Cを構成する鬲以外の主な器種として、花辺罐、甗、釜、豆、盆、簋、大口尊などをあげることができる。これらの器種は、一般に生活址にともなう土器であるが、生活址の土器資料としては、北村遺跡の資料以外に公表されている例は少なく、また特にC類鬲Ⅲ段階を唯一代表する老牛坡Ⅱ相当の生活址の土器が明らかになっていない。つまり、土器群Cの遅い時期に当たる生活址の土器がほとんど知られていない状況にあり、したがって鬲以外のこれら大部分の器種について、その消長や変遷を十分に説明することはできない。

ここでは、C類鬲との伴出関係を主な根拠にC類鬲の段階との対応が知られる一部の土器について紹介しておく(図22)。

1. 花辺罐

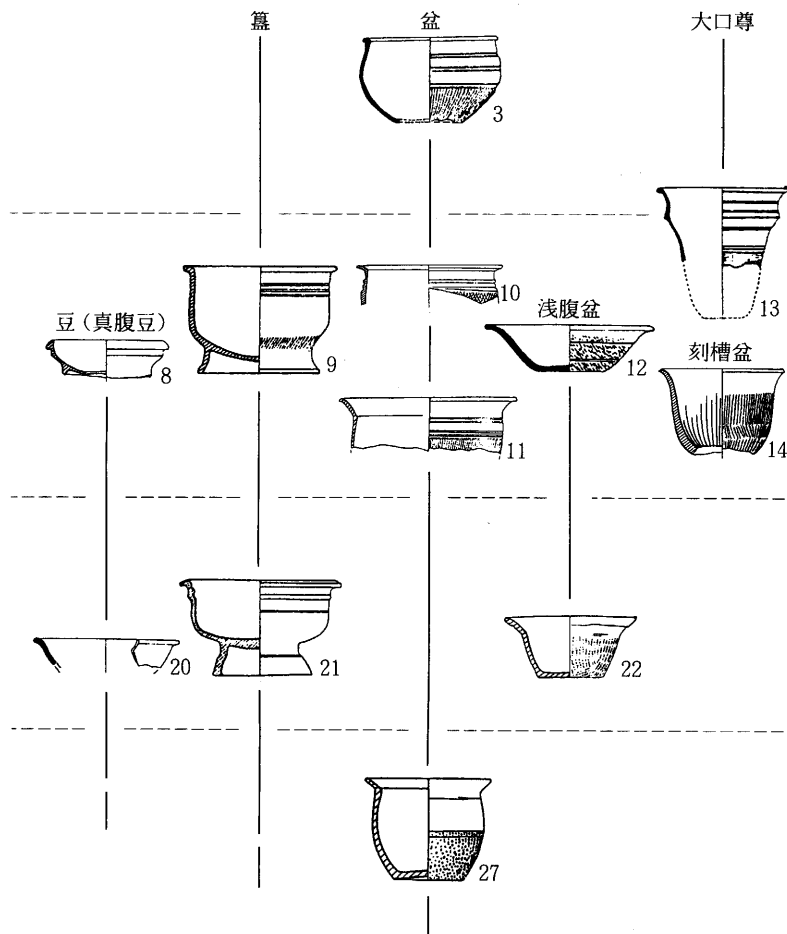
平底で丸く張りのある胴部と広口の口頸部、および口縁端部の波状の装飾に特徴がある土器群Cの主要な器種の一つである。C類鬲Ⅰ、Ⅱの各段階に相当する資料が知られる。器形の変化は明確ではないが、時期が下がると頸部のくびれと胴部の丸い張り出しが弱まる傾向が指摘できる。口縁端部外面の装飾には、①波状の刻み(図22-1・2)、

②波状の凸線(図22-16)、③列点(図22-24)を呈する資料が知られる。②、③には共伴遺物が知られていないが、①↓②↓③の順で変化したと考えられ、図22のような段階に配列した。口縁端部に装飾のない例(図22-23)も知られるが、これは図20-23のC類隔VIb形式と共伴しており、C類隔のII2段階に並行する例と考えられる。この資料と波状の凸線をもつ図22-16は、賀家村遺跡の同じ墓域での出土であるが、後者が若干古い形態を示すと考えられよう。

花辺罐の形態は、殷文化中心地域における二里岡期の円腹罐(尊)に類似する点もあるが、その系譜をひく円腹罐は殷墟期ではすべて丸底に変化する。したがってそれは、土器群Cの花辺罐と同じ動向をもつ土器とは言えない。また、口縁端部に波状の装飾(花辺)をもつ円腹平底の罐となると、二里岡期、殷墟期ともに欠けており、むしろ中原の二里頭文化の中に遡って考えるならば、そこで特徴的な平底の円腹罐が類似土器として指摘できる。土器群Cの花辺罐の系譜は、あるいはこのように先行する二里頭文化の中に遡ることも予想される。今後の関連資料の増加を待ちたい。いずれにしても花辺罐は、同時期である二里岡期、殷墟期の殷文化中心地域の土器に直結せず、一方、関中地方在来の土器群Aや土器群Bの中にも見られないところから、土器群Cを特徴づける重要な土器となっているのである。なお、同じように二里頭文化に遡る系譜をもつ可能性のある土器に、南沙村遺跡で出土している刻槽盆(澄濾器)がある(図22-14)。花辺罐と同じ流れで土器群Cの中に存在する土器として、数量は多くないが注意される。

2. 豆

殷文化中心地域の二里岡期、殷墟期と同様に、いわゆる真腹豆と仮腹豆(器身(盤)と脚部の区別があいまいで一体的な形態のもの)の2タイプがある。仮腹豆は殷文化中心地域では、二里岡上層期前後に盛行し、殷墟期では衰退



- | | | |
|-----------|-----------------|-----------------|
| 1. 南沙村H12 | 11. 北村IH14 | 21. 北村IH12 |
| 2. 北村IH8 | 12. 懷珍坊T7③ | 22. 壹家堡H33 |
| 3. 北村IY1 | 13. 北村IH14 | 23. 賀家村76QHM135 |
| 4. 北村IH2 | 14. 南沙村T4③ | 24. 賀家村63M26 |
| 5. 北村IH2 | 15. 北村O:2 | 25. 壹家堡H25 |
| 6. 北村IH14 | 16. 賀家村76QHM116 | 26. 北村IT1③ |
| 7. 北村IH2 | 17. 壹家堡H33 | 27. 壹家堡H25 |
| 8. 南沙村T1② | 18. 壹家堡H33 | 28. 老牛坡M11 |
| 9. 北村O:3 | 19. 白家窯 | 29. 老牛坡M28 |
| 10. 南沙村H8 | 20. 壹家堡H33 | |

の変遷 [縮尺不同]

西周式土器成立の背景(下)

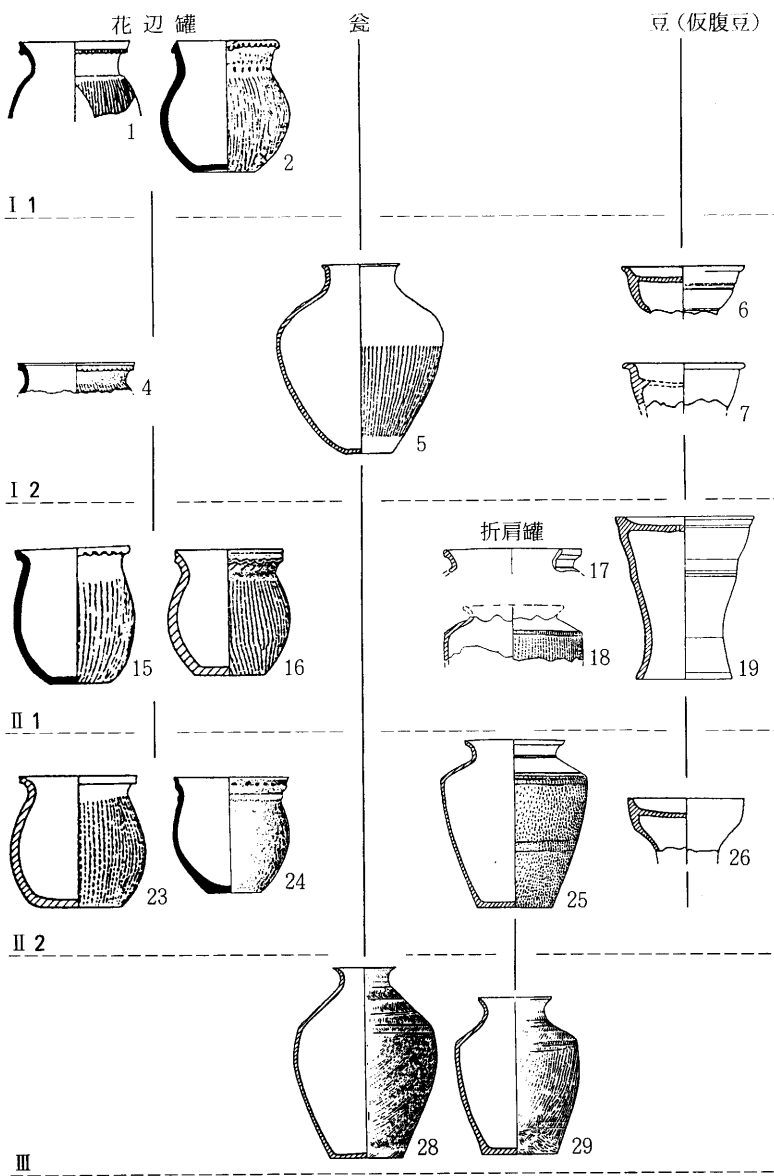


图 22 土器群 C (鬲以外)

しつつも、少数派となって継承された殷系の豆の特徴あるタイプである。土器群Cでは、殷墟期並行期に入っても仮腹豆のタイプが盛行していることは注目される。しかも仮腹豆の一般的特色である浅い器身(盤)が、むしろ殷文化中心地域では見られないほど極端に浅く変化した例が出現している(図22-19)。

3. 折肩罐

口頸部が外に強く湾曲し、肩部が明瞭に屈折する特徴をもつ。また、頸部、肩部、胴下部にそれぞれ2条以上の平行沈線をめぐらすことも大きな特徴である。このような折肩罐は北村遺跡には知られず、壹家堡Iに特徴的な土器として現われ、老牛坡IIにその系譜が続く。壹家堡Iの図22-17・18は、C類鬲のIb1形式(図20-10)と、また図22-25はA・C折衷形式(図21-4)と同じ灰坑から出土している。また、老牛坡IIの図22-29は、C類鬲VII形式、IX1形式(図20-29・30)と同墓共伴した。この種の折肩罐は、殷文化中心地域に祖型がもとめられる土器とは言えず、また土器群Cの途中の段階から出現するらしいことから、隣接する土器群Aや土器群Bの折肩罐と関係があると言えず、また、実際、形態に共通点もある。しかし少なくとも、壹家堡Iの例に認められる肥厚した口縁端部は、C類鬲や花辺罐と共通する土器群Cの特徴に相違ない。なお、老牛坡IIでは、このタイプ以外にも折肩罐のバリエーションが認められるが、個々の性格は判然としない。

4. その他の器種

頸部のくびれに特色のある大型の土器である瓮(小口瓮)は、北村IⅡに比較的多く見られ(図22-5)、それは老牛坡IIの中にも続くようである(図22-28)。その他の器種についてはさらに断片的な資料しかないため、説明は省略する。図22に示した簋、盆、大口尊などが二里岡期から殷墟I、II期頃の殷文化中心地域の同器種と同じ系統

の土器であることは明らかであろう。

5. 紋様

あらゆる器種を通じて、縄紋が主体的な紋様であるが、縄紋以外に、印紋の系統が比較的盛行している。北村Ⅰでは盆の胴部に、方格（斜方格）紋帯を割り付けける例がかなり多く見られる。北村遺跡の報告者によれば、この紋様は、北村Ⅱで衰退傾向を示しながらも継承される。先に、土器群AのⅠ～Ⅱ期で方格（斜方格）紋が盛行することを述べたが、このような紋様は、土器群CのⅠ、Ⅱ段階から導入された紋様であろうと推測した。そのほか、さまざまな器種を通じて、平行沈線が多用される傾向があり、これは股系土器に共通する一般的傾向とみられる。また、鬲の頸部やその袋足部の外面に、波状に凹凸をつけた帯状の付加堆紋を貼付ける装飾があり、これも二里岡期、殷墟期を通じて股系の鬲に頻繁に用いられた装飾に共通する。

(3) 土器群Cの時期の設定と年代

(A) 時期の設定

以上に示したように、C類鬲のⅠ～Ⅲの段階区分は共伴した若干の土器によってもある程度補足できた。このC類鬲のⅠ～Ⅲ段階を、土器群CのⅠ～Ⅲ期として設定する。この「時期」は、C類鬲を軸に知られる段階を、遺物群の共時的単位である一遺跡、あるいは遺跡内の分期単位に拡張して考えるものである。以下に、各時期に属する単位をあげる。

●印は、土器群Cを主体として、土器群Aの土器ないしそれとの折衷的な土器がともなう単位である。

I 期 I 1 耀泉北村Ⅰ、華泉南沙村Ⅰ、西安老牛坡Ⅰ、藍田懷珍坊

I 2 耀泉北村Ⅱ、華泉南沙村Ⅱ、西安老牛坡Ⅰ、藍田懷珍坊

II 期 II 1 耀泉北村Ⅲ（前段）、華泉南沙村（一九八〇年調査）、西安老牛坡Ⅰ、

藍田懷珍坊、●武功柴家嘴、●扶風壹家堡Ⅰ（前段）、白家窯、

岐山賀家村Ⅰ、王家嘴

II 2 耀泉北村Ⅲ（後段）、西安老牛坡Ⅰ、●武功柴家嘴、

●扶風壹家堡Ⅰ（後段）、岐山賀家村Ⅰ

III 期 III 1 西安老牛坡Ⅱ（前段）

III 2 ●西安老牛坡Ⅱ（後段）

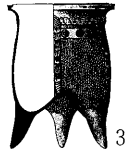
（B）土器群C各時期的年代（殷文化中心地域編年との対応）

各時期の土器、特にC類鬲を、殷文化中心地域の鬲の段階と比較して、年代的対応を考える。これにすでに遺跡の項で確認しておいた若干の伴出青銅器の年代観を考慮して年代の設定を行なう。

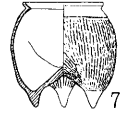
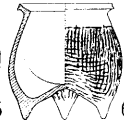
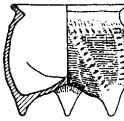
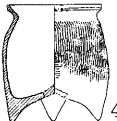
図23は、二里岡遺跡、殷墟遺跡などで出土した鬲の比較的標準的な例をあげた。殷文化中心地域の鬲は、もとより多形式が並行した複雑な流れを示すが、二里岡下層↓二里岡上層↓殷墟Ⅰ↓Ⅳの各段階を通じて、一般に言われるように足尖、襠、器高は、いずれも高↓低に変化する傾向がこの図からも確認できよう。一方、C類鬲の全般的な流れもかなりよくこれに一致している。ただし、土器群CⅢ期のC類鬲では、その同時期と考えられる殷墟Ⅲ、Ⅳ期ほど



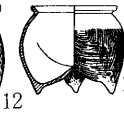
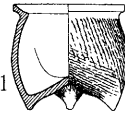
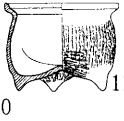
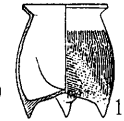
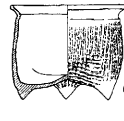
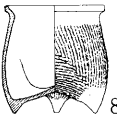
二里岡 下層



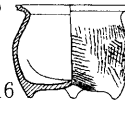
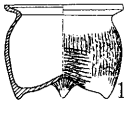
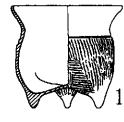
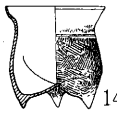
二里岡 上層



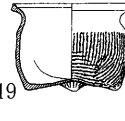
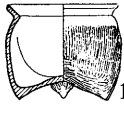
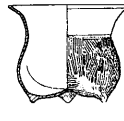
殷墟 I



殷墟 II



殷墟 III



殷墟 IV

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1. 二里岡H17 | 11. 苗圃北地H 1 |
| 2. 二里岡H13 | 12. 小屯西北地H102 |
| 3. 二里岡H 1 | 13. 殷墟西区M354 |
| 4. 大司空村H317 | 14. 殷墟西区M491 |
| 5. 武官北地M 1 | 15. 苗圃北地T 251 ④ |
| 6. 台西村M86 | 16. 苗圃北地T 1 ③ |
| 7. 大司空村H326 | 17. 苗圃北地T 1 ③ |
| 8. 苗圃北地M17 | 18. 殷墟西区M793 |
| 9. 苗圃北地M48 | 19. 殷墟西区M1028 |
| 10. 白燕H17 | 20. 苗圃北地H113 |

図 23 殷文化中心地域出土の鬲

(5、6、17-19は1/10、4、10、13-16は2/25、1、2、7-9、11、12、20は1/15、3は1/20)

には足尖、襜、器高が低くなる傾向は顕著でない。C類鬲の変遷が、この時期になると殷文化中心地域の変化と必ずしも連動しなくなり、いわば鬲の形態の在地化が進行した状況を反映している。

先述したC類鬲の足尖の段階を、殷文化中心地域の鬲と比較すれば、大まかに言って、足尖1、2の段階が二里岡期、3、4の段階が殷墟期I、II頃に並行する。そして5、6の段階はおそらく殷墟III、IV頃に並行するが、同時期の殷文化中心地域のそれからやや乖離した特徴をもつに至った段階と考えられよう。

い多少し具体的な例で比較してみよう。C類鬲の変遷図、図20のうち、I形式、II形式の流れでは、Ia1、II1が二里岡下層(図23-1)、Ia2、Ia3、II2、II3が二里岡上層(図23-2・3)に並行する鬲であることは北村出土のこれらの鬲を対象に徐天進氏が詳細に述べているところである。つづくIa4、Ib1と、II4の各形式は、器形、口縁、足尖などからみて、それぞれ殷墟I前後(図23-4・6・5)に並行することが認められよう。さらに、Ib2、II5は、殷墟II前後の鬲(図23-8・9)に対比できる。一方、III形式はIIIaが足尖の高さ、口縁端部などからみて二里岡上層から殷墟I前後の諸例に近く、IIIbが殷墟II前後に並行することが指摘できる。なお、IIIb形式の大きく開いた口縁の特色は、殷墟III、IVのさらに極端に変化した鬲(図23-15・18)に先行する段階に相当すると考えることができよう。IV形式は、IV1が殷墟Iの諸例に近く、またIV2、IV3は、殷墟Iの図23-7のような胴部が丸く張りのあるタイプに後続する殷墟IIの図23-13に前後するC類鬲と考えられる。V形式では、Vbが殷墟IIの口縁が受口状の例(図23-11・12)と比較できよう。VI形式、A・C折衷形式は、その足尖、口縁端部が、殷墟I、IIの諸例に類似例を見いだせる。VII形式以降は、擦り消しのない足尖、肥厚しない口縁端部によって、I、VI形式より遅れて登場する形式と考えられる。このような特徴は前述のように殷文化中心地域と連動する関係を離れた

ことを示唆するものであり、したがって、VII形式以降には、直接比較できる殷墟出土の土器は少なくなる。しかし、VII 1は、例えば殷墟II並行と考えられている山西太谷白燕遺跡⁴⁶の例(図23-10)などを参照すれば、それに並行または若干遅れる形態かと推定できよう。またVII 2、IX 2に認められる受口状の口縁は、殷墟IVの鬲において比較的多くの例があることを指摘しておく。

なお、IX 2形式を出土した袁家崖墓(老牛坡II)は、遺跡の項で述べたように共伴した土器の鬲、尊、簋が殷墟出土の土器に直接比較できる特徴をもち、同時に伴出した青銅器の年代観と併せて殷墟IV前半前後とみなされる。

各時期のC類鬲に伴出した青銅器については、遺跡の項で簡単に説明した通りである。そこで確認した青銅器の年代観は、鬲の比較による前述の年代観を概ね支持していると言える。ただ、鬲からみて殷墟IIより下がる傾向を強調した土器群C III 1期を代表する老牛坡II前段は、それにもなった青銅器の中に殷墟II前後に遡る例(M10など)が含まれる。青銅器が伝世される可能性を考慮しても、土器群C III 1期の年代の上限を殷墟IIに遡らせる必要があるだろう。その殷墟IIという年代は、一方で土器群C II 2期について考えられる年代と重なる結果になる。II 2期とIII 1期の土器相の区分が比較的明確であるだけに、年代の考定に問題がないのか、今後の資料の増加を待ってさらに詳細に再検討したい。

以上のことから、現在考えられる土器群C各時期の年代として、I 1期・二里岡下層、I 2期・二里岡上層、II 1期・(台西村二期墓ないし)殷墟I前後、II 2期・殷墟II前後、III 1期・殷墟II・III、III 2期・殷墟III・IV前半前後を与えることができる。

Ⅱ期 少なくともⅠ期以来継続する北村遺跡では、器種の構成に顕著な変化はないが、大口尊が見られなくなる。二里岡期↓殷墟期の移行にさいして、大口尊が減少する殷文化中心地域の傾向に対応した変化とおもわれる。また、北村遺跡では印紋、特に円圈紋と方格紋の減少が指摘されており、これも同じ関係として理解できる。一方、Ⅱ期から、同時期の殷文化中心地域で盛行する器種の重要ないくつかが土器群Cで欠落する。その代表的なものは觚と爵である。この2器種が土器群Cで行われていない（少なくとも副葬土器に見られない）ことは、殷文化中心地域の土器と土器群Cの重要な分岐を示している。逆に、殷文化中心地域に見られない土器、例えば折肩罐などが土器群Cに登場してくる。

土器の形態では、土器群CⅡ期に見られる豆は、二里岡期に盛行した仮腹豆のタイプが多い。殷文化中心地域では殷墟期に入ると仮腹豆のタイプがはっきり減少する傾向が見られるが、関中地方では遅くまで仮腹豆のタイプが盛行したことが知られる。

このように、土器群CのⅡ期では二里岡期↓殷墟期の変化に連動した変化がある反面、殷文化中心地域の重要な器種を欠落させる状況が出現し、一方、殷文化中心地域では衰退傾向にある古い土器の形態を、在地的に継続させている現象が認められる。

Ⅲ期 遺跡は、関中地方東部の老牛坡Ⅱなどに限られる。老牛坡Ⅱは遺構として墓だけが知られ、生活址を含めたこの時期の土器群Cの様相は不明である。その墓の副葬土器が、器種として、△鬲▽△鬲・罐▽の組合せに限られることは注意される。かつてⅠ、Ⅱ期の墓には豆がともなった例もあったがそれが見られなくなっており、しかも同時期の殷文化中心地域の主要な副葬土器である觚や爵がまったくもっていないのである。これは土器群Cと殷文

化中心地域の間で、器種の構成に大きな隔たりが現われたことを示している。副葬土器の構成には、むしろ関中地方在来の別の土器群である土器群Aへの接近が窺われよう。

土器の形態からみても、C類鬲の諸形式を通じて、足尖がきわめて矮小化し、足尖外面に縄紋を施すことや、口縁端部が肥厚し、帯状を呈する特徴が失われるなど、殷文化中心地域の鬲の特徴から離れる傾向が鮮明になる。また、鬲の襠部が外見上弧状を呈するものが見られるなど、Ⅲ期のC類鬲の一部に、A類鬲との折衷的とも言える傾向が指摘できる。

しかし、殷文化中心地域の土器から離れた形態が一般的になる中で、老牛坡遺跡に属する袁家崖墓で、殷墟出土の副葬土器にきわめて一致した形態の一連の土器が一括出土している。このことは、Ⅲ期の土器群Cが土器群Aなど関中地方の他の土器群と接近し、関中地方に土着化した殷系土器群として在地化が進む一方で、殷文化中心地域との直接的な関係をなお継続していたことを示唆する。

Ⅲ期ののち、すなわち殷墟Ⅳ前半前後より以降、西周Ⅰa並行の時期に入ると、土器群Cを主体とする遺跡は急速に失われたと考えられる。そして、老牛坡遺跡から遠くない豊鎬遺跡を中心に西周式土器が成立してくる。その西周式土器を構成した主要な器種のうち、少なくとも西周C類鬲は、土器群CⅢ期のⅦ形式鬲、X形式鬲などを継承した土器と考えられる。

また、後節でも述べるように、西周式土器を構成するその他の土器の中にも、殷系の系譜を引くものが少なくない。C類鬲以外の殷系土器の多くは、克殷後に殷文化中心地域から直接移入されたと考えるべき根拠もあるが、一部はC類鬲とともに関中地方在来の殷系土器群である土器群Cを媒介として西周式土器に導入された可能性も否定できない。

土器群CⅢ期の資料の増加を待つて再考したい。

土器群Cにともなった青銅器について指摘しておく。土器群Cにともなう青銅器は、遅くとも二里岡上層期並行のI2期から例が知られる。その時期の藍田懷珍坊遺跡では青銅器製作址の存在も知られており、少なくとも青銅器の一部は在地で製作されていたと考えられる。一方、土器群Aにともなう青銅器は、遅れて殷墟期並行の時期に入ってから例が知られ、また土器群Bにともなう青銅器はさらに遅れて、そのはつきりした例は殷墟IV並行の時期に下がる可能性がある。いずれにしても現有の資料からみて、関中地方における殷系の青銅器は、もともと土器群C主体の遺跡を残した集団によって同地方に導入されたことは確かであろう。

- 1 徐天進「試論関中地区的商文化」(『紀念北京大學考古專業三十周年論文集』文物出版社、一九九〇年所収)。陝西省考古研究所商周室・北京大學考古系商周実習組「陝西耀県北村遺址發掘簡報」『考古與文物』一九八八年二期。なお、右の徐天進論文とはほぼ同内容の同氏の碩士論文「試論関中地区的商文化」(北京大學考古系、一九八五年)がある。図の印刷が良好なことから、本稿の土器の図は後者のそれを一部採用させていただいた。
- 2 許益「陝西華泉殷代遺址調查簡報」『文物參考資料』一九五七年三期、北京大學考古教研室華泉報告編寫組「華泉、渭南古代遺址調查與試掘」『考古學報』一九八〇年三期、三二一—三三〇頁。
- 3 西北大學歷史系考古專業七七、八二級実習隊「陝西華泉、扶風和宝鶏古遺址調查簡報」『文博』一九八七年二期。
- 4 樊維岳・呉鎮烽「陝西藍田縣出土商代青銅器」『文物資料叢刊』三。西安半坡博物館・藍田縣文化館「陝西藍田懷珍坊商代遺址試掘簡報」『考古與文物』一九八一年三期。および、註1掲、徐天進論文で紹介されている土器(同論文、図六)を参照。
- 5 河北省文物研究所「藁城台西商代遺址」文物出版社、一九八五年、図版七一—七三。台西村第二期墓の年代は、報告者に

よれば「おおよそ、邢台曹演荘下層ないし殷墟文化早期に相当」する。

6 註4樊維岳・吳鎮烽報告、図五。

7 中国社会科学院考古研究所陝西武功発掘隊「陝西武功県新石器時代及西周遺址調査」『考古』一九八三年五期。

8 宝鶏市考古工作队「関中漆水下游先周遺址調査簡報」『考古與文物』一九八九年六期。

9 同遺跡の地名表記は、論文(上)では「益家堡」としたが、論文(上)校了後に公刊された発掘簡報(北京大学考古系「陝西扶風県壹家堡遺址発掘簡報」『考古』一九九三年一期)が、「扶風県地名志」(扶風県地名辦公室編)に依拠して「壹家堡」を採用した。本稿は以下、これにしたがう。

10 鄒衡「再論先周文化」(『周秦漢唐考古與文化國際學術會議論文集』西北大学学報編集部、一九八八年所収、二六―二七頁。

11 註9報告。

12 註9報告、注釈4参照。

13 高西省「陝西扶風県壹家堡商代遺址的調査」『考古與文物』一九八九年五期。

14 註1徐天進論文、二二―二頁。

15 この袋足鬲の図は紹介されていないが、簡報ではそれをいわゆる乳状袋足鬲、すなわち本稿のB類鬲とは区別して考えているようである。註9報告、八頁。一九八六年に遺跡を見学したさい、発掘者の孫華氏から受けた説明や拝見した写真より推して、筆者はそれは劉家遺跡M3…1のようなラグビーボール状の長い袋足をもつ鬲の類ではないかと考えている。先述の八三年柴家嘴…1の鬲もこれに類似することが考えられる。これらの袋足鬲は本稿のB類鬲の系列からは外れるもので、関中地方の土器群からみて外来的な土器である可能性を含めて、その系統については資料の増加を待って再検討する必要がある。

16 宝鶏市考古工作队「関中漆水下游先周遺址調査簡報」『考古與文物』一九八九年六期、図四―一〇、一五参照。

17 中国社会科学院考古研究所涇渭工作队「陝西長武碾子坡先周文化遺址発掘記略」『考古学集刊』六、図九―八―一〇参照。

礮子坡Ⅰ生活址と壹家堡Ⅱの豆は、口縁端部が外反または肥厚し、器身の下面に縄紋が施され、比較的長い脚部に数条の平行沈線と、ときに方形の透孔を有する点で共通点がある。このタイプの豆が土器群B（そのうちの劉家グループと礮子坡グループ）に特徴的な土器の一器種であることを確認しておく。壹家堡の資料が知られていなかった論文（上）では、土器群Bの豆については特に指摘しなかった。

18 論文（上）では、このタイプのA類鬲を、北呂遺跡に限られた例外的なタイプと考えて、形式として設定しなかった。ここでは、壹家堡の例を加えて A類鬲のX形式として設定する。

19 論文（上）五九頁。

20 張家坡生活址早期H301の尊に類似する。中国科学院考古研究所『灑西発掘報告』文物出版社、一九六二年、図六二—二。H301は出土した鬲などから『灑西』生活址早期の中でも早い段階（西周Ⅰa）に入ると考えられる。このタイプの尊も、論文（上）では類例が少ないと考えて、土器群Aの土器として明確に指摘しなかったが、壹家堡Ⅲの例を知って、これを土器群Aに特徴的な尊のタイプの一つと考える。

21 なお、第四節で述べたように、土器群B劉家グループは、墓地遺跡である劉家遺跡の土器のみが知られていたが、壹家堡遺跡の土器群Bをその地理的近さから劉家グループに属すると考えると、それは劉家グループの生活址の様相を示す資料となる。

22 発掘簡報は、本稿で称する壹家堡Ⅰ前段が殷墟Ⅰ、後段を殷墟Ⅱ相当とする。また、壹家堡Ⅱを殷墟Ⅲ前後とするが、筆者は、その下限は殷墟Ⅳ前半に下がると考える。さらに簡報は、壹家堡Ⅲを殷墟Ⅳ前半におくが、筆者は壹家堡Ⅲに若干幅をもたせ、年代の下限は西周Ⅰa、すなわち克殷前後に下がると考える。

23 羅西章「扶風白家窯水庫出土的商周文物」『文物』一九七七年二期。

24 鄒衡「論先周文化」（『夏商周考古学論文集』文物出版社、一九八〇年所収）、三三四頁。また同論文で、鄒衡氏はこの類の鬲片を扶風齊家村の西でも採集したことがあると述べ、扶風、岐山一帯に「武丁以前の商文化の遺址と墓が分布していた」と

推定している。

- 25 陝西周原考古隊「陝西岐山賀家村西周墓發掘報告」『文物資料叢刊』八。
 - 26 2墓は5mほどの距離で近接する。
 - 27 徐錫台「岐山賀家村周墓發掘簡報」『考古與文物』一九八〇年創刊号。
 - 28 註1徐天進論文、二二三頁。
 - 29 遺跡の概要については、劉士莪「西安老牛坡商代文化的發現與研究(摘要)」(『周秦漢唐考古與文化國際學術會議論文集』西北大學學報編集部、一九八八年所収)、劉士莪・岳連建「西安老牛坡遺址第二階段發掘的主要收穫」『西北大學學報』一九九一年三期、劉士莪「西安老牛坡商代遺址」(『中國考古學年鑒一九八九』文物出版社、一九九〇年所収、二四八頁)。
 - 30 註29掲、劉士莪「西安老牛坡商代文化的發現與研究(摘要)」。
 - 31 保全「西安老牛坡出土商代早期文物」『考古與文物』一九八二年二期。および、註1徐天進論文、二二八頁。
 - 32 西北大學歷史系考古專業「西安老牛坡商代墓地的發掘」『文物』一九八八年六期。
 - 33 鞏啓明「西安袁家崖發現商代晚期墓葬」『文物資料叢刊』五。
 - 34 註29掲、劉士莪「西安老牛坡商代文化的發現與研究(摘要)」、同「西安老牛坡商代遺址」。
 - 35 許偉・許永傑の両氏は、この老牛坡Ⅱ相当の高を取り上げて、4期に細分できるとする考えを示している(同「周文化形成與周人興起的考古學考察」『遼海文物學刊』一九八九年二期)。その区分の内容は、本稿の老牛坡Ⅱ前段、後段の区別とは必ずしも一致しない。ただ、同論文では段階設定の具体的な説明がされておらず、ここでその内容について十分な討論はできない。
- 36 罍、爵、觚ともに、類似する資料として藁城台西村(註5掲「藁城台西商代遺址」)の第二期墓出土例、あるいは殷墟Ⅰの三家莊東M3(中國社會科學院考古研究所安陽工作隊「安陽殷墟三家莊東的發掘」『考古』一九八三年二期)をあげることができらる。

37 殷墟Ⅰ後半とされる59武官M1（中国社会科学院考古研究所安陽工作队「安陽武官村北的一座殷墓」『考古』一九七九年三期）ないし侯家庄二〇二〇号墓のそれに比較的類似する（林巳奈夫氏の殷後期Ⅰ。同氏『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覧—』吉川弘文館、一九八四年）。

38 註37と同じ59武官M1の鼎に近いが、さらに遅い形態と考えられる。

39 殷墟出土の有蓋直内支は、59武官M1（殷墟Ⅰ後半）を最早の例として、Ⅲ、Ⅳ期に盛行する（楊錫璋「關於商代青銅戈矛的一些問題」『考古與文物』一九八六年三期参照）。同墓出土の戈は、『殷墟発掘報告』Ⅳ式戈の殷墟Ⅱの例に比較的近い（中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告一九五八—一九六一』文物出版社、一九八七年、図一一八—四、一一参照）。一方、『平』字形紋をもつ斧については、殷墟ⅡからⅣまでその例がある（前掲『殷墟発掘報告』、図一八六、および中国社会科学院考古研究所安陽工作队「一九六九—一九七七年殷墟西区墓葬発掘報告」『考古学報』一九七九年一期、図七〇参照）。

40 ただし、両足内面を側視したときの三足底部のつながりは、一般にC類鬲に特有の「へ」状になっている。第一節を参照のこと。

41 ただし、殷墟Ⅳ後半（鄭振香・陳志達「殷墟青銅器的分期與年代」『殷墟青銅器』文物出版社、一九八五年、図Ⅶ参照）には下がらないとみられる。

42 論文（上）五九頁。

43 旌介遺跡の鬲は、近接する2基の墓から出土している。1号墓の鬲はⅨ形式に通じる円筒状の器形をなすが、襜は明確な分襜を呈するもので、殷墟に類似する例を指摘することができる。2号墓のそれは聯襜鬲のように弧状の襜を呈する。むしろ後者の方がよりⅨ形式に近い器形と言える。このような鬲は山西省内ではこれ以外に例はない。なお両墓からは殷墟Ⅳ相当の多数の殷系の青銅器が出土しており、両の年代を示唆するとともに、同遺跡と殷系文化の緊密な関係が知られる。山西省考古研究所・靈石県文化局「山西靈石旌介村商墓」『文物』一九八六年二期。またその性格については、李伯謙氏の研究（同「從靈

石旌介商墓の発現看晋陝高原青銅文化的帰属」『北京大学学報哲学社会科学版』一九八八年二期を参照。

44 中国社会科学院考古研究所二里头工作队「偃師二里头遺址一九八〇—一九八一年Ⅲ区発掘簡報」『考古』一九八四年七期、

図四—五、八、同「一九八二年秋偃師二里头遺址九区発掘簡報」『考古』一九八五年二期、図五—三、四など参照。

45 晋中考古隊「山西太谷白燕遺址第一地点発掘簡報」『文物』一九八九年三期。当該遺跡では、二里头期、二里头期、殷墟Ⅰ、Ⅱ期にわたるいわば地方型の殷系隔の変遷が詳細に追跡されている。

六 土器群の分布と相互関係

以上、三、四、五節で土器群A、B、Cを編年的に捉え、それぞれについて時期を設定した。殷文化中心地域の編年との対応を軸に、各土器群の時期の横の関係をまとめると表8のようになる。以下に、殷文化中心地域の編年を共通の年代の指標として、年代別に土器群の分布の関係を整理しておきたい。

(1) 二里头期以前

関中地方における客省莊第二期文化期以降、二里头期以前の状況については考古学的にほとんど空白となっている。東に隣接する河南西部や山西南部で言えば二里头期の前後にあたる時期である。関中地方にもこの時期に二里头文化の地域グループのような文化、あるいは客省莊第二期文化の直接の後継者としての文化が存在したのかどうかは不明である¹⁾。しかし、この二里头期に並行の空白期間を挟みながらも、その後に見われてくる土器群A、B、Cと客省莊

第二期文化との間には、分布上一定の相関関係があるように見える。

先に客省莊第二期文化について、鞏啓明氏らに康家類型、双庵類型、石峁類型の三つの地域的類型に分類する研究のあることを述べた。^②いま、この分類にしたがうならば、康家類型は、華陰県以西、興平県以東の関中地方中、東部に分布し、一方、双庵類型は、武功県漆水河流域以西に分布して、陝西、甘肅境界地帯で齊家文化の分布域と交錯する。石峁類型は陝西北部の黄河支流沿いに遺跡が分布するとされるが、分布範囲は漠然としか知られていない。

表8 各土器群の時期の対照表

殷文化中心地域の編年／豊鎬の編年	土器群A	土器群B	土器群C
二里岡期以前			
二里岡下層		I 1 ?	I 1
二里岡上層		I 1 ?	I 2
殷墟 I	I	I	II 1
殷墟 II	I	I	II 2 → III 1
殷墟 III	II	II	III 1 → III 2
殷墟 IV前半	III 1	III	III 2
西周 I a (克殷前後)	III 2	IV 1	消失 ?
西周 I b	継続	IV 2	
西周 II 以降	↓	消失 ?	

西周式土器成立の背景(下)

このうちまず、双庵類型と土器群Bの分布域がかなり一致した範囲にあることが指摘できる。その場合しかし、両者の間に直接の文化的な継承関係があるのかどうかは明確でない。つまり土器群Bは、二里頭期前後の考古学的な空白をこえて、双庵類型を継承し変化した土器群なのか、それとも直接の継承関係はないが、旧双庵類型分布地域にのちに外来的に入り込んだ土器群であるのか、そして、それを担った集団もまた外来のものであったのか、そうした判断ができないのである。ただ、双庵類型と土器群Bを比較するとき、いずれもそれぞれの同時期に西方の甘肅東部ないしそれ以西の地域にあった土器群と密接な相互関係をもっていたことは強調されてよい。すでに詳しく述

べたように、土器群Bは、それと重なる時期に西方に並行した辛店文化、寺窪文化の土器とは、一部の土器形式を共有し、また相互に要素の影響が認められる関係にあった。関中地方西部とそれ以西地域とのこのような相互関係は、空間的な構図の類似だけで言えば、すでに客省莊第二期文化の遅い時期に現われていた双庵類型と齊家文化との相互関係から移行したもののようにもみられるのである。

一方、康家類型の分布域は、のちの土器群Cの早い時期の分布域と重なるところがある。しかし、股系の土器群である土器群Cと康家類型との間には土器の様相に大きな隔たりがあり、土器の系統としての継承関係は認められない。土器群Cは完全に外来の土器群である。しかしその場合、それを担った集団を想定するならば、かつて康家類型を担った在来の集団がやがて股系土器群の受け皿となったのか、あるいは股系土器をもった外来の集団が、ある段階で旧康家類型分布地域に入り込んだ結果であったのか、今のところ問題の解決に手がかりが見いだせない。

最後に、土器群Aであるが、現在知られるその早い時期の分布域は、漆水河下流の両岸地帯である。漆水河下流域は、双庵類型の分布域にはいるが、その東端部にあたっており、東の康家類型との境界的な地域であるという評価もできよう。土器自体を比較した場合、土器群Aと客省莊第二期文化との間には、一部の冚形式について継承関係のあった可能性が指摘できた点を除いて、具体的には何もわかっていない。したがって、土器群Aについてもまた、関中地方の在来の土器群なのか外来的なものなのか、この問題は投げかけられたままである。

以上のように、土器群A、B、Cと客省莊第二期文化との系統上の継承関係は不明であるが、分布上の相互関係だけを問題にすれば、康家類型のあとに土器群C、双庵類型のあとに土器群B、康家類型、双庵類型の境界地帯のあとに土器群Aという構図を考えることができる。単純化した見方ではあるが、これら土器群の系譜的背景を考える上で

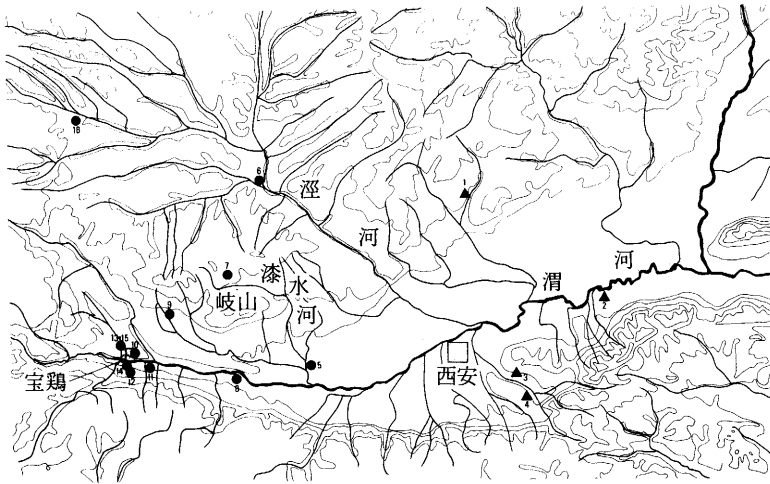
一定の意味をもつと考える。

(2) 二里岡期(図24-1)

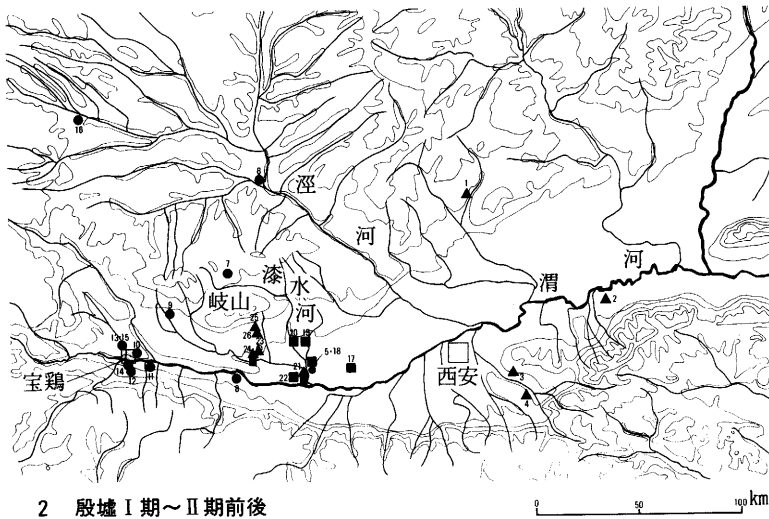
二里岡期に確実に存在している土器群は、土器群C(I₁、I₂期)である。土器群Aでこの時期に遡る資料は知られておらず、一方、土器群BはそのI期(特にI₁期)の上限年代が二里岡期に遡る可能性があると考えた。図24-1は、土器群BのI期が二里岡期に遡ると仮定して作図したものである。³⁾

知られる遺跡は少数であるが、土器群C主体の遺跡が西安以東および耀県北村遺跡より東に偏り、土器群B主体の遺跡が宝鶏周辺と涇河上流に分布するという、二つの土器群が関中地方の東西に対峙した分布が認められる。そして両者の中間の、分布図では空白になっている一帯で、このうち土器群Aが展開してくる。

土器群Bの地域グループの中で、涇河上流域に分布したと考えられる碾子坡グループは、先述したようにその生活址(碾子坡I)の土器の構成に少なからず殷系土器の要素を内包している。碾子坡Iの年代が殷墟I、IIもしくは二里岡期に上がるという先の結論を踏まえると、碾子坡グループが殷系土器群である土器群Cと接触を始めたのは殷墟I、II以前に遡ることが考えられる。この分布図では、西安以西から岐山あたりまでの渭河中流の地域と、その北側の涇河中、下流域を含む関中地方北部の広大な地域が空白になっているが、土器群B碾子坡グループと土器群Cの接触は、空白の関中地方北部がその舞台であったと推測できないだろうか。一方、渭河中流の空白地域は、以降の時期に土器群Aが展開してくる地域である。土器群Aの形成過程や、土器群B碾子坡グループと土器群Cの接触過程を考えるためにも、今後この分布図の空白が埋められることを期待したい。

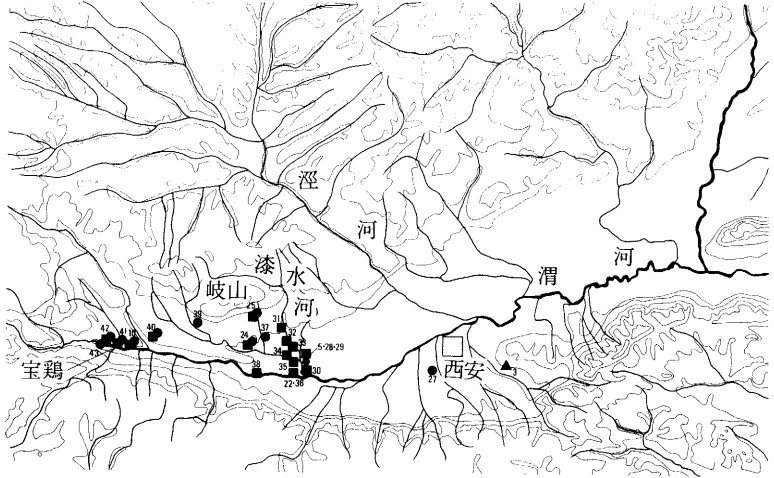


1 二里岡期

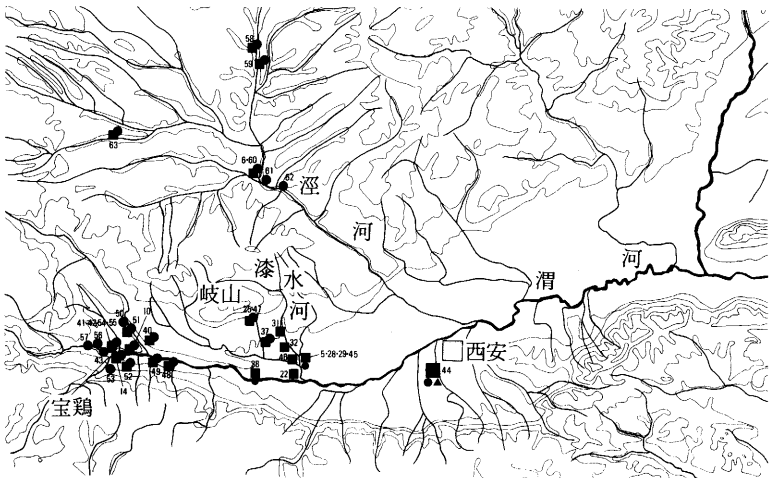


2 殷墟 I 期～II 期前後

※ 特に小さな記号で表示したものは、その地点で表示土器群の土器が、客体的に少数出土したことを示す。



3 殷墟Ⅲ期～Ⅳ期前半前後



4 西周 Ia 期前後 (殷墟Ⅳ期後半～西周王朝初葉)

- 土器群 A 主体の遺跡
- 土器群 B 主体の遺跡
- ◼ 土器群 A, B 共存遺跡
- ▲ 土器群 C 主体の遺跡

図 24(1) 先周時期の関中地方における土器群の分布(1) (遺跡地名は次頁)

- | | | | | |
|---------|---------|-----------|---------|---------|
| 1. 北村 | 14. 石嘴頭 | 27. 83客M1 | 40. 西村 | 53. 茹家莊 |
| 2. 南沙村 | 15. 金河 | 28. 漳家堡 | 41. 紙坊頭 | 54. 長寿山 |
| 3. 老牛坡 | 16. 翟家溝 | 29. 南廟 | 42. 趙家坡 | 55. 羅家壕 |
| 4. 懷珍坊 | 17. 東坡 | 30. 南店子 | 43. 晁峪 | 56. 林家村 |
| 5. 鄭家坡 | 18. 橋東 | 31. 黄家河 | 44. 豐鎬 | 57. 固川 |
| 6. 碾子坡 | 19. 周城 | 32. 文家台 | 45. 趙家来 | 58. 巴家嘴 |
| 7. 北馬坊 | 20. 岸底 | 33. 坡底 | 46. 潞西莊 | 59. 兔兒溝 |
| 8. 鄆県 | 21. 柴家嘴 | 34. 于家底 | 47. 礼村 | 60. 下孟村 |
| 9. 范家寨 | 22. 徐家湾 | 35. 北陽 | 48. 西崖 | 61. 史家河 |
| 10. 鬪鷄台 | 23. 白家窯 | 36. 坎家底 | 49. 潘家湾 | 62. 土陵 |
| 11. 姬家店 | 24. 壹家堡 | 37. 劉家 | 50. 上官莊 | 63. 于家湾 |
| 12. 涼泉 | 25. 賀家村 | 38. 北呂 | 51. 賈村 | |
| 13. 興隆 | 26. 王家嘴 | 39. 廟王村 | 52. 旭光 | |

図 24(2) 先周時期の関中地方における土器群の分布(2)

(3) 殷墟Ⅰ期～Ⅱ期前後(図 24-1-2)

渭河流域に土器群 A、B、C がそろって現われる。

土器群 C (Ⅱ 1、Ⅱ 2、Ⅲ 1 期) は、その分布域が渭河流域沿いに大きく西に伸張し、漆水河下流域やさらに西方の扶風、岐山西県一帯の周原地区にまで達する。その場合、青銅器の製作址をとまうなど比較的規模の大きな遺跡は、西安以東を中心とした、従来からの土器群 C 定着地域に偏り、新たに伸張した西の地域の遺跡はみな比較的小規模のものである。この時期の土器群 C の西への拡張は、必ずしも本格的な集団の拡散などを背景としたものではなかったと考えられる。

土器群 B (Ⅰ期) は、宝鶏周辺と涇河上流域に遺跡の集中が見られるが、土器群 C とは逆に東方に伸張する傾向があり、漆水河下流域でも少数の B 類冚が出土している。ただしその場合、この時期から同地域で展開を始めた土器群 A 主体の鄭家坡などの遺跡において、B 類冚のみが少数個体客体的にとまう状況である。漆水河下流域や周原地区ではこの時期、土器群 B を主体に形成された遺跡は知られていない。土器群 B の要素の東方への波及は、集団の移動や拡散などを想定すべきものではないであろう。

一方、土器群Aは、この時期になって漆水河下流域に登場してくる。その知られる分布範囲は一見きわめて狭く、ちょうど渭河流域を東から西に拡張してきた土器群Cの分布域の間に楔のように割って入るかたちになっている。

関中地方東部から西部へと拡張した土器群Cは、その途中、漆水河下流域でこの地に展開しつつあった土器群Aと接触したと考えられる。そして土器群Cが漆水河下流域をこえてさらに西の周原地区にまで拡張すると、その周原地区で形成された土器群C主体の遺跡（壹家堡Ⅰなど）の中に、土器群Cの拡張にともなって持ち込まれたとみられる土器群Aの一部の土器が現われている。

このような土器群Aと土器群Cの接触の過程で、A・C折衷形式の隔が生まれている。A・C折衷形式の隔は、漆水河下流域の土器群C主体の柴家嘴遺跡や、土器群A主体の鄭家坡遺跡で出土しているほか、周原地区の壹家堡Ⅰでも出土する。A・C折衷形式の隔は、その後A類Ⅲ形式の祖型となり、その影響は土器群Aの中に継承されることになる。その他、この時期以降に展開する土器群Aの土器の中で、少なくとも生活址出土の盆や、墓出土の豆などの器種、あるいは土器口縁端部の波状の裝飾（花辺）や、方格紋などの印紋の盛行に、土器群Cから土器群Aに移入された要素が指摘できる。土器群Aに土器群Cの要素が現われる現象は、主としてこの殷墟Ⅰ、Ⅱ並行期の前後におこった土器群Cの関中地方西部への拡張という動向が背景にあったと考えられよう。

なお筆者は、土器群Aの分布域が、必ずしも今知られる漆水河下流域に限定されるものではなく、現在空白のようになっていた漆水河上流域や涇河流域、あるいは西安より以西、岐山より以東の関中地方北部の台地上に広がりがあった可能性を考えておきたいとおもう。その理由の一つは、涇河上流域の土器群B碾子坡グループに、少数ではあるがA類隔の外観をもつ土器や、方格紋帯をもつ斂口鉢^①など土器群Aの要素がともなうことである。これは土器群Aの北

限が礪子坡グループと接触していたことを示唆する。また既知の土器群A分布範囲の北限である乾泉で、むしろ非常に典型的な早期のA類属の資料が出土していることも注意される。憶測の域を出ないが、土器群Aの早い時期の基盤となった地域を漆水河下流域に限定せず、そこをも含み、さらにその北側に広がる一帯を併せた地域を想定しておく必要があるのではないだろうか。

この時期の陝西省北部地域の土器群について付言しておく。陝北では、客省莊第二期文化石峁類型ののち、石峁類型の特徴的土器であった三足釜や、肩部の広い折肩罐などが、考古学的な空白の時期をこえて、殷墟期前半以降の陝北の遺跡（清澗李家崖など）に継承されている。殷墟期の陝北の土器群にはまた、器種として簋の盛行や、紋様として雲雷紋、方格紋の多用など、色濃く殷系土器の要素が認められる。陝北地域が石峁類型以来の在来的な土器の伝統を継承する一方で、殷墟期の殷系土器群と接触していたことを示している。その場合、陝北地域に殷系土器の要素を波及させた実体は、関中地方の殷系土器群である土器群Cであった可能性が考えられる。殷墟期並行の陝北の土器群と関中地方の土器群Cの接触を示す直接の分布上の接点は知られていないが、その陝北の土器群と年代、分布地域において重なりのある一群の青銅器の分布が注目される。北方系要素を多分に内包するこの青銅器群は、石楼—綏徳類型の名称でも呼ばれ、陝北、内蒙古中南部、山西北西部に広がりをもつが、最近、その分布の南限が関中地方北部の淳化県にまで達していることが知られた（62頁、表9参照）。淳化県はすなわち、北村遺跡の所在する耀県にも隣接し、この一帯は土器群Cの分布地に接していたと考えてよい位置にある。このような石楼—綏徳類型青銅器と土器群C分布地の接触は、土器群Cと陝北の土器群の何らかの接触を示唆するものと言えよう。

(4) 殷墟Ⅲ期～Ⅳ期前半前後(図24-3)

この時期は、文献の伝えるところからみて、殷墟Ⅲ頃とⅣ前半頃に数段階にわたる「周」勢力の重要な歴史的動向も想定され、可能ならば時期を細分して分布図にまとめるべきである。しかし現状では知られる遺跡の数十分ではなく、細分すると分布の傾向に誤った理解が生じる恐れもあり、ここではこの時期をひとまとめにして図化した。

まず、かつて殷墟Ⅰ、Ⅱ並行の時期に西に大きく拡張した土器群C主体の遺跡は、殷墟Ⅲ以降、周原地区あるいは漆水河流域から急速に姿を消し、また、関中地方北部で長く続いた北村遺跡なども終りをむかえ、標準的遺跡は西安以南の老牛坡遺跡に限定されるようになる。

土器群B主体の遺跡は、前の時期より東に拡張して、遅くとも殷墟Ⅲ並行期には周原地区に現われている。殷墟Ⅲ並行期にはしたがって、宝鶏周辺(金河・晁峪グループ)、周原地区(劉家グループ)、涇河上流域(碾子坡グループ)に跨って広く分布したと考えられ⁸⁾、さらに東の漆水河下流域でも殷墟Ⅰ、Ⅱ期に引き続き土器群A主体の遺跡に若干量のB類隔をもたらしている。

一方、土器群A主体の遺跡は、殷墟Ⅲの時点ではなお漆水河下流域に限定されていたようである。ところが殷墟Ⅳ並行期に入る前後から、きわめて短期間のうちにまず西方へと著しく伸張し、周原地区や宝鶏周辺に急速にその分布域を広げている。その場合、周原地区や宝鶏周辺では在来の土器群B(劉家グループ、金河・晁峪グループ)との共存遺跡を広く形成することになる。

他方、土器群Aはこの時期すでに、漆水河下流域から東の方に西安周辺へも波及して、老牛坡遺跡の一部(袁家崖墓)などにその土器をもたらしている。しかし、この方面への本格的な拡張は、次の時期の動向である。西安周辺の

豊鎬地区は、老牛坡遺跡に近いことから早くから土器群Cと関係が深いと予想されるが、殷墟Ⅲ〜Ⅳ前半頃にはこの地にB類鬲をともなう墓も現われたりして、やや複雑な様相を呈している。

この時期で最も注目される地点は、周原地区であろう。ここでは主要な遺跡の様相が、殷墟Ⅰ、Ⅱ↓殷墟Ⅲの間に土器群C↓土器群Bに移行し、殷墟Ⅲ↓殷墟Ⅳ前半にかけて土器群B↓土器群Aないし土器群A、B共存遺跡に変化している。これらの変化は扶風壹家堡Ⅰ↓壹家堡Ⅱ↓壹家堡Ⅲのきわだった変化と、土器群B主体の劉家遺跡の殷墟Ⅲにおける出現と殷墟Ⅳにおけるその衰退の状況に端的に示されている。しかし、この時期の周原地区を考えると、いわゆる古公亶父による「周」の遷岐という文献に伝えられる動向(事実とすれば、殷墟Ⅲ頃におこったことが考えられよう)は、必ずしも考古学的に捉えられているとは言えない。もし土器群Bの殷墟Ⅲにおける周原地区での出現をその動向と考えると、いったい土器群Bが、これよりのち西周王朝の土器の形成から距離をおき、結局は「西周式土器」の構成に直接関与しないという後述する状況が説明しがたいであろう。そこであるいは、のちに「西周式土器」の主体となる土器群Aの周原地区での出現が、現在知られる殷墟Ⅳ前半よりも遡ることが今後の調査で知られる可能性もある。ただしこうした議論の以前に、古公亶父の「周原」が、現在周原遺跡の中心と考えられている扶風県、岐山県境界地帯以外の別地に存在した可能性についても検討すべきであろう。いずれにしても、いまだそのごく一部が調査されているにすぎない周原地区の、今後の広範な調査が期待される。

周原地区の動向はおくとして、殷墟Ⅳ前半における土器群Aの関中地方西部、特に宝鸡周辺への拡張という顕著な現象は、この時期に想定される文王による周勢力の西方への拡大を反映していると考えることができると言える。実態としてその拡大の時期と範囲が考古学的に掌握できる資料が揃いつつあると言える。やがて「周」は東に伸張し、豊邑を造

営したと考えられるが、その以前にまず関中地方の西部にその勢力を伸ばしたことが土器群Aの動向に明解に窺えるのである。

土器群Aのこの西方への拡張の過程で注目されるのは、関中地方西部在来の土器群Bの伝統を、当地から直ちに駆逐する方向には変化せず、むしろ共存的に遺跡を形成している事実である。すなわち同じ墓域に違う系統の土器を副葬した墓が並存し（ただし土器群B主体の墓は少数派として、ときに墓域内で一定の集中を見せる）、また生活址の土器でも2系統が一括出土して共存のであったりする。しかし土器群Aの拡張が単純に漸移的で平和的なものであったとは考えられない。そのことを窺い知る手がかりとして、土器群A、B共存遺跡の墓域でしばしば見られる戈、泡などの少数の青銅器を副葬した均一な性格の小型墓の集団が注目される。従前の関中地方に見られなかった性格の墓である。根拠は十分ではないが、先にこれらが戦士的な性格の集団ではないかと推測した。土器群Aが拡張した地域で、そうした戦士的な集団の墓群が広く形成されていたとすれば興味深いことである。

最後に、この時期の陝北の土器群の動向について付言する。前の時期で述べた陝北の土器群は、殷墟期後半を挟んで西周期に継続したと考えられているが、次節で述べるように、この土器群のもっとも特徴的な土器の一つである三足釜が、殷墟期の後半とおもわれる時期に、関中地方の遺跡にも出現している。陝北から関中地方に移入されたと思われる三足釜の存在は、陝北と関中地方の関係を示す好資料と言えよう。三足釜の系譜は、時期が下ってその後西周式土器を構成する土器の中に加わっていく。

(5) 西周Ia期前後（殷墟IV期後半）西周王朝初葉（図24-4）

土器群Aは、殷墟Ⅳ前半前後に漆水河下流域から関中地方西部に急速に拡張したが、続いて殷墟Ⅳ後半に入ると、はじめて東方の豊鎬地区にも本格的に出現する。これとは対照的に、豊鎬地区の東郊にあって二里岡期以来連綿と継続してきた土器群C主体の老牛坡遺跡は、殷墟Ⅳ後半以降のようすが不明になる。文献に伝えられる文王による崇侯虎の討伐と、豊邑造宮の動向が反映された文化現象であろうか。

豊邑造宮前後にあたるこの時期、豊鎬地区の土器の構成は、土器群Aを主体にして、もともとこの地に在来的であった土器群Cの土器、特にそのC類鬲を加えたものになっている。後述するように土器群Cを継承した殷系土器である西周C類鬲や、克殷後に殷文化中心地域から直接豊鎬地区に移入されたとみられる殷系の土器は、やがて西周Ⅰb以降、豊鎬を中心に成立する西周式土器において土器群Aの流れをくむ土器に次ぐ位置を占めるようになる。

一方、関中地方西部では、殷墟Ⅳ前半以来の土器群Aの西方への拡張傾向が続き、宝鶏周辺のほか、涇河上流域でも土器群A、B共存遺跡が知られる。これら共存遺跡では総じて土器群Aが土器群Bに対してしだいに優勢になり、やがて次の西周Ⅰb以降にはこれら共存遺跡は基本的に豊鎬を中心に成立した西周式土器に一致した内容をもつものに变化する⁽¹²⁾。

関中地方東部の周の都城豊鎬を中心に、土器群Aを主体とした西周式土器の形成が始まり、一方、関中地方西部では土器群A、B共存遺跡が広く形成され、その中で在来の土器群Bが急速に衰退するといった動向は、成立期の西周王朝の政治的動向を背景としたものに相違ない。しかし、こうした全般的な動向の中において、見逃すことのできないいくつかの個別的現象も指摘できる。

すなわち、①宝鶏南部における土器群B茹家莊グループでは、宝鶏付近に在来の土器群Bと南方起源の四川系の土

器が共存し、かつ隣接する遺跡では寺窪文化系の土器が多数出土するという状況を呈する。のちの陳倉道、すなわち宝鶏から南下して秦嶺を越え四川方面と結ぶ交通路は、殷末周初の頃すでに関中地方と南方との文化交流の道となっていたことを示唆する。②宝鶏市街地のさらに西部、関中地方の西端に位置する晁峪遺跡などでは、この西周Ⅰa並行の時期に至っても、依然として比較的純粋な土器群B金河・晁峪グループの特徴を継続していた。③都城豊鎬を中心に、土器群Aに殷系土器の一部を導入した「西周式土器」が成立する動向とは別に、土器群Aの古くからの分布地であった漆水河下流域周辺の遺跡では、西周期に入って以後も長らく先周時期以来の比較的単純な土器群Aの組成を保持した現象が認められる。②、③は、西周期に入って、王朝の政治的動向を背景に西周式土器が成立し、それが各地に移入されていく過程で、局地的には先周時期以来の伝統的な土器群AやBの組成が継承された現象である。次節でいま少し詳しく取り上げたい。

(6) 先周時期の青銅器の分布

青銅器を専論することは別の機会に譲り、ここではただ、先周時期の青銅器を二里岡期と殷墟Ⅲ期前後と、殷墟Ⅳ期と西周Ⅰa期前後の2段階に分け、この間の青銅器出土地点の変化について述べておく。この2段階に分ける意味は、土器の動向から知られた殷墟ⅢとⅣ前後の間におこった土器群Aの拡張という大きな変化を、青銅器の側面から補足することである。

表9は、二里岡上層期から殷墟Ⅲ期前後、表10は、殷墟Ⅳ期と西周Ⅰa期前後の青銅器出土地の一覧表で、これらを図化したのが図25である。表中に示した青銅器の年代観は、林巳奈夫氏¹³⁾の青銅器編年や、徐天進氏¹⁴⁾、李峰氏¹⁵⁾、飯島

表9 関中地方出土の青銅器1（二里岡上層期～殷墟Ⅲ期前後）

（表9、10の遺跡地名番号は、それぞれ図25-1,2の番号に対応。遺跡の位置が正確に掴めない場合、原則として県城所在地に位置を示した）

遺跡	遺構	出土青銅器	時期	出典	備考
1 華県桃下村 1972	不詳	鼎1	殷墟I前後	陝西出土商周青銅器1・124	
2 渭南姜家村 1984	不詳	鼎(弦紋)1, 爵, 斝, 戈など17点	殷墟I前後	考與文87-4	周淵に殷代土器片
3 渭南南堡村 1975	墓	鼎, 簋, 矛など52点	殷墟Ⅱ～Ⅲ	考與文80-2	
4 藍田懷珍坊 1973	不詳	鼎(弦紋)1, 戈, 斝, 鏃, 斧, 銅餅など	二里岡上層 ～台西村	文資3 考與文81-3	
5 藍田黃溝村 1972	窖穴	簋1, 戈など	殷墟Ⅱ前後	文資3	
6 西安老牛坡 1972-86	墓 不詳	鼎1, 罍2, 觚4, 觶2, 戈, 斝, 鏃, 斧など	台西村 ～殷墟Ⅱ	考與文81-2 文88-6	
西安老牛坡	不詳	鼎1, 觶2, 豆1	台西村 ～殷墟Ⅳ	考與文90-5	西安文物中心藏品
7 西安袁家崖 1978	墓	爵1, 觶1	殷墟Ⅲ～Ⅳ	文資5	老牛坡遺跡の一部
8 西安田王村 1959	不詳	兩鼎(弦紋)1	二里岡上層 ～台西村	陝西出土商周青銅器1・1	
9 銅川三里洞 1965	不詳	鼎(円錐状三足)1	二里岡上層	考82-1	
10 銅川紅土鎮 1974	不詳	簋1, 弓形器	殷墟Ⅲ～Ⅳ	考82-1 陝西出土商周青銅器4・194-195	関中型
11 淳化西梁家 1985	不詳	鼎(簡化饗饗紋)1	殷墟Ⅱ以降	考與文90-1	
12 淳化趙家莊 1982	墓	鼎(簡化饗饗紋)2, 刀, 削, 斧, 鏡	殷墟Ⅱ以降	考與文86-5	陝北青銅器と共通要素
13 礼泉朱馬嘴 1972	不詳	鼎1	殷墟期	陝西出土商周青銅器1・57	関中型
14 礼泉朱馬嘴 1977	窖穴?	鼎(弦紋)1, 鼎1, 觚1, 爵1, 觶1, 戈, 鏃	殷墟Ⅱ～Ⅲ 前後	文資3	関中型含む
15 戸県侯家廟 1971	不詳	罍1	殷墟I前後	陝西出土商周青銅器1・5	
16 周至竹峪村 1972	不詳	爵1, 觶1	殷墟Ⅱ以降	陝西出土商周青銅器4・164-165	
17 武功鄧家坡 1980	墓?	鼎(弦紋)1, 觶1, 觶形杯1, 泡	殷墟Ⅰ～Ⅱ	文84-7	
18 武功浮沱村 1959	不詳	鼎3, 簋2, 觚1, 罍1, 戈, 斧, 鈴など	殷墟Ⅱ以降	陝西出土商周青銅器1・125-136	関中型含む

西周式土器成立の背景(下)

遺 跡	遺構	出土青銅器	時 期	出 典	備 考
19 扶風呂宅村 1974	墓	爵 1, 觚 1, 戚	殷墟 II 前後	陝西出土商周青銅器 1・47-49	
20 扶風呂宅村 1975	不詳	簋 1	殷墟 III~IV	陝西出土商周青銅器 1・50	
21 扶風美陽 1973	墓	鼎(簡化饗饗紋) 1, 鬲 1, 簋 1, 高足杯 1, 卣 1 など	殷墟 I~IV (年代に幅のある一括遺物)	文78-10 陝西出土商周青銅器 1・41-46	関中型 含む
22 扶風陽家堡 1974	不詳	觚 1, 簋 1	殷墟 II 以降	陝西出土商周青銅器 3・30-31	
23 扶風神水坡 1956	不詳	鼎 1	殷墟 II 以降	陝西出土商周青銅器 3・29	関中型
24 扶風寺家堡 1980	不詳	鼎(弦紋) 1, 戚, 鏃	殷墟 I 前後	考與文89-5	
扶風県出土	不詳	鼎 1	殷墟 II 以降	考與文90-5	西安文物 中心藏品
25 岐山王家嘴 1977	不詳	鼎(簡化饗饗紋) 1, 有蓋戈	殷墟 II 以降	陝西出土商周青銅器 1・12-13	陝北青銅器と共通 要素
26 岐山京当 1972	窖穴	鼎(弦紋) 1, 罍 1, 爵 1, 觚 1, 戈	台西村	文77-12	
27 岐山廟王村 1984	墓	鼎(弦紋) 1 (鄭家坡の鼎に類似)	殷墟 I~II	考與文90-1	
28 郿県出土	不詳	鼎 1	殷墟 II 前後	鄭衛『夏商周考古學論文集』 334頁	
29 麟游県出土	不詳	鼎 1 (老牛坡 M10 : 1 に類似)	殷墟期	考與文91-5	
30 鳳翔官帽頭 1978	不詳	爵 1, 觚 1	殷墟 III~IV	陝西出土商周青銅器 3・184-187	

表10 関中地方出土の青銅器2（殷墟Ⅳ期～西周Ⅰa期前後）

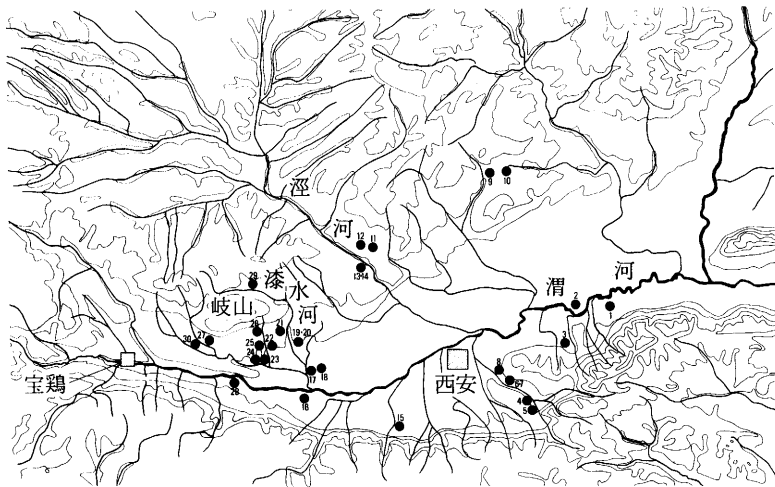
遺 跡	遺構	出土青銅器	時 期	出 典	備 考
1 西安袁家崖 1978	墓	爵1, 觚1	殷墟Ⅲ～Ⅳ	文資5	老牛坡遺跡の一部
2 長安馬王村 1963	墓	方乳紋簋1, 鼎2, 觚1, 爵2, 觚1, 罍1, 卣1, 戈など	西周Ⅰa	考63-8	関中型
3 67張家坡 1967	墓	方乳紋簋1, 鼎4, 爵3, 觚2, 簋2, 卣1, 尊1, 戈など	西周Ⅰa	学80-4	67年出土青銅器総計。関中型含む
4 77客省莊1 1977	墓	方乳紋簋1, 鼎3, 簋1	西周Ⅰa	考81-1	関中型含む
5 83禮毛1 1983	墓	方乳紋簋1, 鼎1	西周Ⅰa	考84-9	関中型含む
6 84禮西15 1984	墓	方乳紋簋1, 鼎1, 爵1, 觚1	西周Ⅰa	考87-1	関中型含む
7 涇陽高家堡 1971	墓	鼎2, 爵2, 觚1, 罍1, 卣2, 觚1, 簋2, 盃1, 盤1, 尊1, 戈など	西周Ⅰ	陝西出土商周青銅器4・136-146	関中型含む
8 涇陽臬出土	不詳	觚1	西周Ⅰa	陝西出土商周青銅器4・147	関中型
9 銅川紅土鎮 1974	不詳	簋1, 弓形器	殷墟Ⅲ～Ⅳ	考82-1 陝西出土商周青銅器4・194-195	関中型
10 銅川三里洞 1962	不詳	鼎1（饗饗紋は武功浮沱の鼎に類似の地方色）	殷墟Ⅳ前後	考82-1	関中型
11 銅川十里鋪 1975	不詳	鼎1	殷墟Ⅳ前後	考82-1	
12 銅川東十里鋪 1975	不詳	鼎1	西周Ⅰa	陝西出土商周青銅器4・193	
13 淳化史家塬 1979	墓	鼎1, 方乳紋簋1, 簋1	西周Ⅰ	陝西出土商周青銅器4・189-191	関中型
14 淳化黑豆嘴 1982	墓	爵1, 壺1, 泡, 刀, 削, 鏃, 鉞, 弓形器, 斧, 戚, 戈, 有蓋戈, 金飾りなど	殷墟Ⅳ～ 西周Ⅰ	考與文86-5	陝北青銅器と共通要素
15 礼泉泔河瑞 1971	不詳	鼎2, 方乳紋簋2, 簋1	西周Ⅰa	陝西出土商周青銅器4・148-152	関中型含む
16 乾泉臨平 1970	不詳	鼎3, 簋1	西周Ⅰa	陝西出土商周青銅器4・175-177	関中型含む

遺 跡	遺構	出土青銅器	時 期	出 典	備 考
17 武功渠子村 1976	不詳	甗1, 簋3	西周 I	陝西出土商周青銅器4・110-113	
18 武功徐家灣 1976	不詳	尊1, 罍1	殷墟IV~ 西周 I a	陝西出土商周青銅器4・114	
19 周至五里村 1973	不詳	簋1	西周 I a前後	陝西出土商周青銅器4・167	
20 周至豆村 1974	不詳	簋2	西周 I a前後	陝西出土商周青銅器4・169-170	
21 扶風劉家 1972	墓	鼎3, 罍1, 甗1, 簋3, 卣2, 尊2, 壺1, 罍3, 爵1	西周 I	陝西出土商周青銅器3・35-50	関中型 含む
22 扶風下家村 1970	墓	鼎1, 簋1	殷墟IV前後	陝西出土商周青銅器3・63-64	関中型 含む
23 扶風雲塘 1950	不詳	尊1	殷墟IV前後	陝西出土商周青銅器3・66	
24 扶風呂宅村 1975	不詳	簋1	西周 I a前後	文博88-6	
25 扶風縣博物館	不詳	方乳紋簋6	西周 I a	文博88-6	館藏品 関中型
26 岐山礼村 1953	不詳	方鼎1, 爵1, 觚1, 罍1, 尊1	西周 I a前後	陝西出土商周青銅器1・15-19	
27 岐山賀家村 1955	不詳	甗1, 卣1	殷墟IV前後	陝西出土商周青銅器1・20-21	関中型
28 岐山賀家村 1973	墓	方乳紋鼎1, 罍1, 甗1, 簋3, 卣2, 爵1, 戈, 有蓋戈, 鏃, 弓形器など	殷墟IV~ 西周 I a前後 (年代に幅がある一括遺物)	考76-1	1号墓出 土 関中型 含む
29 岐山王家嘴 1953	不詳	鼎1, 簋1, 戈, 泡, 鏡	西周 I	陝西出土商周青銅器1・139-144	関中型 含む
30 岐山北寨子 1975	不詳	鼎2, 簋2	西周 I a	陝西出土商周青銅器1・145-147	
31 鄠縣鳳池村 1980	不詳	方鼎1, 簋1	西周 I a前後	陝西出土商周青銅器3・190-191	
32 鄠縣小法儀 1980	墓	罍1, 戈, 泡など	殷墟IV前後	考與文81-1	
33 鳳翔新莊河 1975	不詳	方乳紋鼎1, 方乳紋簋1, 戈など	西周 I a	陝西出土商周青銅器3・175-176	関中型 含む
34 鳳翔丁家河 1972	不詳	鼎1, 方乳紋簋1, 簋1, 爵1	西周 I a	陝西出土商周青銅器3・178-181	関中型 含む
35 鳳翔董家莊 1978	不詳	爵1, 觚1,	殷墟IV	考與文84-1	

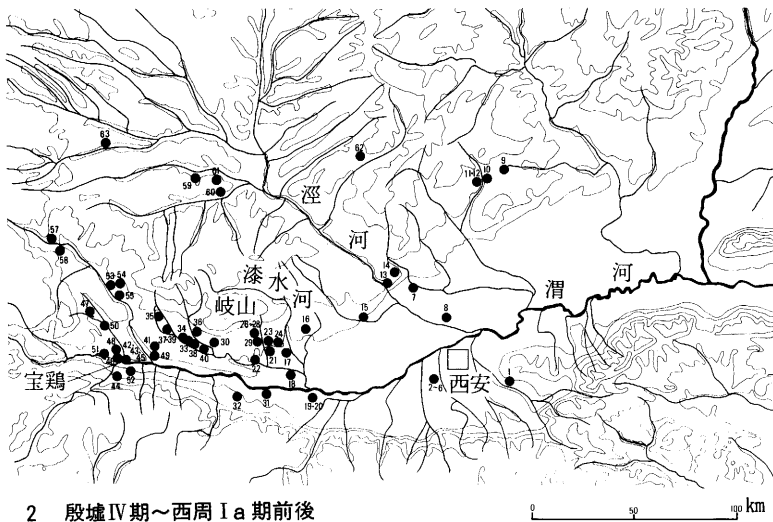
遺 跡	遺構	出土青銅器	時 期	出 典	備 考
36 鳳翔河北村 1973	墓	鼎1, 簋1	殷墟IV ~西周 I a	陝西出土商周青銅器3・182-183	
37 鳳翔花園村 1978	不詳	觚1, 爵1	殷墟IV ~西周 I a	陝西出土商周青銅器3・184-185	
38 鳳翔官帽頭 1978	不詳	爵1, 觚1	殷墟III~IV	陝西出土商周青銅器3・186-187	
39 鳳翔勸誦村 1974	不詳	觶1	殷墟IV~ 西周 I a前後	陝西出土商周青銅器3・188	
40 鳳翔橫水 1972	不詳	方乳紋簋1	西周 I a	考與文84-1	関中型
41 鳳翔西村 1979	墓	鼎3, 方乳紋簋4, 戈, 泡など	西周 I a	考與文82-4	関中型 含む
42 宝鷄桑園堡 1958	墓	鼎6, 觚1, 簋1, 方 乳紋簋4, 戈, 戟な ど	西周 I	陝西出土商周青銅器4・1-7	関中型 含む
43 宝鷄峪泉村 1970	墓	鼎1, 簋1, 卣1, 觶1, 弓形器, 戈, 斧, 当 盧, 泡など	殷墟IV ~西周 I a	陝西出土商周青銅器4・8-12	関中型 含む
44 宝鷄茹家庄 1970	不詳	罍1	西周 I a前後	陝西出土商周青銅器4・39	
45 宝鷄老虎溝 1956	不詳	鼎2, 觚1	西周 I a	陝西出土商周青銅器4・98-100	関中型
46 宝鷄紙坊頭 1981	墓	鼎4, 觚1, 簋5, 鬲 2, 罍1, 觶1, 佩飾, 車器	西周 I a前後	『宝鷄強國墓地』	M1出土 関中型 含む
宝鷄市区出土 1958	不詳	鼎4, 方乳紋簋1	西周 I a	文79-12	関中型 含む
47 宝鷄強家庄 1979	墓	爵1, 觚1, 觶1	西周 I a	考與文81-1	
48 宝鷄石橋 1979	不詳	方乳紋鼎1, 方乳紋 簋1, 簋1	西周 I a	考與文81-1	関中型 含む
49 宝鷄代河灣 1980	不詳	方乳紋簋1, 觶1な ど	西周 I a	考與文81-1	関中型 含む
50 宝鷄白道溝	不詳	簋1, 戈	西周 I a	考與文81-1	
51 宝鷄林家村 1983	墓	鼎1, 簋1	西周 I a	文88-6	関中型 含む
52 宝鷄旭光 1984	墓	方乳紋簋1, 觚1	西周 I a	文博85-2	M1出土 関中型含む
53 千陽鄧家塬 1975	不詳	方乳紋鼎1, 方乳紋 簋1	西周 I a	陝西出土商周青銅器3・169-170	関中型

西周式土器成立の背景(下)

遺跡	遺構	出土青銅器	時期	出典	備考
54 千陽寺坡村 1973	不詳	方乳紋盃 1	西周 I a	陝西出土商周青銅器3・171	関中型
55 千陽沙溝村 1973	不詳	觚 1	西周 I a 前後	陝西出土商周青銅器3・172	
56 千陽県出土	不詳	爵 1	西周 I a 前後	陝西出土商周青銅器3・174	県文化館 所蔵
57 隴県韋家庄 1977	墓	鼎 1, 簋 2, 爵 1, 盃 1, 尊 1, 卣 1, 解 1, 戈, 泡など	西周 I	陝西出土商周青銅器3・156-162	
58 隴県北坡村 1974	墓	方乳紋鼎 1, 方乳紋 盃 2, 甗 1	西周 I a	考與文91-5	関中型
59 長武劉主河 1969	不詳	方鼎 1, 簋 1, 刀	殷墟IV ~西周 I a	陝西出土商周青銅器4・154-155	
60 長武張家溝 1972	不詳	方乳紋盃 1, 鼎 1, 簋 1 など	西周 I a	考與文81-1	関中型 含む
61 長武衛園村 1972	不詳	鼎 1	西周 I a 前後	陝西出土商周青銅器4・160	
62 旬邑崔家河 1978	墓	方乳紋鼎 1, 方乳紋盃 1, 戈, 当盧, 泡, 鏡 など	西周 I a	考與文84-4	関中型 含む
63 甘肅崇信 于家湾 1984	墓	方乳紋盃 3, 方乳紋 鼎 1	西周 I a	考與文86-1	M9 出土 関中型 含む

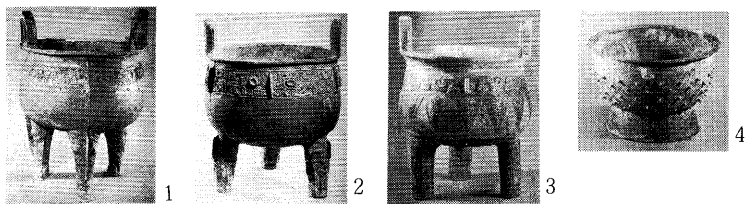


1 二里岡上層期～殷墟Ⅲ期前後



2 殷墟Ⅳ期～西周Ⅰa期前後

図 25 関中地方における先周時期の青銅器出土地点 (遺跡番号は表 9, 10に対応)



1. 礼泉朱馬嘴 2. 武功浮沱村 3. 宝鷄峪泉 4. 宝鷄桑園堡

図 26 関中型青銅器の例

武次氏¹⁶⁾らの研究を参照しつつ筆者の判断によるものである。従来¹⁷⁾の所説と若干異なる年代認識も含まれるが、ここでは個々に例をあげて説明することは省略する。

関中地方出土の青銅器は、広い意味ではその大部分が殷系青銅器として位置づけられる。それらはまた殷文化中心地域の青銅器に基本的に一致する形態をもつ一群と、殷系青銅器ではあるが、地方的に変化した器形、紋様を有する一群とに分けられる。

後者の青銅器を、本稿では関中型と称する¹⁸⁾(図26)。明確に関中型に分類すべき青銅器は、二里岡期にはなく、およそ殷墟Ⅱ以降に現われ、しだいに増加して、西周Ⅰaでは、関中地方出土青銅器の多くがこうした地方型青銅器に属するものとなる。西周Ⅰaにおける最も多く知られる代表的な関中型青銅器が、たびたび指摘してきた方格乳釘紋盃(図26-4)や方格乳釘紋鼎である。それらの紋様が、土器群Aの印紋から引用されたとみられるため、その製作主体者が土器群Aと密接な関係にある一群の青銅器と考えられたものである。

関中地方出土の青銅器は、土器と共伴しない例が多く、青銅器と土器群の関係を厳密には言えない状況があるものの、青銅器の分布にみられる動向が、土器群の動向と密接に連動していることは確かである。

まず二里岡上層、殷墟Ⅲ前後の青銅器の分布をまとめると、①主な分布範囲は、土器群C主体の遺跡が集まる西安以東と、土器群Cが殷墟Ⅰ、Ⅱ前後に一時的に西に伸

張した範圍とによく重なる。その場合、西安以東と、銅川県など関中地方東北部の遺跡では、比較的多くの二里崗期に遡る青銅器が出土し、漆水河下流域から扶風県、岐山県一帯では、一部二里岡上層に年代の上がる例を含みながら、多くは殷墟Ⅰ、Ⅱないしそれ以降に下がる青銅器が出土している。この分布の範圍と年代の傾斜は、この時期の土器群Cの動向に一致した動きを示していると言えよう。②対照的に、土器群Bの濃密な分布地域である宝鶏周辺や、涇河上流域ではこの時期まったくといってよいほど青銅器は出土していない。土器群Bと青銅器の分布上の接点があるとすれば周原地区周辺に限られる。③この時期、土器群Cの分布に割り込むように漆水河下流域に分布した土器群A主体の遺跡(例えば鄭家坡Ⅰ)でも、青銅器が出土している。このような青銅器は、殷墟Ⅰ、Ⅱ前後の土器群Cの西への拡張にもなっており、同地の土器群Aの遺跡に持ち込まれたものと考えられる。④一方、関中地方北部の淳化県周辺の遺跡では、殷系青銅器のほか、陝北の青銅器(石楼—綏徳類型)と共通する北方系要素がともなう例がある。このことは、先述したように、陝北の土器群と関中地方の土器群との接点を考える上でも注目される。

次に殷墟Ⅳと西周Ⅰa前後の分布をまとめると、①分布範圍の全体は、この時期に土器群Aが非常な拡張をしたその全域によく重なる。すなわち西は宝鶏周辺、隴県付近、および涇河上流域から、東は豊鎬地区に広がっている。②もとの土器群C分布の中心地域であった豊鎬地区以東では、青銅器の出土例は袁家崖などごく少数に限られてしまう。土器群Cの衰退に一致した現象であろう。③土器群Bの分布地域であった宝鶏周辺や涇河上流地域では、この時期土器群A、B共存遺跡が広範に形成される。土器群Aが西に拡張した結果である。殷墟Ⅳ以前にはほとんど青銅器が出土しなかったこの地域で、きわめて広範に青銅器が出土するようになる変化(図25の、30番台以降の地点が大部分これに相当する)は、土器群Aの関中地方西部への拡張という動向に一致するものである。

以上のように、二里岡期から殷墟期前半ごろまでの関中地方の青銅器の製作者、所有者は主として土器群Cに關係する集団であったと考えられる。殷系土器群である土器群Cに關係する集団が、一方で、関中地方に殷系青銅器を導入し、また初期における青銅器の拡散が、主として彼らの動向に従ったことはきわめて当然である。そうして関中地方で製作がはじまった殷系青銅器であるが、殷墟Ⅱ前後からは、同時期の殷文化中心地域の形態を逸脱した関中型青銅器の一群が行われるようになる。この動向と相前後する時期から土器群Cが衰退し、その分布域は関中地方東部に限定されるようになる。そして青銅器の製作は、土器群C以外の集団、特に土器群Aに關係する集団によっても行われるようになったと考えられる。その結果として、殷墟Ⅳ以降に土器群Aが関中地方西部に擴張するとき、それにもなつて青銅器も西方へ拡散したのである。

克殷前後の西周Ⅰa頃に関中地方西部などに移入された青銅器のもっとも代表的なものは、方格乳釘紋盃と方格乳釘紋鼎である。その特徴ある青銅器紋様は、土器群Aの印紋からの引用であろうと推測された。つまり土器群Aの中から生まれた関中型青銅器の一群が、土器群Aの擴張にもなつて各地にもたらされた現象が読み取れるのである。^⑧

1 ただし、客省莊第二期文化として知られる資料の中に、実際の年代が二里頭期並行に下がるものが含まれる可能性を考慮する必要がある。先に、土器群AのA類ⅡI形式の祖型を考える参考資料としてあげた長安馬王村出土の甬(論文(上)六三頁)などは、その可能性がある。

2 鞏啓明「關於客省莊文化的若干問題」(田昌五・石興邦主編『中国原始文化論集』文物出版社、一九八九年所収)。論文(上)一三五頁、註80参照。なお、三つの類型のうち特に石峁類型については、発掘された遺跡が神木県石峁遺跡に限られ、その内

容も類型の設定者である肇啓明氏自身が指摘するように、内蒙古中南部の遺跡や、山西、河南西部各地の龍山文化と関連する土器を併せもつ組成を示し、評価によっては、客省莊第二期文化とは別のものとして捉えるべき地域グループとも言える。

3 土器群B I期(論文(上)一〇九頁)のうち、特にI₂に相当する姬家店、北馬坊、郟県採集資料などは、二里岡期に遡る可能性は少ないとみられるが、全体の趨勢を考える意味から図24-1には、これらも加えた。

4 論文(上)一二三頁、図15-1。

5 論文(上)四九頁。考古研究所渭水調査発掘隊「陝西渭水流域調査簡報」『考古』一九五九年一二期、図版一一二。

6 張映文・呂智榮「陝西清澗李家崖古城址発掘簡報」『考古與文物』一九八八年一期、北京大学考古系商周考古実習組・陝西省考古研究所商周研究室「陝西綏徳薛家渠遺址的試掘」『文物』一九八八年六期。なお李家崖遺跡の報告者は、同遺跡を標準とする殷、周期並行の文化が陝北-晋西北に分布すると認識し、これを李家崖文化と呼称する。しかしこのような文化設定が確立されるには、いまし資料の蓄積を要するようにおもわれる。

7 李伯謙氏が石楼-綏徳類型青銅器の名称で詳しくまとめている。前掲「從靈石旌介商墓的発現看晋陝高原青銅文化的帰属」。

8 ただし、図24-3で見ると、涇河上流地域が空白のようになっていいる。これは第五節の遺跡の項で述べたように、涇河上流を代表する碾子坡遺跡において、ちょうどこの時期が碾子坡IとIIの間の未発見の空白期間に相当するためである。しかし、実際にはこの殷墟III-IV前半の期間にも涇河上流には碾子坡遺跡をはじめ土器群B碾子坡グループの諸遺跡が継続していたと考えらるべきであろう。

9 『史記』周本紀に、「諸侯聞之曰。西伯蓋受命之君。明年伐犬戎。明年伐密須。明年敗耆國。(中略)明年伐邗。」とある。文王のときに逐次周辺の諸集団を討伐し、急速に周勢力が拡張したことを伝える内容と考えられる。この中で少なくとも密須は今日の甘肅靈台付近の勢力とされ(甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」『考古學報』一九七七年二期参照)、犬戎は関中地方西北を中心とした勢力であると一般に考えられている(例えば、趙化成「甘肅東部秦和羌戎文化的考古學探索」(龔偉

超主編『考古類型学的理論與実践』文物出版社、一九八九年所収、一七〇—一七二頁。土器群Aの関中地方西部への拡張という現象は、この記事が伝える文王期の動向を間接的に反映したものと見えよう。

10 『史記』周本紀に、註9掲の記事に続いて、「明年伐崇侯虎。而作豊邑。自岐下而徙都豊。明年西伯崩。」とある。ここに見える崇が、西安老牛坡遺跡など西安近郊に知られる殷系土器群である土器群Cを主体とする先周時代の遺跡と関連することが十分に考えられる。

11 嚴密に言えば、豊鎬地区自体では土器群C主体の先周時代の遺跡は知られていない。ただ、近隣の遺跡の状況からみて今日の西安周辺地域は、二里岡期以来長期にわたり土器群Cの展開した中心的地域の一角であったと推定できる。

12 この一連の変化は、例えば紙坊頭Ⅰ（殷墟Ⅳ前半前後）↓紙坊頭Ⅱ（西周Ⅰa並行）↓紙坊頭Ⅲ（西周前期）の移り変わりに典型的に現われている（論文（上）八七頁）。

13 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覧一』吉川弘文館、一九八四年、同『殷周時代青銅器紋様の研究—殷周青銅器綜覧二』吉川弘文館、一九八六年。

14 徐天進氏前掲「試論関中地区的商文化」。

15 李峰「試論陝西出土商代銅器的分期與分区」『考古與文物』一九八六年三期。

16 飯島武次「先周文化青銅器の研究—二里岡上層青銅器の先周文化への波及—」『駒沢史学』第四一號。

17 なお表中の年代の「台西村」は、河北省文物研究所『藁城台西商代遺址』文物出版社、一九八五年の台西村一期墓と二期墓を合わせた時期で、二里岡上層の一部と殷墟Ⅰ前後にまたがる年代を含むと考えている。

18 関中型と言える青銅器として、左右対称性に崩れがある細凸線饕餮紋（図26—1）や、凸紋の上面に繩紋痕が残された特異な饕餮紋（図26—2）を施した青銅鼎。あるいは方格乳釘紋と特徴ある夔紋を組み合わせた盃（図26—4）や鼎などは典型的である。ところで鄒衡氏は、先周時代の関中地方の青銅器を、商式、商周混合式、周式に3分類しているが、本稿の「関中型」

は、ほぼその商周混合式と周式の二者を合わせた内容を含んでいる。鄒衡「論先周文化」〔夏商周考古學論文集〕文物出版社、一九八〇年所収〕。

19 その場合、非常に短期間のうちに土器群が拡散したことは、その背景に集団自体のさまざまなかたちでの拡散が考えられる。ところが製作集団と所有集団が一致するとは限らない青銅器においては、その拡散は、製作集団自体の拡散の結果である場合のほか、「服属せしめた諸族に下賜された」(武者章「先周青銅器試探」『東洋文化研究所紀要』一〇九、一七四頁)という場合が考えられる。すでに紹介したように、武者氏は方格乳釘紋盃を、文王を製作主体者として周に服属した諸族に下賜されたことを推定しているのである。このような意味での青銅器の拡散があったとすれば、それは土器群Aの拡張した範囲をさらに超えた遠隔地で、土器群A以外の土器にもなつて青銅器が出土してくる現象として最も顕著に捉えられるはずである。その実態の解明のため、さらなる資料の蓄積を期待したい。

七 西周式土器の系譜

第二節で述べたように、西周式土器とは西周の都城豊鎬遺跡の土器を標準として設定される一つの土器様式である。器種と形式の構成が安定し、器形的、紋様の特徴が漸移的に変遷する土器の伝統としての西周式土器は、西周Iaという過渡的段階を経て、西周Ib以降、特に西周II以降に明確に現われてくる。

本節では、西周前期の後半から西周中期、すなわち西周II、III期頃に見られる西周式土器の典型的な各器種を取り上げ、器種ごとにその系譜的なつながりを、先行する土器群A、B、Cならびに旧殷文化中心地域の土器、あるいは

陝北の土器群の中に遡って検討しておきたい。すでにこれまでの論述の中で指摘した点も少なくないので、ここでは要点のみをまとめる。

西周式土器を構成した主な器種として以下をあげることができる（論文（上）表2、表3参照）。

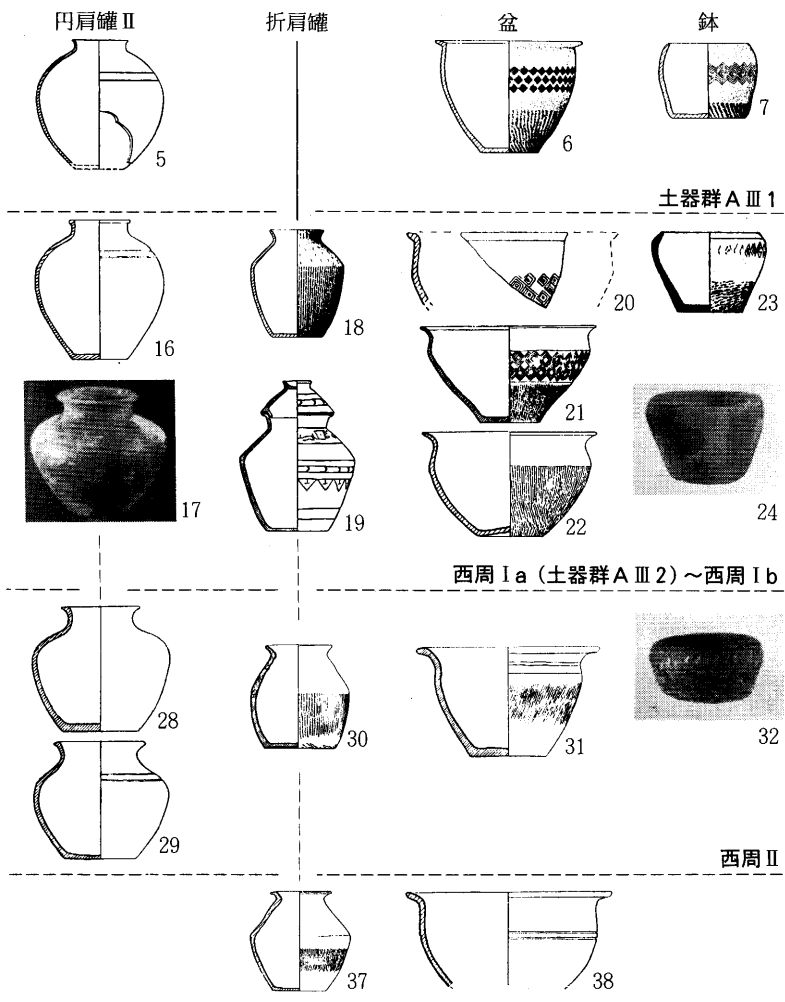
【墓】 鬲（A類、C類）、罐（折肩、円肩）、簋（A、B）が基本的構成。これに壺、甗、尊、豆、罍形器、盆、鉢、三足釜などが加わる。このうち、簋、壺、甗、尊などはもともと青銅器と共通する形態の特徴をもち、仿銅器の性格が強い。またA類鬲の中にも、西周Ⅲに入る頃から、器側に鱗状突起を付けるなど仿銅器の性格をもつタイプが盛行する。このほか西周Ⅲになると、青銅器をそのまま模倣した一回性的な仿銅器（鼎、盤など）も出現するが、こうした仿銅器は、土器自身としての系譜的脈絡をもっていない。

【生活址】 鬲（A類）、罐（折肩）、盆、甗が主要な器種で、瓮、三足釜など大型の土器や、鉢（碗）なども含まれる。また、豆、簋は西周Ⅱ頃までは比較的少数であるが、西周Ⅲには増加する。仿銅器の性格のある土器としては、簋Aや鱗状突起をもつA類鬲が西周Ⅲに見られる。

以下に、先行する各土器群から、西周式土器の各器種へ継承されたとみられる系譜を整理しておきたい。

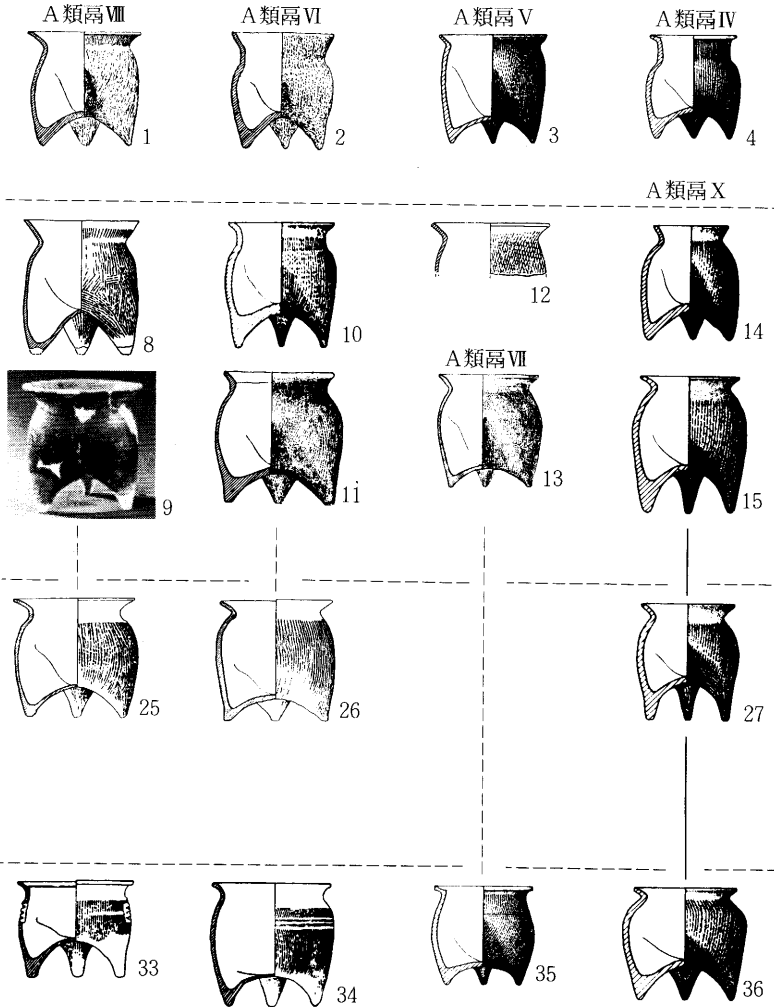
（1）土器群Aと西周式土器

西周式土器が、先行する土器群Aからその土器組成の主要な部分を継承したことは、本稿の最初から指摘してきた。西周式土器のうち墓から出土する土器として、土器群Aから継承したとみられる主な器種は、A類鬲、折肩罐、円肩罐である。このほか比較的少数出土する鉢も土器群Aの流れをくむと考えられる。また、個々の器種別に系譜的な



- 西周Ⅲ
- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|--------------|
| 19. 67張M82 | 25. 67張M71 | 31. 76張M98 | 37. 84澧M24 |
| 20. 馬王村H11 | 26. 67張M33 | 32. 57張M189 | 38. 85張・東H2上 |
| 21. 澹西莊H1 | 27. 北呂M140 | 33. 67張M56 | |
| 22. 84澧M12 | 28. 57張M178 | 34. 67張M56 | |
| 23. 澹西莊H27 | 29. 67張M71 | 35. 北呂M19 | |
| 24. 57張H148 | 30. 67張M33 | 36. 北呂M119 | |

19、21、35は1/12、3、6、10、12、18は1/16、その他1/10



- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1. 西村79M 5 | 7. 鄭家坡H19 | 13. 57張H301 |
| 2. 西村80M140 | 8. 67張M54 | 14. 北呂M 7 |
| 3. 北呂Y 1 | 9. 67張M85 | 15. 北呂M 6 |
| 4. 北呂M12 | 10. 北呂M 7 | 16. 旭光M 1 |
| 5. 壹家堡T 31③ | 11. 澗西莊H 1 | 17. 北呂M 6 |
| 6. 鄭家坡H19 | 12. 馬王村H11 | 18. 北呂M 7 |

図27 土器群Aと西周式土器〔2、7、29は1/8、4、11、16、

つながりがあるばかりでなく、副葬土器の器種構成自体、土器群Aで一般的であった鬲と罐の組合せが、西周式土器のその基本になったと考えられる。ただし、西周式土器では鬲、罐に次ぐ三番目の土器として土器群A以外の系譜をもつ簋が加わったとみることが出来る。一方、生活址に一般的な土器のうち、A類鬲、折肩罐、盆、鉢(碗)などが土器群Aを継承したものとみられる。

図27は、土器群AⅢ1↓西周Ia(土器群AⅢ2)・西周Ib↓西周Ⅱ↓西周Ⅲの各時期を通じての土器群Aの土器と西周式土器のつながりを示したものである。

A類鬲では、この間に次のような形態の変化が見られる。①三足の檔の位置がしだいに低くなる。②足尖部がしだいに低くなる。③肩部がなで肩から張り出した傾向に変わる。④口縁部外面の処理が、一般的に、全面に縄紋↓一部擦り消し↓全面擦り消し、という段階で変化する。こうした①④の漸移的变化を通じて、A類鬲は先周時期から西周期へと連続的に変遷している。またその場合、先周時期のA類鬲について設定されたいくつかの並行する形式が、西周Ⅱ以降の西周式土器中のA類鬲でも並行する複数のタイプとして後続していることは重要である。¹⁾

折肩罐では、土器群Aから西周前期にかけて、最大径の位置がしだいに低く変化しながらも、肩部を磨研し、胴部に縄紋を施す基本的特徴は継承される。円肩罐(円肩罐Ⅱ形式)では、西周Ia(土器群AⅢ2)前後に黒色磨研のものが多く、その後西周Ⅱ以降では灰陶が一般的になり、かつ器高が低くなる変化を見せるが、丸い肩部と、肩部の平行沈線、それに全体を磨研する基本的特色は継承される。このほか盆、鉢などは、土器群AⅢ1、西周Ia(土器群AⅢ2)では重菱紋が盛行したが、西周式土器では縄紋や無紋のものが一般的になり、かなり様相が変わる。しかし盆における胴上部の屈曲内傾の特徴や、鉢の口縁部の強い内湾傾向などは、西周中期以降にも継続したようである。

以上のように、土器群Aの主要な器種は、形態の漸移的变化を示しながら西周式土器の中に継承されていくことが知られる。また、各器種の系譜的つながりとともに、西周式土器の器種構成自体が、土器群Aの構成を基本として変化したものと考えられる。

(2) 土器群Bと西周式土器

西周式土器を構成する土器の中に、少なくとも直接に土器群Bの土器を継承した器種は含まれていないと考えられる。ただしこのことを明言するには、なお土器群Bの生活址の土器の内容がきわめて不十分にしか知られていない憾みがある。

土器群Bの主要な土器であるB類鬲は、豊鎬遺跡の西周I a期では墓、生活址ともに少数ながら客体的な土器として土器群Aや土器群C系統の土器と共存的に現われているが、西周I b以降まったく姿を消し、結局、西周式土器を構成する土器には加わっていない(論文(上)表2、3参照)。ただし、少なくとも西周前期のA類鬲の中には、一部にB類鬲関連の要素をもつ例のあることが指摘できる。例えば第二節と三節のそれぞれで指摘したように、西周前期のA類鬲IX形式はB類鬲VI形式と形態的に関連があり、そのA類鬲IX形式は、西周前期の中に後続している(論文(上) 図6-51)。

土器群Bは土器の組成から三つの主な地域グループに分けられたが、そのうち金河・晁峪グループと劉家グループにともなう各種の有耳罐(論文(上) 図9)は、豊鎬の西周I aにすでにともなわず、その後成立する西周式土器にもまったく見られない。有耳罐のうちのIV形式とした単耳罐の系譜は、西周期に並行する寺窪文化の中でも引き続き

行われているが、これも西周式土器の中には入っていない。

また、劉家グループと碾子坡グループに特徴的な、胴上部に数条の沈線をめぐらし、胴部にやや膨らみのあるタイプの折肩罐は、土器群Aの折肩罐と類似点はあるものの異なる系統の土器と考え、土器群Bを構成する土器とみなした(論文(上) 図10)。この土器もまた西周式土器中にはその系譜が続いていない。

さらに、土器群B碾子坡グループの生活址(碾子坡I。殷墟I、II期並行ないしそれ以前)の土器に殷系土器の要素が見られることを指摘したが、碾子坡IIの生活址が知られていないこともあって、土器群Bのなかに包含されていた殷系土器の要素のその後へのつながりが掴めない。したがってその西周式土器への継承を考える材料を欠いている。

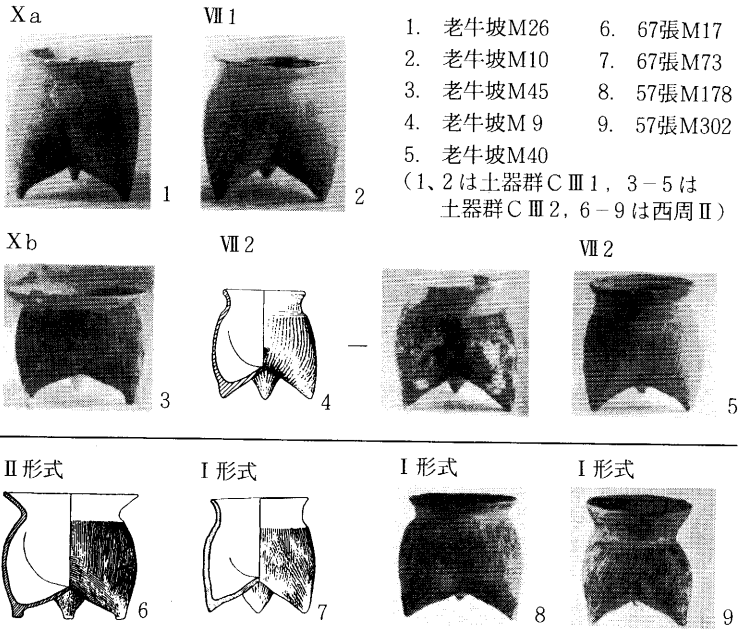
(3) 土器群Cおよび殷文化中心地域の土器と西周式土器

すでに指摘してきたように、西周式土器を構成する土器のなかに、かなり多くの殷系土器が存在している。その場合の殷系土器の来源として、二つの流れを考える必要がある。一つは、関中地方在来の殷系土器群である土器群Cに由来する土器、もう一つは、殷墟に代表される殷文化中心地域に直接的に由来する土器である。

(A) 土器群Cに由来する殷系土器

土器群Cに由来する西周式土器の器種として、西周C類鬲があげられる。第五節で、土器群CのC類鬲の遅い段階と、「西周C類鬲」の系譜上の接点を指摘しておいた。ここであらためて、両者の継承関係を確認しておきたい。²⁾

西周式土器中のC類鬲には、西周前期でA類鬲とともに副葬土器の中心となった西周C類鬲I形式と、西周中期頃から資料数が増加する円柱状足尖をもつII形式の2種がある。そのいずれも、殷墟期並行の老牛坡遺跡出土のC類鬲



1. 老牛坡M26 6. 67張M17
 2. 老牛坡M10 7. 67張M73
 3. 老牛坡M45 8. 57張M178
 4. 老牛坡M 9 9. 57張M302
 5. 老牛坡M40
 (1、2は土器群C III 1, 3-5は土器群C III 2, 6-9は西周 II)

図28 土器群C(上段)と西周式土器(下段)のC類隔(4、6、7は1/5)

にその系譜を遡ることができる(図28)。

土器群CのC類隔VII形式が、西周C類隔I形式の先行形式とみられる。両者は、まずなによりも従来から「分檔」と称されてきた、成形技法の結果としての襠の形態が共通することに加えて、幅広く擦り消された口頸部が、整然と太めの縦方向の縄紋が施紋された頸部以下とくっきりと区画された特徴が共通している。両者とも円錐状の足尖は低く、先端まで縄紋を施す。ただ、C類隔VII形式では、口縁部が稜をなして外折するものや、受口状の股墟の隔に通じる特徴が現われているが、西周C類隔I形式では、口縁は滑らかに外反するようになる。この西周C類隔I形式は、西周前期の副葬土器中に盛行し、西周中期に入るとはつきりと減少する。

一方、土器群CのC類隔X形式が、西周C類隔II形式の先行形式と考えられる。明確な「分檔」

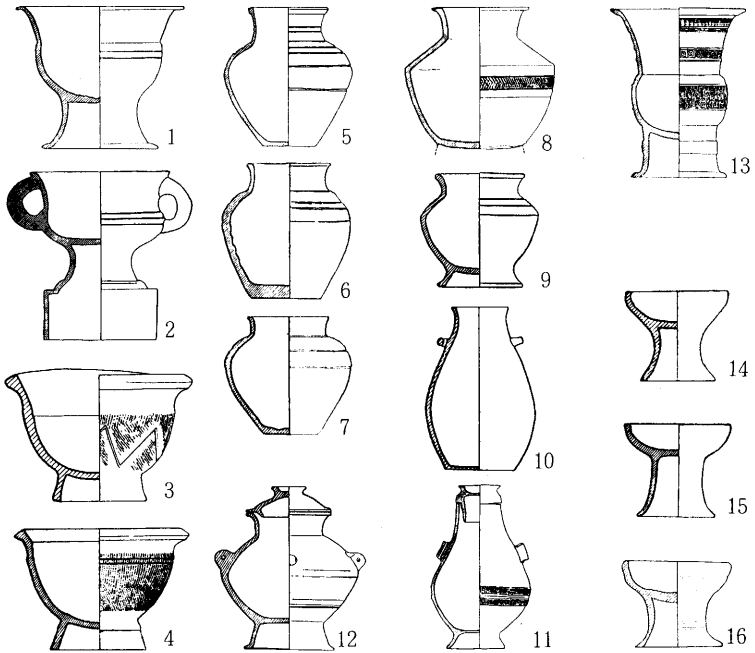
の特徴を有することから後者がC類鬲の系統に属することは確かであり、同時にC類鬲の中で、円柱状の足尖をもつタイプは、これら両者以外に知られず、両者には確実に継承関係があると考えられる⁽⁵⁾。ただし、西周C類鬲II形式の資料は、西周前期ではむしろ少数であり、中期以降にI形式に替わるようにして墓、生活址の中で増加する。

土器群Cの土器で、西周式土器との継承関係が認められるのは以上のC類鬲に限られる。土器群Cでは、殷墟期に並行する時期の様相として、老牛坡遺跡の墓の資料が知られるのみで、その墓の副葬土器としては、鬲と罐があるだけである。その罐と、西周式土器中の罐との関係は特に認められない。

(B) 殷文化中心地域に由来する殷系土器

西周式土器の中には、C類鬲のほかにも殷系土器とみられる器種が少なからず存在する。すなわち簋A、簋B、疊形器、甗、豆、壺、尊(圈足)などは、殷系土器の系譜を直接ひくか、その影響の強い土器と考えられる(図29)。これらはいずれも、殷墟出土土器の中にその先行形式と考えられる土器を指摘することができる(図30)。ここでは、『殷墟発掘報告』(以下『殷墟』⁽⁶⁾)で紹介された土器資料を主な材料として、西周式土器につながる系譜を確認しておきたい。以下に引用する殷墟出土土器の分類は、同報告書からの引用である。

殷墟出土の簋は、西周式土器の簋よりはるかに多様な形態を含む。そのうち、殷墟III、IV期頃の簋の特徴を大まかにまとめると、胴部が膨らみ、口縁部がS字状に湾曲して大きく外反し、圈足が比較的高いタイプ(図30-1-3)と、胴部から口縁部にかけて斜直に近く、比較的低めの圈足をもつタイプ(図30-4・5)がある。前者は磨研された器面に平行沈線をめぐらし、後者は縄紋と三角劃紋を施す例が多い⁽⁵⁾。このうち特に前者は、器形的に見て青銅簋の影響が強いタイプであろう。その前者が西周式土器の簋A(図29-1・2)、後者が簋B(図29-3・4)の祖型と



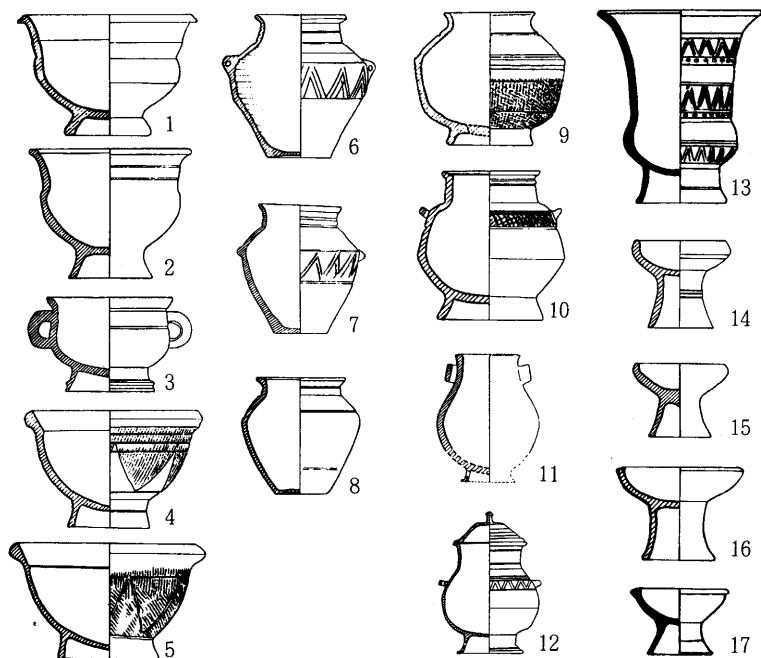
- | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 67張M71 | 5. 67張M82 | 9. 67張M50 | 13. 67張M80 |
| 2. 67張M82 | 6. 79張M 4 | 10. 84澧M37 | 14. 57客M145 |
| 3. 84澧M 3 | 7. 61張M307 | 11. 67張M130 | 15. 61張M412 |
| 4. 57張M178 | 8. 67張M73 | 12. 67張M17 | 16. 76張M 6 |

(2、5は西周I b, 3、11は西周I頃, 1、4、7、12は西周II a,

6、9、14、15は西周II b, 8、10、13、16は西周II頃)

図29 西周式土器を構成した殷系土器の一部〔11は1/16, その他1/10〕

なつたと考えられる。具体的に比較するならば、『殷墟』の簋XI、XII、XIII式が、西周前期の簋Aの例につながる特徴をもつ。図30-2の例などに見られる胴下部の膨らみと口縁下部の2条の沈線を、西周式土器の簋A(図29-1)と比較するならば、その関連は明らかであろう。ただし、西周式土器の簋Aでは、口縁部の外反が強く、圈足は高くなる。また、簋Aの中に両側に環状把手をもち、方座にのるタイプがある(図29-2)。これは殷墟でも出土する環状把手をもつタイプ(『殷墟』



- | | | | |
|---------------|----------------------------------|-----------------|------------------|
| 1. 苗圃北地 T1④ | 6. 小屯西地 M250 | 10. 苗圃北地 H 5 | 14. 大司空村 62 SM30 |
| 2. 小屯西地 T104⑥ | 7. 苗圃北地 M129 | 11. 苗圃北地 H105 | 15. 小屯西地 T112③ |
| 3. 苗圃北地 M129 | 8. 小屯 82M 1 | 12. 西区 M793 | 16. 西区 M298 |
| 4. 梅園荘 M 4 | 9. 苗圃北地 T211④ | 13. 小屯西地 T210⑤B | 17. 西区 M415 |
| 5. 后岡 H10 | (9は殷墟Ⅱ, 1、2、6、13-16は殷墟Ⅲ, その他殷墟Ⅳ) | | |

図30 殷墟出土土器〔9は1/12, 12は1/16, その他1/10〕

篋XV式相当、図30-3)が方座にのせられた形態と考えられ、西周前期に顕著な方座つきの青銅篋の出現と関係していよう。一方、篋Bに先行する殷墟出土の篋の例として、図30-4の『殷墟』の篋IX式の例をあげておく。図30-5は、殷墟期末葉の後岡H10出土の例である。なお、西周式土器中の篋Bにおいて三角劃紋を有するものは、西周Ibでは多く見られるが、西周II以降明らかに減少する。

西周式土器中で一般に円肩罐の一種として報告されている中に、比較的高い直立した口頸部をもち、肩部や胴上部に多数の

やや深く刻まれた平行沈線（旋回紋）をめぐらす平底の土器がある（図29-5-7）。本稿で疊形器と称する土器である。この土器は、殷墟出土土器のうち、『殷墟』で疊（特にⅦ式）と称された中の一部や、罐（XXIV式）（図30-6-8）などとの間に十分に継承関係が認められる。高く直立した口頸部、その口頸部から肩部にかけて複数の沈線をめぐらす装飾が両者に共通している。またこれら殷墟の土器と西周式土器の双方で、しばしば器の内面に粘土紐積み上げの痕跡とみられる波状の凹凸が特に顕著に観察されることも注意される。

西周式土器の甗は、膨らんだ器身に、大きな圈足がついた器形を呈する（図29-8・9・12）。このいわば罐形器に圈足がついたような器形もまた、殷墟出土の甗その他の圈足付土器にその系譜を求めることができる（特に『殷墟』の甗Ⅲ式）（図30-9・10）。

西周前期の西周式土器に見られる、口縁が内湾し、比較的高い脚台をもつ豆（図29-14-16）は、殷墟出土の豆の一部の形式（『殷墟』Ⅶ、Ⅷ式など）（図30-14-17）の系譜をひくと考えられる。また、西周式土器の豆ではしばしば器身の側面に数条の平行沈線（旋回紋）をめぐらす例が見られるが、これも殷墟出土の豆に常見される特徴に通じる。ただし、西周中期以降、浅く広い器身と裾の広かった圈足をもつ豆が盛行するが、このような豆は単純に殷系の豆から変化した土器とは評価できず、あるいは先周時期の土器群A生活址の土器に見られる、やはり浅く広い器身と裾広がり（豆）の圈足に特色のある豆からの影響があったことも考えられる。

以上のほか、青銅器との器形的関係がある西周式土器の壺や、尊（圈足）（図29-10・11・13）など、殷墟出土の壺、尊（圈足）あるいは罍、卣など、仿銅器的性格の強い一連の圈足付き土器（図30-11-13）の系譜をひくと考えられよう。

以上、殷系土器として西周式土器の構成に加わったとみられる器種の中で、簋A、簋Bは、鬲、罐とともに、西周式土器の副葬土器として基本的構成をなす器種である。その他の土器は、西周式土器の中では副次的存在であるが、副葬土器として多用されており、重要な位置を占めていた。土器群Cから継承されたとみられるC類鬲を含めて、殷系の土器は、西周式土器の中にあつては副葬土器を構成する土器として重要であつたことは注意される。西周式土器生活址の土器に入り込んだ殷系土器は一部にすぎない。

以上で取り上げた西周式土器に現われる殷系土器の系譜として、C類鬲を除いてはかすべてを、土器群Cではなく殷墟出土の土器に求めたのは、土器群Cの殷後期相当の土器として、C類鬲以外の器種がほとんど知られていないことに一つの理由がある。しかし、もう一つ重要な理由は、簋A、簋Bをはじめ、指摘した殷系土器の多くが、西周I a期の豊鎬遺跡に出土例が知られていない事実である(論文(上)表2、表3参照)。この時期、一方でC類鬲はすでに確実に豊鎬遺跡に出現している。つまりこのことは、同じ殷系土器と言っても、C類鬲とその他の土器では、西周式土器の構成に加わつた経緯に相違があることを予想させるのである。おそらく前者は、克殷前の豊邑造宮前後から、豊鎬地区周辺に在来の土器群であつた土器群Cの主要土器として、豊鎬の西周I a期に移入されたものであり、一方、後者のように西周I aより以降(つまり確実に克殷以降の時期)に急増した殷系土器は、克殷後に殷文化中心地域から西周の都城に移入され、当地で生産されるようになった土器であることが考えられる。西周期のC類鬲が、形態的に殷墟の鬲に直結しないいわば閔中型の殷系鬲の系譜であるのに対して、簋その他の土器は、殷墟の土器に直接の祖型を見いださうことが、右の経緯を傍証しているようにおもわれる。

なお、殷墟出土の土器として、最も普遍的な存在である觚と爵の2器種が、西周式土器にまったく継承されていな

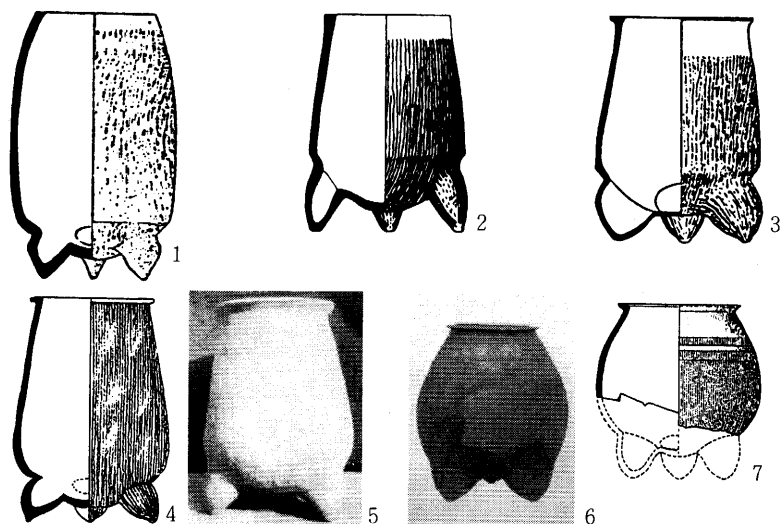
いことは、以上に述べた殷系土器と西周式土器の密接な関係にもかかわらず、殷王朝の土器組成と、西周王朝の土器組成が、その基本において異なることを端的に示している。

(4) 北方地域の土器と西周式土器

西周式土器の中に少数ではあるが三本の空足を備えた大型の甕形土器がある。これは三足瓮(蛋形三足瓮)として知られる土器で、龍山文化後期並行の時期以降、殷墟期前後に至る内蒙古中南部、陝西北部、関中地方、山西中部、山西南部、それに河北、河南の一部の遺跡から出土している。⁸⁾

三足瓮は、本来一つの系統の土器と考えられるが、各地に定着するにしたがい、いくつかの地域的な系統に分岐するようになる。現在知られる各地の三足瓮資料のなかでも、器形的に最大径が胴下部にあり、終始肥大した三空足を有するなどの点から、西周式土器中の三足瓮は、内蒙古中南部→陝西北部→関中地方とつながる系譜をひくと考えられる(図31)。それは従来から比較的研究の進んでいる山西中部、山西南部に展開した三足瓮⁹⁾とは、起源において同じであるとしても、その発展の系統においては別のものである。

西周式土器の三足瓮の系譜につらなる主な遺跡をあげると、内蒙古中南部・朱開溝遺跡(龍山後期→殷墟Ⅰ、Ⅱ)・大口遺跡(龍山後期→二里头前期)¹⁾、陝西北部・神木石峁(龍山後期→二里头期)²⁾・清澗李家崖(殷墟前半→西周中期)³⁾・綏徳薛家渠(殷墟期)⁴⁾、関中地方・臨潼鄧家莊・扶風太子蔵⁵⁾・壹家堡Ⅲ(殷墟Ⅳ)となる。関中地方の3地点のうち、壹家堡Ⅲは土器群A主体の遺跡であるが、鄧家莊と太子蔵の三足瓮が、土器群A、B、Cのいずれに關連する遺物であるのかは、共伴遺物がなく判然としない。



1. 石峁M2 2. 李家崖AT18③ 3. 薛家渠M1盜洞 4. 鄧家莊
5. 太子藏 6. 客省莊T22 7. 召陳T165G1③

図31 陝北、關中地方出土の三足釜〔1-4、7は1/20〕

そしてこれら西周以前の關中地方に波及していた三足釜の系譜を、のちに西周式土器が継承したと考えられる。西周I期の三足釜が、客省莊早期生活址で出土している(図31-6)。胴下部が大きく膨らみ同時に三足も太くなっている。時期が下がって西周III相当の例として、扶風召陳三期出土の例がある(図31-7)。胴部はさらに張りだして球体に近くなるが、外に屈折する口縁、胴上部の帯状の擦り消し紋など客省莊例の特徴を明確に継承している。このほかしばしば蓋をもつやや小型の三足釜が西周式土器にもなう^④。

西周期の三足釜は資料数こそ少ないが、西周式土器の構成に確実な位置を占めていたとおもわれる。そのことは例えば、北京にある燕国関係の琉璃河遺跡の西周前期墓^{②③}や、山西省の晋国関係の洪洞水凝堡遺跡西周中期墓^④などでも、それら遠隔の地に西周の中心地から移入された西周式土器の一器種として三

足瓮が出土している状況から立証できよう。

三足瓮の系譜に示唆される、内蒙古中南部↓陝北↓関中地方のつながりを、地域間の関係としてさらに具体的に説明することは、今後の課題である。ただ付言するならば、第四節で土器群BⅠ期のB類鬲（殷墟Ⅰ、Ⅱ並行ないしそれ以前）に見られる特徴的な凸線紋（蛇紋）が、朱開溝遺跡などに頻出する内蒙古中南部の龍山後期以降の鬲に關連することを指摘したが、このような関係は三足瓮に見られる北方地域とのつながりとともに、華北西北部を横断した地域間関係の結果とみなされる。そしてその関係は、土器ばかりでなく、前節で指摘した石椁→綏徳類型青銅器として知られる殷代の陝北周辺に展開した北方系要素をもつ青銅器群が、関中地方北辺まで南下している状況とも、同じ歴史的動向の中にあると考えられる。

(5) 西周期に存続した土器群A、Bの系譜

以上から明らかになったように、土器群Aは、西周式土器の基礎となった。しかし豊京、鎬京における西周式土器の成立が、すなわち土器群A全体の西周式土器への転化を意味するわけではない。土器群Aが早くから定着していた漆水河流域やその周辺の遺跡は、豊鎬における西周式土器の成立後も、西周式土器で構成された遺跡に転化することなく、先周時期以来の比較的単純な土器群Aの組成を保持した状況が知られるのである。

例えば、扶風北呂遺跡は、土器群AⅢ1（殷墟Ⅳ前半頃）以降、西周中期におよぶ期間継続した集落遺跡である。この間、土器の組成には強い一致性と緩やかな連続した変化が認められ、同じ一つの土器の伝統を継承した集団が残した集落址と考えられる。発掘された二百基をこえる墓の副葬土器の構成は、一貫して△鬲のみ▽ないし△鬲・

罐 ∇ が大部分を占め、西周式土器の基本的組合せのように、篋をとまうものはわずかに1例が知られるのみで、西周C類鬲やその他の器種については欠如するか、ごく少数の出土にとどまる(論文(上)四九頁参照)。一方、出土した鬲はほぼすべてA類鬲であるが、その中に、胴部が筒状に近く、足尖部が高く、肩部が強く張り出し、すばまる頸部をなすタイプが先周時期から西周中期にいたる同遺跡に終始存在している(七七頁、図27-14・15・27・36)。このようなA類鬲のタイプ(X形式)は豊鎬遺跡の西周式土器中のA類鬲からは自立した一形式と考えられる。

また、漆水河河岸に所在する遺跡のうち、先周時期から西周期にまたがって土器の様相が報告されている例として黄家河遺跡がある。⁽²²⁾ここでも北呂遺跡に相似た状況が確認できる。すなわち、第三節で、同遺跡を黄家河I(土器群A III 1相当)、黄家河II(土器群A III 2、すなわち西周I a並行)に分期したが、同遺跡ではさらに、このI、IIより層序的に時期の下がる墓14基(西周III前後)が発掘されている。このうち8基に土器がともない、その器種の組合せは、 \triangle 鬲1 ∇ 3、 \triangle 鬲1・罐1 ∇ 5であった。つまり黄家河遺跡でも、土器群Aに属する鬲、罐を除くと、篋その他の同時期の西周式土器に常見する土器がともなわない状況が認められるのである。⁽²³⁾

このように、先周時期の土器群A分布の伝統的な地域である漆水河下流域ないしその近隣の一部地域では、西周期に入っても土器群Aの単純な組成が保守的に継承されていた。ここでは、同時期に豊鎬を中心として成立していた西周式土器のうち土器群A以外に由来する西周C類鬲、篋、壺、甗、尊、豆、罍形器などが、欠如するか少数にとどまる状況があったと考えられる。西周式土器は、豊鎬と並ぶ西周の中心地である周原地区にも現われ、さらに、土器群Aが比較的遅い段階で急速に広がった地域である宝鸡地区や、涇河上流地区でも、西周期に入ると豊鎬の西周式土器に一致した内容が現われるようになる。このように西周式土器は、西周の都城において成立し、都城を中心とした政

治的影響の波及と連動して、各地に拡散していったが、もともと土器群Aが伝統的な地域では、土器群Aが比較的単純な組成のまま西周期にも存続していたのである。

次に、西周期に継続した土器群Bについて述べておく。前節でも触れたように土器群BはそのⅢ期前後（殷墟Ⅳ前半頃）以降宝鷄地区の多くの遺跡で土器群Aと共存するようになり、西周期に入ると、そのⅣ2期（西周Ⅰb頃並行）以降、ほぼその系譜が失われる。その場合に注意すべきは、土器群Bが失われていくこの時期に、宝鷄西部の一部の遺跡（晁峪など金河・晁峪グループの遅い段階）では、土器群Aとの共存状態が出現せず、比較的単純な土器群Bの組成が継続したことである。近隣で、土器群B↓土器群A、B共存↓西周式土器と変化する中で、在来的な土器群Bの組成を保持した集団があったことを物語っている。漆水河下流域周辺において、土器群Aの組成を保持した状況と対比されよう。

豊鎬地区で成立する西周式土器は、関中地方で新たに誕生した「都市」的な状況のなかで、おそらく一定の管理をうけ、專業化された集団によって比較的大量に生産された土器群である。殷系の土器が、克殷後短期間のうちに土器群Aに加わるかたちで西周式土器が成立するのも、その成立が、伝統的な土器製作の緩やかな変化によるものではなく、克殷後の殷の移民の動向を含む、集団や社会の再編成をとまなう政治的動向の結果であることを示唆している。

一方、それぞれの集落において小規模な窯を付属し、集落単位にいわば「都市」以前の自足的な土器製作を継続した漆水河下流域の土器には、都市豊鎬のような急速な変化は現われてこないのである。また、同じく小集落単位に土器が製作されても、漆水河下流域とは对象的に、周にとって新開地ともいえる関中地方西部の諸遺跡や、さらに遠隔の地（甘肅東部など）では、これらの地点を管轄する関係にあったことが考えられる王朝の中心地豊鎬の土器の組成

が、むしろ直接的に早い時期から移入されていたと考えられよう。

- 1 図27で言えば、円筒状の胴部に特徴のあるA類鬲V形式・VII形式(図27-3・13)が、図27-35などのタイプへつながる。また、VI形式(図27-2・10・11)が図27-26などのタイプへ、さらにVIII形式(図27-1・8・9)が、図27-25のタイプへとつながると考えられる。
- 2 従来、西周の「分檔鬲」と称されてきた鬲を、本稿第二節で、結論を先取りするかたちで「西周C類鬲」の名称で分類しておいた。ところで、この「分檔鬲」については、これを先周時期の「高領袋足鬲」(本稿のB類鬲)を継承した鬲とするのが従来の一般的な考え方であった(論文(上)三四頁)。これに対して、西周期の「分檔鬲」は実は殷系の鬲(本稿のC類鬲)に由来するという本稿の考え方を、筆者は以前にも口頭で述べたことがあった(一九八七年一月上智史学会大会)。しかしほぼ同じ結論を、はるかに具体的な先周時期の鬲の編年作業を通して提示した研究が、本稿執筆以前に、許倬、許永傑両氏によってなされていたことを、論文(上)発表後になって知った。ここに両氏の論文をあげて、その論点について賛意を表わしたい。許倬・許永傑「周文化形成與周人興起的考古学考察」『遼海文物學刊』一九八九年二期。
- 3 なお、殷墟など殷文化中心地域で円柱状の足尖をもつ鬲は基本的に行われておらず、したがってこれは殷文化中心地域の系譜をひく鬲ではない。
- 4 中国社会科学院考古研究所『殷墟発掘報告一九五八—一九六一』文物出版社、一九八七年。
- 5 註4『殷墟発掘報告』、図一〇五、一六九、一七〇参照。同報告の篋XI、XII、XIII式などが前者のタイプ、篋IV、VIII、IX、X式などが後者のタイプを代表する。
- 6 宝鶏市考古工作队「関中漆水下游先周遺址調査簡報」『考古與文物』一九八九年六期、図四一〇、一五、図七一—七七。ま

た西周Ⅰの『灋西』生活址早期の土器(前掲『灋西発掘報告』、図版五〇―一三)にも同系統の豆が見られる。

7 この場合、殷墟においては、簋、鬲、甗、豆、壺、尊(圈足)、罍などは、墓と生活址に共通して出土する土器であるのに対し、西周式土器においては、簋、豆が西周中期頃から生活址でかなり増加するほかは、ほとんどの土器が墓からのみ出土している。同系統の器種でも、殷墟と豊鎬ではかなり違った扱われ方をしたことが考えられる。

8 三足釜について詳しくは別の機会に論じたいと考えている。これに関しては、崔璋「夏商周三代三足釜」『考古與文物』一九九二年六期が、近年増加している資料を簡潔に整理した研究で、参照すべきである。

9 この地域の三足釜に関しては、秋山進午氏と王克林氏に詳細な研究がある。秋山進午「山西省太原西郊王門溝出土の卵形三足甗」『考古学研究』三三―三三。王克林「試論齊家文化與晋南龍山文化的關係——兼論先周文化的淵源」『史前研究』一九八三年二期。同「晋国建立前晋地文化的發展」(『中国考古学会第三次年会論文集』文物出版社、一九八四年所収)。

10 内蒙古文物考古研究所「内蒙古朱開溝遺址」『考古學報』一九八八年三期。

11 吉發習・馬耀圻「内蒙古准格爾旗大口遺址的調查與試掘」『考古』一九七九年四期。

12 西安半坡博物館「陝西神木石峁遺址調查試掘簡報」『史前研究』一九八三年二期。

13 張映文・呂智栄「陝西清澗県李家崖古城址発掘簡報」『考古與文物』一九八八年一期。

14 北京大学考古系商周考古実習組・陝西省考古研究所商周研究室「陝西綏徳薛家渠遺址的試掘」『文物』一九八八年六期。

15 趙康民「臨潼原頭、鄧家莊遺址勘查記」『考古與文物』一九八二年一期。

16 卞吉「扶風発現新石器時代大型袋足釜」『文博』一九八六年一期。

17 中国科学院考古研究所「灋西発掘報告」文物出版社、一九六三年。

18 陝西周原考古隊「扶風召陳西周建築群基址発掘簡報」『文物』一九八一年三期。

19 小型化しているが、三足釜の流れをくむ三足器がある。宝鷄紙坊頭一号墓出土のそれ(盧連成・胡智生「宝鷄強国墓地」文

物出版社、一九八八年、図三一一七（西周Ⅰb）は、丸底罐に三袋足を付けたような形態であるが、胴上部の帯状の擦り消し紋など客省荘や召陳三期の例に通じる。また長安普渡村西周墓の例（陝西省文物管理委員会「長安普渡村西周墓的発掘」『考古学報』一九五七年一期、図版五一四）（西周Ⅲ）は、有蓋で円錐状の三空足を有し、胴下部に最大幅がある。さらに、召陳五期の例（註18報告、図二一一一五）（西周後期）は、やはり有蓋であるが、やや大型の丸底罐に三空足を付したような形態を呈する。

- 20 中国科学院考古研究所ほか「北京付近発現の西周奴隸殉葬墓」『考古』一九七四年五期、図一五一四。
- 21 山西省文物工作委员会・洪洞県文化館「山西洪洞永凝堡西周墓葬」『文物』一九八七年二期、図一六一一三。
- 22 中国社会科学院考古研究所武功発掘隊「一九八二—一九八三年陝西武功黄家河遗址発掘簡報」『考古』一九八八年七期。
- 23 ただし、一九七九年、八〇年の漆水河流域の分布調査で、圈足付の壺形の土器一点が発見されている。中国社会科学院考古研究所陝西武功発掘隊「陝西武功県新石器時代及西周遗址調査」『考古』一九八三年五期、図五一七。

おわりに

以上、各章に述べてきた要点をまとめ、今後への問題を整理して本稿の結びとしたい。

1. 関中地方の土器を、西周王朝以前に遡る前提として、本稿は西周王朝の中心地豊鎬遺跡を軸とした西周前期の編年を再検討した。その結果、西周前期を西周Ⅰ、Ⅱの2時期に大別し、各期をⅠa、Ⅰb、Ⅱa、Ⅱbに細分した（表2・3、図5）。この分期を、周知の殷墟遺跡の4期分期と併せて、殷、周時代の年代的尺度として設定した。西周王朝に固有の「西周式土器」は、時期的には克殷の前後に跨る西周Ⅰa期を過渡的段階として、西周Ⅰb以降、特

に西周Ⅱ以降に西周の都城豊鎬を中心に成立した土器様式として捉えられる。

2. 西周王朝以前の関中地方とその周辺に展開した土器の系統として、本稿は土器群A、B、Cの3系統を考え、土器群別の編年の枠組みを設定した。これら土器群の編年は、それぞれに固有の鬲の変遷を軸とした土器変遷図(図6、図8・9、図20・22)と、土器群各時期の標準的単位(論文(上)六〇頁、一〇八頁、(下)三五頁)として示した。三つの土器群は、主体的な土器である鬲の系統の違いを軸に、それぞれ自立的な土器の組成とその推移が捉えられ、かつそれぞれの土器群を主体に構成された性格の異なる三つの遺跡群として分離できたと考える。自立的な動向をもつ三つの土器群、遺跡群が抽出されたことは、それぞれの土器の伝統を共有した集団の動向を考える手がかりを提供している。

3. 土器群Bについては、さらに金河・晁峪グループ、碾子坡グループ、劉家グループの主要な3者に、茹家荘グループを加えた4つの地域的グループに区分した。土器群A、土器群Cは現状では地域的グループに区分しない。各土器群の知られる最も早い年代は土器群Aが殷墟Ⅰ、Ⅱ期、土器群Bが殷墟Ⅰ、Ⅱ期ないし上限は二里岡期、土器群Cは二里岡下層期に遡る。各土器群の上限年代と、関中地方の客省荘第二期文化との間には、年代的にも土器の様相の上でも、なお大きな考古学的空白がある。

4. 二里頭期前後に相当するこの考古学的空白が埋められない限り、各土器群の起源問題は解決できない。しかしながら、各土器群の初期の分布傾向と、客省荘第二期文化の康家類型、双庵類型の分布範囲の間には一定の相関関係が認められ、それを各土器群の始源を考える一つの手がかりとして述べておいた。すなわち、土器群Cは関中地方東部の康家類型のあとにそのほぼ同じ範囲に現われ、また土器群Bは関中地方西部の双庵類型のあとに現われている。

そしてこの西周式土器の母体となる土器群Aは、土器群CとBの中間地帯、すなわち見方によってはかつての客省莊第二期文化康家類型と双庵類型の境界地帯に現われたと考えられた。

5. 4に関連して、次のことを付け加えた。土器群Cは基本的に外来の殷系土器群であり、客省莊第二期文化との間に土器系譜上の継承関係はない。その場合、それを担った集団を想定すると、土器群Cの成立は、康家類型以来の在来の集団が外来の土器文化を受け入れたか、または外来の集団が旧康家類型分布地域に入り込んだ結果と考えられる。

一方、土器群Bについては、それが双庵類型を継承し変化して関中地方西部に在来の土器群であるのか、または外来の土器群であるのかという土器の系譜上の問題が現状では明確にできない。しかし、別の視点から注意すべきは、土器群Bの同時期の西方には、辛店文化、寺窪文化が展開し、これらとの間に複雑な土器の相互関係があったことである。土器群Bとその西方の文化が相互に依存し並立する関係は、分布の構図から言えば、かつて客省莊第二期文化双庵類型とその西方の齊家文化の間にあった並立の関係を襲ったかたちとなっている。土器群Bの成立には、このような関中地方西部とその西方の土器群との相互関係が重要な背景として存在していた。

土器群Aについては、客省莊第二期文化の一部の土器(DⅡ類鬲など)を継承した可能性を指摘したが、それ以上の両者の関係は明らかではない。すくなくとも土器群Aは、客省莊第二期文化を単純に在来的に継承したものでなさそうである。なお、土器群Aの今知られる早期の分布地は漆水河下流域に集中しているが、実際にはさらに漆水河上流域あるいは関中地方北部の考古学的な空白地域にまで広がっていた可能性もあると推測した^①。

6. 土器群Aと土器群B礪子坡グループの生活址の間には、土器の組成に一定の類似が認められる。筆者はその主な原因は、この両者が殷墟Ⅰ、Ⅱ期ないしそれ以前から、関中地方北部あるいは渭河流域において、ともに関中地方

の股系土器群である土器群Cと接触し、その影響を受けていた結果ではないかと推定した。ただし、両者の直接の影響関係も一部認められた。

7. 土器群の分布関係は、殷代並行期から西周初葉にかけて時期とともに大きく変化する(図24)。その経過は第六節に述べたが、あらためて表11のかたちでまとめておく。ここに見いだされた重要な変化として次が指摘できる。

① 殷墟Ⅰ、Ⅱ期前後に、土器群C主体の遺跡が関中地方東部から西に向って拡張し、周原地区にまで至っている。この過程で、土器群Cは漆水河下流域の土器群Aと接触し、伸張する土器群Cが土器群Aの一部を周原地区に持ち込む現象も見られた(壹家堡Ⅰ)。

② 土器群Aは、殷墟Ⅳ前半前後に至る頃、まず漆水河下流域から西方に周原地区および宝鶏周辺へと急速に拡張して、関中地方西部に広く土器群A、B共存遺跡を形成する。③ ついで殷墟Ⅳ後半から西周初葉には、さらに涇河上流地域に伸張するとともに、東方の豊鎬地区に拡張して、ここを中心としてのちの西周式土器の基礎がつけられる。①~③の変化は、同時期の青銅器の動向にもこれを補足する一致した傾向が現われていた。

②は文献に伝えられる文王期における関中地方とその周辺での「周」勢力の拡張を反映したものであろう。③は、関中地方における「周」勢力拡張の最後の段階として、都城豊鎬が造営される経緯を反映したものであろう。

8. やがて都城豊鎬を中心に西周式土器が成立してくる。西周式土器を構成した土器のうち、副葬土器は、鬲(A類、C類)、罐(折肩、円肩)、簋(A、B)を主体とし、副次的に壺、甗、尊、豆、壘形器、鉢、盆、三足釜が加わる。生活址では、鬲(A類)、罐(折肩)、盆、甗を主として、釜、三足釜など大型の土器や鉢(碗)、さらに西周中期からは豆や簋が増加した。

これらのうち、A類鬲、罐、盆などの主体的土器や、鉢、豆の一部は土器群Aの系譜をひく。また土器の器種構成

表 11 渭河流域における地区別の土器系統の構成

殷文化中心地域/ 豊鎬遺跡の時期	西安以西	豊鎬地区	漆水河下流	周原地区	宝鸡付近	宝鸡南部	宝鸡西部
二里岡下 二里岡上	C C	?	?	?	B?	B?	?
殷墟Ⅰ・Ⅱ	C	?	A+C+(B)	C+(A)+(B)	B		
殷墟Ⅲ	C	?	A+(B)	B	B		
殷墟Ⅳ前半	C+(A)	A?+(B) +C?	A+(B)	A+B	A+B		
西周Ⅰa* (克殷前後)	A+C	A+(B)+C	A+(B)	A+B	A+B	B +(寺窪系) +(四川系)	B +(寺窪系)
西周Ⅰb	西周式	西周式	A +(西周式) +(B)	西周式 +(B)	西周式 +(B)	西周式+(B) +(寺窪系) +(四川系)	B +(寺窪系)

涇河上流
B?
B
A+B +(寺窪系)
西周式 +(B) +(寺窪系)

1 () 表示は、() 内土器群に属する土器が少数客体的に存在するか、もしくはその(紋様、形態上の)影響が見られる。

2 比較的単純な土器群Aの組成が主体的。

3 土器群Aを主体に土器群BあるいはCが共存的。

4 土器群Aを中心に成立した西周式土器が主体的。

* 西周Ⅰaは、豊鎬遺跡の一時期で、年代的には殷末葉から西周初葉(推定成王期前半頃まで)に跨る。殷墟Ⅳ後半に並行する時期を含む。

自体が土器群Aのそれを基本としたものと言えよう。一方、西周C類鬲は関中地方に在来の殷系土器群である土器群Cからの継承と考えられ、その他の壺、甗、尊、罍形器、豆などは同じ殷系土器でも、克殷後に殷文化中心地域から移入された可能性が高い。そして、土器群Bから西周式土器に直接継承された土器はまったく存在しない。三足釜は、陝北の土器群から殷墟期並行の時期に関中地方にもたらされていた土器の系譜をひくもので、関中地方在来の土器群とは別の流れをくむ土器である。

このように、西周式土器の基本的組成は土器群Aの継承によってつくられており、これに主として副葬土器の領域で、土器群Cならびに殷文化中心地域から移入された殷系土器が比較的大きな部分を占めたと考えられる。関中地方西部を中心に古い伝統をもち、先周時期の遅い段階では土器群Aとの共存的関係を形成していた土器群Bは、最終的にはこの西周式土器の構成には加わっていないのである。

9. 西周式土器の成立によって、先周時期以来の土器群A、B、Cがすべてその中に融合されたり、ただちに消失したりしたわけではない。土器群Aが伝統的に行われてきた漆水河下流域周辺の集落遺跡では、都城豊鎬を中心に西周式土器が成立して以降も、先周時期以来の伝統的な土器群Aの組成が保持されている。この両者の関係は土器製作の現場の視点から見れば、旧来からの集落単位の自足的で小規模な土器製作の伝統と、管理された都市において、専業化した集団によって生産された土器の伝統との対比として捉えることもできる。克殷後、短期間のうちに旧殷系の土器が西周の都城に導入された動向は、けっして緩やかな土器の情報交換や交易によるものではない。それは、克殷後の殷の移民をも含む集団の再編成をとまなう変化の中での、王朝に掌握された都市の組織的な生産を背景としてはじめて理解することができる。西周式土器の成立には、文化の系譜論を超えて、こうした歴史状況の反映した側面が

ある。

一方、土器群Aの関中地方西部への拡張の結果、この地域の多くの遺跡は、土器群B主体↓土器群A、B共存↓西周式土器主体と変化した。関中地方最西端の地域では、少なくとも西周I b並行頃までは比較的単純な土器群B（金河・晁峪グループ）の組成が保持されている。

10. 現有の資料の不足もあって、本稿で推論の及ばなかった問題として、文献に伝えられる周勢力の「周原」への移動という問題がある。それが歴史的事実とすれば、土器群Aを西周王朝の土器の母体であると結論した本稿の視点からは、その土器群Aが、おそらく殷墟Ⅲ期頃にいずれかの方面で大きな移動や拡張の動きを示したことが期待されるが、現状では捉えられていない。周原の中心地がどこに所在したのかという必ずしも解決されていない問題とも絡んで、今後の関連資料の増加に期待したいとおもう。

本稿の執筆にあたって、陝西省考古研究所、中国社会科学院考古研究所、西北大学、周原博物館、扶風県博物館、宝鸡市博物館、北京大学など、多くの研究機関の方々からご教示をいただきました。ここに記して感謝いたします。

1 「周」文化の起源地はどこかという問題は、その問題設定の仕方によっては随分と意味の異なるものになりうる。もし西周王朝の土器の主体になった系統の起源地という視点で考えるならば、その問題は本稿の結論からして、土器群Aが最初に形成された場所を求めるといふ問題になる。しかし、繰り返し述べてきたように、現状では資料が十分ではなく、土器群Aの早期の分布地として、漆水河下流域（を含む）地域が知られることと、早期の土器の一部が各省在第二期文化と関連するであろう

と云う以上の推論はできない。

「周」の「起源地」について、従来からある一つの有力な説は、錢穆氏の研究（同「周初地理考」『燕京學報』第一〇号、一九三二年）以来行われてきた山西に起源を求める考である。考古学における山西起源の主張としては、鄒衡氏に太原付近の光社文化にそれを求める説（鄒衡「論先周文化」『夏商周考古學論文集』文物出版社、一九八〇年、同「再論先周文化」『周秦漢唐考古與文化國際學術會議論文集』西北大學學報編集部、一九八八年）がある。この説に対して一つ指摘できることは、光社文化と関中地方の双方に見られる三足釜の問題である。光社文化に特徴的な三足釜は、その形態的特徴が、山西中部の在地的な系統のそれであり、一方、関中地方に波及した三足釜は、陝北で発達した別の系統の三足釜と考えられるのである。また、「周」の起源地を、涇河上流の碾子坡遺跡などに関連させて論ずる説がある（中国社会科学院考古研究所涇渭工作隊「陝西長武碾子坡先周文化遺址發掘記略」『考古學集刊』一六、李峰「先周文化的內涵及其淵源探討」『考古學報』一九九一年三期）。これらの所説では、碾子坡遺跡の少なくとも早い段階（本稿の碾子坡Ⅰ）を遷岐以前の「周」の遺跡と考え、その文化が関中地方に南下してのち、鄭家坡遺跡に代表される文化を残し（李説）、西周の文化の基礎をつくったと考える。しかし、本稿は、碾子坡の様相を土器群Bの一地域グループと位置づけ、これを鄭家坡遺跡を含むのちの西周式土器の母体となった土器群Aとは本来的に別の系統として理解したのであった。

従来の諸説にかわるいわゆる起源地説を、本稿は用意できないでいる。しかしいづれにしても土器群Aの由来から考える「周」文化の起源の問題を、筆者は関中地方に限定して考えるべきではないとおもっている。土器群Aの起源地という観点では、かりにその土器群が形をととのえ、定着した場所がいま知られる漆水河下流域やその近隣の比較的せまい範囲であったとしても、その土器群が単純に客省莊第二期文化を継承したものではないと推定される以上、その系譜的歴史的な位置づけは、結局龍山文化期以降に、華北西北部の広い範囲で横断的に展開したであろう地域間関係を考慮しなければならない問題である。

挿図出所 (引用した図の多くに最小限の改変を加えた)

図一 『蘇秉琦考古学論述選集』、一一一頁、
図二を改変。

図二一 『澧西発掘報告』、図版五〇。

二 筆者撮影。

三 『文物』一九八八年六期、一七頁、図一

七。

四、五 『蘇秉琦考古学論述選集』、図版一。

六 『武功発掘報告』、図版五八。

七 『澧西発掘報告』、図三六。

図三一 『考古学報』一九八〇年四期、四五九頁、
図三。

二

同、図版四。

三六 同、四六二頁、図八。

七八 『考古』一九八四年九期、図版一。

九 同、七八二頁、図八。

一〇、一一 『文博』一九八五年二期、二頁、図四。

一三、一五 『文博』一九八五年五期、図版一。

一六、一七 『考古学報』一九八〇年四期、図版五。

図四一、三、八 『文物』一九七九年一〇期、五三頁、
三。

二、四、五、七、九 『考古』一九八七年一期、一七頁、図四。

六 同、一六頁、図三。

図五一、三 『考古』一九八四年九期、七八二頁、
一〇。

二、四、三、五、七、九 『考古』一九八六年三期、二〇一頁、
七。

五、八 『考古学報』一九八〇年四期、図版八。

六、七 『考古』一九八四年九期、七八二頁、
八。

九、一、二、三 同、図版五。

一〇 同、四五九頁、図三。

一三、一四、一三、三 同、四六〇頁、図四。

一五、一七、一八、二〇 同、四九〇頁、図三六。

一六、一九 『考古』一九八七年一期、二六頁、
四。

三三、三四、四一 『考古学報』一九八〇年四期、四七一頁、

図一八。

二四、七三 『澧西発掘報告』、図版七一。

二五、二六 『考古学報』一九八〇年四期、四八三頁、

図二六。

二九、三〇、三三 同、四八八頁、図三三。

三〇、三二 『考古』一九六二年一期、二二頁、図三〇。

図六一、六四九 『文物』一九八四年七期、五頁、図一一。

三 『西周史研究』(人文雜誌叢刊二)、卷末

写真。

一〇、一一 『考古與文物』一九八九年六期、九頁、

図二〇。

三二、四四 『文物』一九八四年七期、一四頁、図四

八。

一五、一六、一八、二〇、二五、二六、三三 同、九頁、図二六。

一七、一九、二六、二八 『考古與文物』一九八九年六期、一二頁、

図四。

二七、三〇 『文物』一九八四年七期、一四頁、図四

四。

西周式土器成立の背景(下)

二六、三〇、三三 『考古與文物』一九八九年六期、一五頁、

図七。

三三、三三、三三 『文物』一九八四年七期、三三頁、図三。

三三 『考古與文物』一九八二年四期、一九頁、

図五。

三三 『澧西発掘報告』、図六三。

三三 『文物』一九八四年四期、三一頁、図二。

三三 『文物』一九七九年一〇期、五三頁、図

三。

三三 『考古』一九六二年六期、三〇八頁、図

八。

三三 『澧西発掘報告』、図六一。

三三 『考古学報』一九八〇年四期、図版五。

三三 『武功発掘報告』、図六〇。

三三 『考古』一九八八年七期、図版一。

三三 『文物』一九八四年七期、図版三。

三三 『考古』一九八六年二期、図版一。

三三 『武功発掘報告』、図九八。

『蘇秉琦考古学論述選集』、六一頁、図

三。

四

『文物』一九八四年七期、五頁、図一。

図八一、九

『考古学集刊』六、図版一五。

二、三四

同、一三五頁、図一三。

五、六

『考古』一九八五年九期、八五一頁、図

二。

七、二

『考古学集刊』六、一三二頁、図九。

八、一〇

『考古』一九八九年六期、三六頁、図三。

三

『考古』一九五九年一期、図版一。

二、三

『文物』一九八四年七期、九頁、図二六。

一四、一六、一八、三三

同、一二頁、図一〇。

一五、一〇、一六

同、一九頁、図一。

一九

同、二八頁、図三四。

二、三

『考古学集刊』六、一三七頁、図二五。

二、四

『考古』一九八四年九期、図版一。

二、五

『文物』一九八九年五期、五〇頁、図五。

二、七

『文物』一九八四年七期、二七頁、図一

八。

一六、一五

『考古與文物』一九八二年四期、一九頁、

図五。

三

『文物』一九八四年七期、二六頁、図一

六。

三

『考古與文物』一九八六年一期、図版二。

三

『文物』一九八九年六期、二六頁、図八。

三

『文物』一九七九年一〇期、五三頁、図

三。

一四、一五、一四

『考古』一九七六年一期、三八頁、図一

一。

一六、一四、一三

『考古與文物』一九八〇年創刊号、図版

三。

一七

『考古』一九七六年一期、三七頁、図一

〇。

一六

『考古與文物』一九八二年四期、二二頁、

図八。

一六、一四、一四、一五

『考古與文物』一九八五年二期、四五頁、

図四。

一〇

『考古』一九八四年九期、七八二頁、図

一〇。

四	『文物』一九八九年五期、五九頁、図七。	〇。
四	『蘇秉琦考古学論述選集』、図版一。	一八
四	『考古学報』一九八〇年四期、四五九頁、 図三。	六。
四、四	『考古』一九八八年七期、六〇五頁、図 一〇。	図一〇一
五、五	『考古学集刊』六、図版一七。	二
五	『考古』一九八三年五期、図版二。	三
五	『宝鷄強国墓地』、図七。	図一一一
五	『蘇秉琦考古学論述選集』、図版二。	二、三
図九一、一三、二七	『考古』一九八五年九期、八五一頁、図 二。	図一二
四七、九	『文物』一九八四年七期、一九九頁、図二。	図一三一、二
五、六、八、一〇、一一	同、一二頁、図一〇。	三
二	『文物』一九八九年五期、五〇頁、図五。	四一六
一三	『文物』一九八九年六期、二八頁、図八。	図一五二、三、六、九、二
一四	『文物』一九八九年六期、三六頁、図四 一。	二、七、八
一五、一六	『文物』一九八九年五期、五二頁、図一	図一六一、一六
		七、一〇
		同、七頁、図四。
		『考古』一九八四年七期、二六頁、図一
		『考古学集刊』六、一三三頁、図一〇。
		『文物』一九八四年七期、一九頁、図二。
		『考古與文物』一九八六年一期、四頁、 図七。
		『宝鷄強国墓地』、図五。
		同、図六。
		筆者編。
		『文物』一九八八年三期、一一頁、図七。
		同、一四頁、図一一。
		『青海柳湾』、図一四三。
		『日本中国考古学会会報』二、二八頁、 図八に加筆。
		『考古学集刊』六、一三三頁、図一〇。
		同、一三二頁、図九。
		『考古』一九九三年三期、六頁、図三。

二一五 同、八頁、図五。

六一二四 同、九頁、図六。

図一七、一五八 『文物』一九八八年六期、九頁、図一二。

二、三、四 同、一一頁、図一七。

図一八一 『文物資料叢刊』五、二二〇頁、図二。

二 同、一一〇頁、図三。

三 同、一二二頁、図八。

四 同、一二二頁、図五。

五 同、一二二頁、図六。

六 同、一二二頁、図九。

七 同、一二二頁、図四。

八 同、一二二頁、図七。

図一九 筆者編。

図二〇

一、三、四、七、二、六、七 徐天進「試論関中地区商文化」(碩士論文)、図三。

文)、図三。

二六八 『考古與文物』一九八二年三期、五二頁、

図一〇。

九 『考古』一九九三年一期、一一頁、図七。

一〇 同、六頁、図三。

三、八、九、三 『考古與文物』一九八九年五期、六頁、

図三。

一三 『文物』一九七七年二期、八四頁、図

一。八五頁、図五。

一四 『考古』一九八三年五期、三九四頁、図

五。

一五、三 『文物資料叢刊』八、三一頁、図一一。

二〇 『考古與文物』一九八九年六期、一二頁、

図四。封一。

三 『考古』一九九三年一期、一二頁、図八。

二四、三 『文物』一九八八年六期、一六頁、図二

六。

六 『文物資料叢刊』五、一二二頁、図六。

図二一一 『考古』一九八三年五期、図版二。

二 『西周史研究』(人文雜誌叢刊二)、卷末

写真。

三 『考古』一九八三年五期、三九四頁、図

五。

四 『考古』一九九三年一期、七頁、図四。
五 『考古與文物』一九八九年六期、一二頁、
図四。

図三二一 『考古學報』一九八〇年三期、三一四頁、
図四。

二七、九二、二五三、二六
徐大進「試論閩中地區商文化」(碩士論
文)、図三。

八、一〇、一四 『考古學報』一九八〇年三期、三一七頁、
図二一。

一三 『考古與文物』一九八一年三期、五二頁、
図一〇。

一三 『紀念北京大學考古專業三十周年論文集』、
二一九頁、図五。

一六、三三 『文物資料叢刊』八、八一頁、図一一。

一七、一八、二〇、三三 『考古』一九九三年一期、六頁、図三。

一九 『文物』一九七七年二期、八二頁、図
一。
二四 『考古與文物』一九八〇年創刊号、九頁、
図二。

二五、二七 『考古』一九九三年一期、六頁、図三。
二八、三〇 『文物』一九八八年六期、二〇頁、図四
〇。

図三二二 『鄭州二里岡』、図一。

三 同、図二。

四 『殷墟發掘報告』、図七。

五 同、図一六七。

六 『葉城台西商代遺址』、図六六。

七 『殷墟發掘報告』、図八。

八九 『殷墟發掘報告』、図一六七。

一〇 『文物』一九八九年三期、一六頁、図一
五。

二 『殷墟發掘報告』、図四。

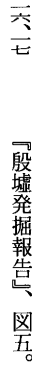
三 『中國考古學研究』(文物出版社)、一二
一頁、図五。

一三、一五 『考古學報』一九七九年一期、六三頁、
図四八。


一四、一六 同、六五頁、図四九。


一五 『中國考古學研究』(文物出版社)、一二

二頁、。

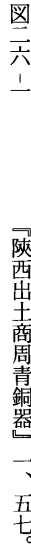
一六、七 『殷墟發掘報告』、。

二〇 『中国考古学研究』（文物出版社）、二二

三頁、。

 筆者編。

 筆者編。

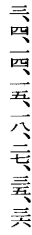
 『陝西出土商周青銅器』一、五七。

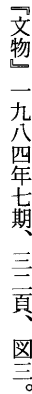
二 同 一、一二七。

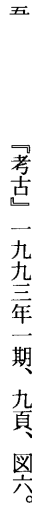
三 同 四、六。

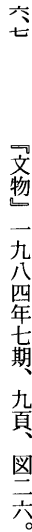
四 同 四、八。

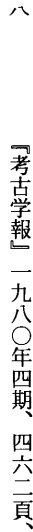
 『考古與文物』一九八二年四期、一九頁、。



『文物』一九八四年七期、三三頁、。

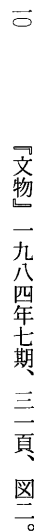
五 『考古』一九九三年一期、九頁、。

六 『文物』一九八四年七期、九頁、。

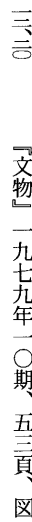
八 『考古學報』一九八〇年四期、四六二頁、。

。

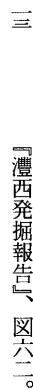
九 同、。

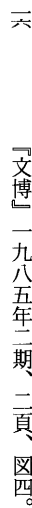
二〇 『文物』一九八四年七期、三二頁、。


二一、三、三


二二、『武功發掘報告』、。

二三、『文物』一九七九年一〇期、五三頁、。

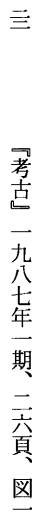
二四 『灋西發掘報告』、。

二五 『文博』一九八五年二期、二頁、。

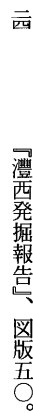
二六 『文物』一九八四年七期、。

二七 『考古學報』一九八〇年四期、四九〇頁、。

二八 。

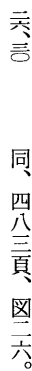
二九 『考古』一九八七年一期、二六頁、。

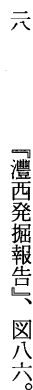
三〇 四。

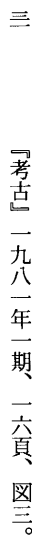
三一 『灋西發掘報告』、。

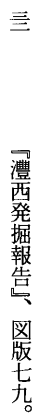
三二 『考古學報』一九八〇年四期、四八八頁、。

三三 。

三四 同、四八三頁、。

三五 『灋西發掘報告』、。

三六 『考古』一九八一年一期、一六頁、。

三七 『灋西發掘報告』、。

三八 『考古學報』一九八〇年四期、四八四頁、。

図二七。

三七 『考古』一九八七年二期、二八頁、図一

五。

同、一七頁、図四。

図二八一 『文物』一九八八年六期、一七頁、図二

八。

二 同、一七頁、図二七。

三 同、一九頁、図三九。

四 同、一八頁、図二六、三七。

五 同、一八頁、図三八。

六 『考古学報』一九八〇年四期、四七一頁、

図二八。

七 同、四八八頁、図三三。

八 『澧西発掘報告』、図版七一。

九 同、図版七四。

図二九一、八 『考古学報』一九八〇年四期、四八八頁、

図三三。

二、五、三 同、四九〇頁、図三六。

三、一〇 『考古』一九八七年一期、二六頁、図一

西周式土器成立の背景(下)

四。

四四 『澧西発掘報告』、図八六。

六 『考古』一九八六年三期、二〇一頁、図

七。

七五 『考古』一九八四年九期、七八七頁、図

五。

九二、三 『考古学報』一九八〇年四期、四七一頁、

図一八。

一六 『考古』一九八一年二期、一六頁、図三。

図三〇一、二 『殷墟発掘報告』、図一〇五。

三七 『考古』一九八九年二期、一三一頁、図

一一。

四 『殷墟発掘報告』、図一七〇。

五八 『殷墟青銅器』、図七。

六 『殷墟発掘報告』、図一七六。

九 『殷墟発掘報告』、図一一七。

一〇 『中国考古学研究』(文物出版社)、一一二

三頁、図七。

二 『殷墟発掘報告』、図一〇九。

一〇九

三 『考古學報』一九七九年一期、七三頁、
図五三。

三 『殷墟発掘報告』、図一一九。

四 『殷墟青銅器』、図五。

五 『殷墟発掘報告』、図一〇六。

六 『考古學報』一九七九年一期、図五一。

七 『史前研究』一九八三年二期、九五頁、
図四。

二 『考古與文物』一九八八年一期、五一頁、
図七。

二 『考古與文物』一九八八年一期、五一頁、
図七。

三 『文物』一九八八年六期、三三頁、図九。

三 『考古與文物』一九八二年一期、七頁、
図一一。

四 『文物』一九八八年六期、三三頁、図九。

四 『考古與文物』一九八二年一期、七頁、
図一一。

五 『文博』一九八六年一期、図版四。

六 『濃西発掘報告』、図版七。

七 『文物』一九八一年三期、二〇頁、図一
一。

一。